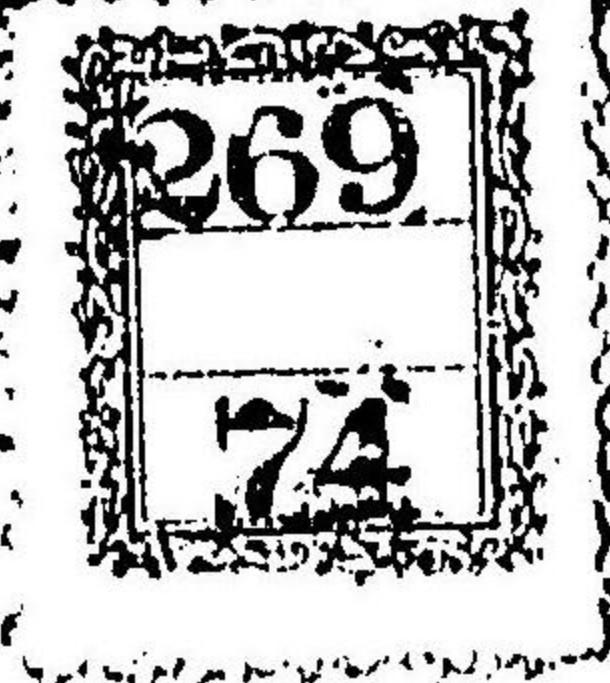


比羅宮記



014023-000-4

特18-149

金刀比羅宮記

金刀比羅宮社務所

第一課／編

M45

ABB-0276

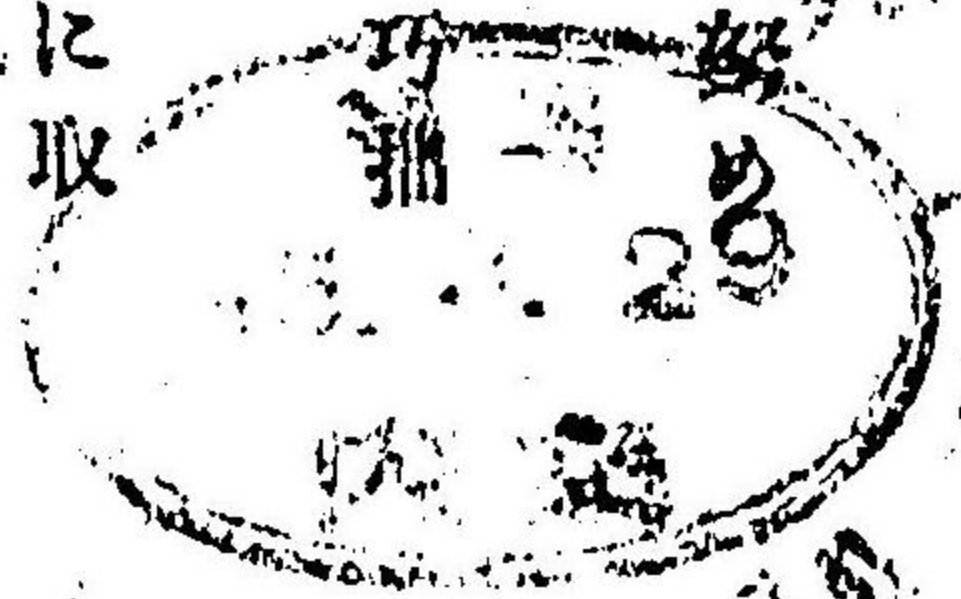


凡例

- 一 本誌は金刀比羅宮の参拜者に便せむが爲編輯せるものなれば、極めて通俗なる文辭を用ゐたり
- 一 當宮に關する詩歌にして實況を推想するに足るべきは古今と巧拙を論せず之を輯録せり
- 一 表紙模様中表面上部の横劃は材料を當宮所藏國寶辨才天圖中に取り下部の燈籠は世に奈與竹形と稱せらるゝものにして同國寶奈與竹物語繪卷中に取りまた金刀比羅宮記の六字は宮内省御歌所參候大口綱二氏の筆になる
- 一 寶物に關する凡例は其目錄の始に別記せり
- 一 本誌は明治四十年五月初版を發行せしが今回訂正増補の上再版す

明治四十五年

編者 識



索引

第一章 總說

本宮概說

本宮沿革

第二章 祭儀

祭典

大祭

櫻花祭紅葉祭

御田植神事

頭人

東遊

神主舞諸司舞 (大和舞)

八少女舞

第三章 鏡內

一頁

二頁

二頁

二頁

三頁

四頁

五頁

五頁

琴平山 (象頭山)

大 門

(清少納言塚)

鼓 樓

清 塚

崇敬講社本部

櫻馬場

青葉岡

寶物館

御 廡

茶 堂

木馬舍

末社 援戶社

末社 烈戶社

末社 火雷社

長 廊

賢 門

二

一七

一九

一〇

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

遙 拜 所

園 畔

進 籠 橋

末社 眞須賀神社

御前 四段坂

末社 御年神社

末社 事知神社

本 宮

竹 林

本 宮 直 所

神 樂 殿

本 宮 眺 望

本 宮 神 饌 殿

眞名井貯水池

防火用水道

三

二七

二七

二七

二七

二八

二八

二八

二八

二八

二八

二八

二八

二八

二八

二八

飲用水道	三三
末社殿魂神社 (奥社)	三四
威德巖	三五
渡殿	三五
末社陸魂神社	三五
神庫	三六
神興庫	三六
南神饌殿	三六
末社三穗津姬社 (御別宮)	三六
攝社白峰神社	三六
南直所	三六
稜除殿	三六
繪馬舍	三六
齋舍	三七
末社常磐神社	三七

末社菅原神社	三七
末社殿島神社	三七
御炊舍	三七
末社大山祇社	三八
末社旭社	三八
社務所立關	三八
神札所	三八
保存會事務所	三九
社務所表書院	三九
同鶴之間	三九
同虎之間	三九
同七賢之間	三九
同二之間	四〇
同表上段	四〇
同富士之間	四〇

林泉	四〇
社務所與書院	四一
同柳之間	四一
同菖蒲之間	四一
同春之間	四二
同與上段(三之間)	四二
同與上段(花之間)	四二
神苑及寶物館	四三
神苑總說	四三
第一節 青葉岡	四五
噴水	四五
大捷紀念碑	四七
丹頂	四七
八珊七重野砲	四七
聽泉亭	四七
十五珊加農砲身	四七

羅	四七
八珊七青銅砲	四七
寶物館	四八
閑院宮御手植松	四九
東宮行啓記念松	四九
記念碑	五〇
曉雲亭	五一
第二節 常磐森	五一
第三節 待霄山	五一
五鹿松	五一
古帳庵句碑	五一
第四節 時雨岡	五二
第五節 不老山	五二
第六節 涼杜	五二
第七節 千種臺	五三

第五章 雜記

第十一節	朝日岡	青嵐亭	五彩園	噴水地	日曬園	逆木門礎石	茶庭	掬翠亭	第八節	藤溪	緣之橋	第九節	袖岡	芭蕉句碑	第十節	小杉森	第十一節	朝日岡
------	-----	-----	-----	-----	-----	-------	----	-----	-----	----	-----	-----	----	------	-----	-----	------	-----

五三
五三
五三
五四
五四
五四
五五
五五
五五
五六
五六

第六章 境

職制	境外末社	貴紳參拜	建物統計	水道統計	鳥居統計	石階敷石玉垣統計	立燈籠統計	高麗狗統計	水槽石碑統計	社設電話統計	琴平山面積并區分	外	琴平町	官衙公署
----	------	------	------	------	------	----------	-------	-------	--------	--------	----------	---	-----	------

五九
五九
六〇
六一
六二
六三
六三
六三
六四
六四
六四
六四
六五
六七
六八

琴平公園	六八
金刀比羅宮神事場(御旅所)	六八
同 南神苑	六九
同 宮 鞘橋(浮橋)	七一
同 宮 高燈籠(北神苑)	七二

○寶物目錄

同 凡例	七三
同 索引	七五
同 目錄	八一
同 統計 (整理上區分)	二〇五
同 統計 (品種上區分)	二〇五
同 宸翰索引	二一
同 御筆索引	二一
同 作者索引	二二

繪畫之部	二二
彫刻之部	二一
墨蹟之部	二一
刀劍之部	二九
諸工藝之部	二一

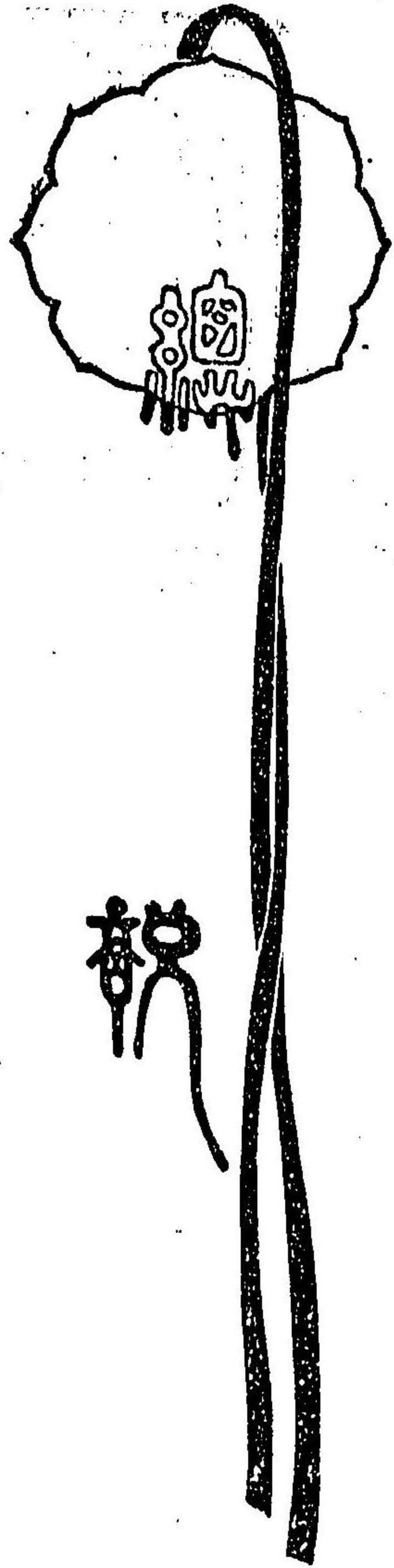
○挿圖目錄

一 東遊圖 (伊東紅雲畫)	一五
一 大和舞圖 (同人畫)	一六
一 八少女秘曲舞圖 (同人畫)	一七
一 八少女舞圖 (同人畫)	一八
一 琴平山全景	一八の二
一 櫻馬場圖	二二の二
一 賢木門圖	二二の二
一 本宮圖	二八の二

一本宮眺望	三二の二
一嚴魂神社圖	三二の二
一旭社圖	三六の二
一社務所表書院圖	三八の二
一同内景	三八の二
一寶物館圖	四二の二
一神苑青葉圖	四四の二
一同時雨圖	四四の二
一同待雲山圖	五二の二
一同藤溪圖	五二の二
一同千種壺掬翠亭圖	五四の二
一同朝日圖	五四の二
一神事場圖	七〇の二
一鞘橋圖	七二の二
一高燈籠圖	七二の二

一國寶奈與竹物語繪卷の一部	八二の二
一勅納御短刀圖	八六の二
一御料御硯箱圖	八六の二
一國寶辯才天圖	〇〇の二
一國寶瀑布圖	〇〇の四
一釋迦三尊二天四天王十羅刹像	〇八の二
一蘭亭圖	一一の二
一奥書院襖并床張附圖	一一の二
一太刀圖	一八の二
一古鏡圖	四四の二
一觀世音菩薩木像	四四の二
一十種香宮并古銅經筒圖	八八の二
	九〇の二

特18
149



第一章 總 說

◎本宮概説 金刀比羅宮は香川縣設岐國仲多度郡(舊名那珂郡といふ後多度郡と合併今の名に改めらる)琴平山(一名象頭山)に鎮座あり國幣中社にして祭神は大物主大神なり永萬元年に至り 崇徳天皇を合祀し奉る謹みて按するに 大物主大神は 建速須佐男尊の御子 大國主神の和魂神に御座す夙に大八洲の國土經營に御心を傾けさせ給ひ農業殖産に漁業航海に百般の事業爲に大に興る後世其餘徳を被らぬはなし大神また英武絶倫にましまして國土大に治る經營成るや國を擧げ

て天孫に捧げ給ふ神威赫々たる亦宜なる哉御相殿に鎮座す 崇徳天皇は 鳥羽
 天皇の皇子に御座して諱は顯仁と申し保安四年正月寶算五歳の御時御即位ありしか
 永治元年十二月七日故ありて御讓位あらせられ保元元年の戦亂に際し當國綾松山に
 遷らせ給ふ九五の尊を以て松嶽淋しく怒濤物凄き邊陲に籠居あらせ給ひしは畏しと
 も畏き眼なり長寛二年御壽四十六を以て崩御まします 天皇御在世のみさきり當宮
 を尊崇し給ふ事斜ならず長寛元年御參籠あり境内古籠所といへる地即此舊跡なり崩
 御の翌年即永萬元年七月御靈を迎へて當宮の御相殿に齋き奉る實に今を距る事七百
 數十年なり。

この神の大御光のかしこさは外國までも仰くどろきく

大勳位晃親王

大君の御代を八千代と瑞垣にいのる誠は神もうくらん

文秀 女王

○沿革 當宮鎮座は太古に属し年月詳ならず舊記に鎮座已に三千年に垂んとすと
 あり維新前は象頭山金毘羅太權現と稱し上古より衆庶の欽仰深きは素より歷朝
 皇室の御崇敬亦甚厚く 後嵯峨天皇御宇寛元元年勅命を以て祭儀を修めしめ給ひ
 一條天皇御宇長保三年には藤原實秋詔を奉して社殿鳥居を修築せるあり近世に至り
 ては寶曆三年十二月二十二日勅願所仰出され同十年五月二十日日本一社勅願所たる

へさひね繪旨を賜ひ爾來御維新に至る迄毎年春秋二季禁中より御撫物を當宮別當に
 下して寶祚悠久を祈願せしめ給ふ 孝明天皇御宇文久三年三月四日臨時宣狀を賜
 ひ國家安寧の祈禱仰付らる明治元年七月特に宮號仰出され金刀比羅宮と御改稱あり
 四年六月國幣小社に列せられ十八年六月十四日國幣中社に御陞格あり其他十六年四
 月十四日には 天皇陛下より御恩召を以て御短刀一口を勅納あらせられた二十
 一年四月には當宮保存會設立の趣聞召され金員御下賜ありきさて御維新前には別當
 金光院兩部神道を以て奉仕せしか其後宮司權宮司禰宜權禰宜等の神官を置かれ後更
 めて宮司禰宜主典等の神職を置かれ以て今日に至れり。

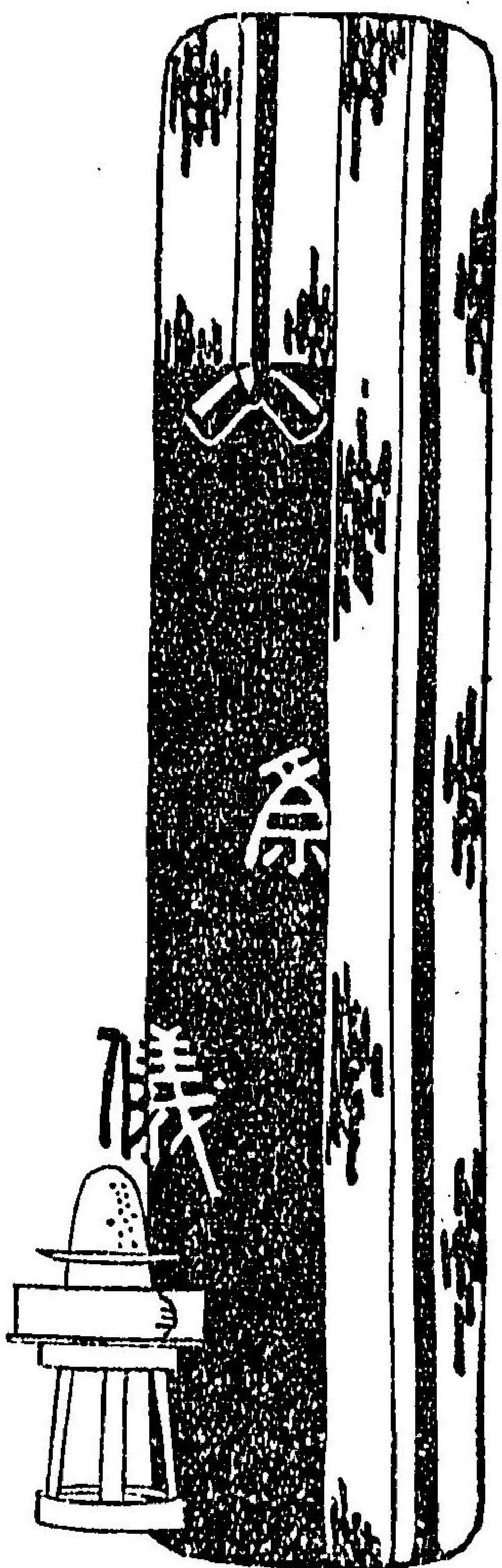
玉藻よき讃岐の國は天地と神のみおもの足行むうまし御國と天下作たまひし大神
 のいてましの宮太敷す琴ひら山は天地のよるしき氣をは相得たるところなれかも
 神からかこ、た尊く國からかろさら奇はし大宮は岩根こ、しき坂の尾を平して敷
 し大殿は雲氣かをれる山上にうひわた、せれ目か、やく黄金白かねうるはして色
 どりよろひ世中の寶をつとへ國土の富を致して目もあやに作れみれば大神のお
 はひたまへるみかけには何れの國か天のしたもれてはあるへきろこ故に四方の國
 よりか、ふれるみたまのふゆのよるこひを聞わあけむとくぬかには人みちつ、さ

海原は小舟つ、ちまたゆといふ時なかるらし國中にみられた、はせる大己貴神のみ
たまし尊くまじけり。

萬延元年

穂積重胤

四



第二章 祭儀

○祭典 當宮の祭典は最嚴肅を以て聞こゆ朝夕神前に於て神饌を獻し神樂を奏し
一日といへども缺くる事なきは勿論大中小祭の外に臨時祭等屢執行せらる、も重な
る祭日は左表の如し。

月 次 祭 毎月一日、十日、二十六日黎明

擬社白峰神社月次祭 毎月二十六日早朝

末社三穂津姫社旭社月次祭 毎月一日早朝

末社嚴魂神社月次祭 毎月六日午前八時
 新年祭 一月一日午前七時 數歌奉奏
 元始祭 一月三日午前八時 大和舞奉奏
 忌籠神事 一月五日六日七日 七日大和舞奉奏
 末社嚴魂神社大祭 一月六日午前十時 大和舞又ハ八少女舞奉奏
 中祭 一月十日午前九時 八少女舞奉奏
 攝社白峰神社大祭 一月廿六日午前十時 八少女舞奉奏
 紀元節祭 二月十一日午前八時 八少女舞奉奏
 祈年祭 二月某日午前八時 奉幣使參向
 中祭 三月十日午前九時 八少女舞奉奏
 櫻花祭 四月十日午前十時 大和舞八少女舞奉奏
 御田植神事 四月十五日午後三時 於神事場田舞奉奏
 攝社白峰神社中祭 五月廿六日午前十時
 小祭 六月十日午前九時 八少女舞奉奏
 大祓道饗祭鎮火祭 六月三十日黄昏 於神事場

小祭 八月廿六日午前九時 大和舞奉奏
 攝社白峰神社小祭 八月廿六日午前十時
 湖川神事 九月八日黄昏 神職行列を以て神事場に到り大祭に係る
 諸員の祓除を行ふ
 小祭 九月十日午前九時 八少女舞奉奏
 攝社白峰神社小祭 九月二十六日午前十時
 氏子祭 十月一日午前十時 八少女舞奉奏
 兩祝舍小神事 十月一日 於祝舍
 兩祝舍指合神事 十月六日七日 於祝舍
 大祭 十月九日十日十一日 (次項参照)
 天長節祭 十一月三日午前八時
 紅葉祭 十一月十日午前十時 大和舞八少女舞奉奏
 新嘗祭 十一月二十三日午前八時 奉幣使參向
 御煤拂御年木祓神事 十二月十三日黎明
 除夜祭大祓道饗祭鎮火祭 十二月三十一日黄昏

○大祭 大祭は曆本に金刀比羅祭とあるものにして毎年十月九日十日十一日の三日に渉る大祭典なれば祭式の次第亦甚複雑なるも今之を略述せむに祭員一同は去る九月八日の潮川神事に於て祓除を行ひ大祭三日より潔齋して心身を清めさて十月九日午後四時祓除を修し次に本宮拜殿に於て神事執行八少女舞奉奏あり十日午前八時本宮に於て官祭執行奉幣使参向ありて國庫より幣帛を奉らる次に神主舞詣司舞を奉奏す午後五時に至りて神幸の祭式あり九時上次の頭人従者數百人を従へて參殿儀式あり十時神輿を中殿に進め更に神事あれども此神事は諸人窺ひ知るを得ずるれより神輿出御嚴肅なる行列を以て境外神事場の行宮に渡らせ給ふ其行列の次第概左の如し。

上 頭 人 男女各一人 男子は水干着用乗馬女子は千早衣着用乘輿男女

數百の従者之に従ふ

次 頭 人 上頭人に同し
氏 子 數百人 麻社袴着用
先 拂 一人 角衣着用
御旅所世話係 數十人 禮 裝

御神輿奉納人 數十人 禮 裝

五人 百姓 五人 素襖着用

庄 官 數人 直垂着用

鐵 杖 二人之を牽く、角衣着用

御 鹽 水 鹽水行事員淨衣着用一人 同捧持員白丁着用一人

太 鼓 附人淨衣着用一人 昇人白丁着用二人

祝舍掛神職 神職一人之に當る、正服用乗馬す社袴着用の従者四人及白丁

着用の傘持沓持各一人之に従ふ

錦 旗 二旒あり一旒毎に素襖着用の守護四人及白丁着用の昇人八人

之に従ふ

神 馬 平素御腕にある神馬にして概三頭なり一頭毎に係員二人及白

丁着用の口取二人附添ふ

御 辛 櫃 五差にして一差毎に守護二人昇人二人之に従ふ

御 琴 箆 一個 附添人右に同し

巫 女 十數人にして各舞衣を著し手に柵を持す

東遊舞人 四人にして各東遊の舞衣を著す
 大和舞人 四人にして各大和舞の舞衣を著す
 樂太鼓 白丁着用のもの二人之を昇き直垂着用の伶人奏樂す
 伶人 八人各直垂を著し鳳笙篳篥龍笛を以て太鼓と共に渡御の途上
 行く行く奏樂す
 太玉串 淨衣着用の守護一人及白丁着用の昇人二人之に従ふ
 御鉾 二筋あり一筋毎に守護及昇人あること右に同じ
 御弓矢 二枚あり一枚毎に守護一人捧持者一人従ふ
 御弓矢 御弓員御矢員淨衣着用之を捧持す
 御劍 二口あり御劍員之を捧持す
 啓行 淨衣着用一人
 御翳 二本あり一本毎に守護一人捧持者二人従ふ
 神興 御網員淨衣着用四人及禊興丁白丁着用二十五人之に隨從す
 御絹傘 白丁着用三人之を捧く
 御絹蓋 守護淨衣着用二人及捧持者白丁着用四人之に従ふ

宮司 一人正服装用乗馬す從者五人口取傘持沓持各一人之に従ふ
 禰宜 一人正服装用乗馬す從者四人口取傘持沓持各一人之に従ふ
 主典 四人服装從者右に同じ(内一人祝舎係神職に當ることあり)
 町長 一人直垂着用乗馬す町役場吏員之に従ふ
 神典講說世話係 數十人
 列締跡押等 數十人
 警護 數十人

上次の頭人には男女の從者數百人盛裝をこらして隨從す皆當地方の崇敬者なりまた
 高松及各地よりは奴と稱へ毛箱を振り挾箱を擔ひて從ふ宛然舊諸侯の鹵簿を見るか
 如し神輿の渡御は極めて靜肅にして數萬の拜觀者亦聲を呑み寂として人なきか如き
 中を徐るに進み給ふ

人なみの願はどみに靜りぬ神の御こしや近きぬらん 琴陵賢子

かくて午後十二時頃行宮に著御あるや引續き祭典執行神主舞四段諸司舞五段を奉奏
 し盛むに燈火を燒きて夜を徹す、此時本宮に於ても神事あり翌十一日午前五時行
 宮に於て神事執行次に獻馬式、東遊八少女舞あり次に崇敬講社本部の祭儀あり海暮

還幸式執行更めて八少女舞を奏し終りて還幸あらせらるる函笈の次第渡御の時に同し本宮著御の後大祭報賽式あり頭人殿に昇り神前に於て神事を行ひ次に伶人解齋歌を奉奏し大祭終る

○櫻花祭紅葉祭 櫻花祭は毎年四月十日又紅葉祭は同十一月十日執行あり當日早朝祭員伶人巫女等祭に係る諸員境内崇敬講社本部に參集し唐櫃をはしめ諸調度品に櫻又は紅葉を挿立て祭員等は冠烏帽子に之を簪し巫女は手に手に折枝を持ちて午前十時出門函笈を整へ本宮に到る(當日雨天ならば行列なし)かくて本宮に於ては神饌品はもとより諸祭具調度品等にも櫻あるひは紅葉を裝ひ特に拜殿正面の結界を撤し優雅なる式典あり大和舞八少女舞を奉奏す諸作法平日と較趣を異にして實に優美温雅なる神事とす

琴平のおまへの春日のどかにて花をりかさす神の宮人 井原義矩
はふりこか立まふ袖に色ろへて御階の上に散る紅葉哉 琴陵瑞枝

○御田植神事 毎年四月十五日(雨天順延)午後一時祭員一同本宮に參集御田植神事奏上式を行ひ次に豫て御脇間に備へたる神事用具を出し召立員諸員を呼ひて順次之を渡すれより係員一同行列を以て境外神事場に向ふ次第左の如し

- 先拂 御辛櫃 御鋤 御馬把 御地鎌
- 御苗籠 御琴 巫女 伶人 杵差 準備員

一行神事場に著するや午後三時より神事を行はる先鹽水行事散米行事降神式を終へて八少女舞奉奏次に鍬行事鋤行事犁行事馬把行事地鎌行事次に苗長の田植作法あり苗長は主典之に當る次に田舞歌四曲を歌ひ巫女の田舞あり此舞は巫女の務むるところなれども八少女舞とは大に趣を異にし一同白衣に緋の袴を穿ち緋の襪をかけ古雅なる笠を載き婉雅なる手振を以て夕陽斜に十數の老松陰を落せる白砂の上を右往左往に演奏するものなれば遠近の老若男女之を拜觀せんとして來集しさしも廣き齋庭もなほ狭きを覺ゆさて演奏終るや巫女は神前に備へたる切餅を撤し參集人に投與し係員は各地より集れる數十の牛馬に向ひ白幣式を行ふ次に昇神式ありて祭儀終を告げ一行再行列を以て本宮に歸へる農家は此日神前に備へたる粃糴を請ひうけ之を他の糴子に交へて播種し本年の豊作を祈るもの多し

苗代に水ひき入れよ琴ひらの齋糴祭はけふろつかふる 水野秋彦

○頭人 頭人の起源は最古くして御維新前にありては國司松平氏より其乘馬を頭人の乗用に供しました特に家臣を派して幹旋せしめたり頭人の行列には毛槍挾箱等あ

りて先囃は鐵杖を引り下座を呼ひて警蹕をなす等祭事中は特に諸侯に准す頭人は上次の區別あり各男女一人宛即男二人女二人にして皆頭屋家筋の幼童之を務む頭屋家筋は當郡五條榎井四條苗田四個村に約七八十軒あり其幹旋に當るものを庄官と稱し其家筋亦數軒あり毎年前記四個村中より二個村當番として祭事に當る其當番の村にありては村内清淨の地域を選びて祝舎建築地に充て當宮神職出張祭儀を行ふ其次築を説かひに八月三十一日九月一日に口明神事執行九月二日三日に地鎮祭執行祝舎建設に著手數日にして工を竣へ同八日湖川神事に於て頭人修祓を受け翌九日祝舎御幣立神事あり十日十一日には泊始神事と稱へ當宮祭員祝舎參籠始の式あり十月五日七日指合神事執行此時明年の頭人を定む十日十一日の大祭に當り頭人祭儀に與り神輿に供奉する事前に説けるか如し十一日神輿遷幸後御幣降神事あり十四日は頭人三日參の式十五日は祝舎焼拂神事を執行當年の行事終るものとすさて祝舎は頗古雅清素なる建物にして古來一定の法式ありて變ることなし式典亦甚温雅質實にして古式の一般を窺ふ事を得へし。

○東遊 東遊は一に駿河舞と稱し四人の舞人卷纒の冠を戴き柳葉を簪し紅重菱單黑半臂桐鳳凰青摺小忌を著赤の下袴に緑の上袴をかさね虎皮の尻袴したる太刀を佩

東遊



大和舞



少女秘曲舞



八少女舞



きて演奏す舞曲極めて雅健壯重なり毎年十月十一日神事場に於ける大祭式場にて之を奏す。

○神主舞諸司舞 大和舞の内神主舞は舞人垂纓の冠を戴き日蔭葛を簪とし紅重菱單紫半臂松鶴青摺小忌を著赤大口白窠液の表袴を穿ち蒔繪縮衛府の太刀を佩き柳を手にして演奏す同大和舞の内諸司舞は四人にして装束は枕神主舞のものに同じきも冠は巻纓にして半臂は黒また表袴は白の無紋なる等の差あり舞の手振は神主舞と趣を異にす神主舞は十月十日早朝本宮拜殿に於てまた同日夜神興行宮に著御の後其神前に於て奉奏す諸司舞は一月三元始祭の節同月七日忌籠神事の竟日四月十日櫻花祭の節八月二十六日小祭の節十一月十日紅葉祭の節十月十日早朝大祭の節等本宮に於て奉奏しまれ十月十日夜行宮に於て之を奏す。

敷しまの國の名に負ふ大和舞やます舞はなむ神の御前に 正七位古川躬行

○八少女舞 八少女舞奉奏中一人にて奏する場合と数人なる場合とあり前なるは紅重菱單五衣を著し緋の長袴を穿つ後なるは五衣に代ふるに舞衣を以てし緋の切袴を著く一月十日三月十日の中祭二月十一日の紀元節祭四月十日十一月十日の櫻花紅葉の両祭其他大祭は素より重なる諸祭典に當りて奉奏す(前記祭典表に詳なり)また

崇敬者の請求に應じて臨時奏進することあり。

振袖のかへすくも若ぬつ、仕へ奉らへいや少女にて

正七位古川殿行



第三章 境内

○琴平山 琴平山は即金刀比羅宮の鎮りませる神山にして形の似たるより象頭山と稱せらる往古より溢りに斧を入れざるを以て全山樹木鬱密翠色滴らんとし眞に太古の佛を存する稀有の靈境なり。

神のます琴平山の月かけに曇なき世のひかりをろしる 大勳位貞愛親王

琴平やくらへことなる山風は神のみいきのこ、ちのみして 従六位池邊義象

琴平の山の松風とことばにうこかぬ御代の千世しらふらし 村井直門

香火遠來人風光勝絕處詩思殊不凡應有山靈助

篠崎小竹

啼破烟綿綠一村聲々裂帛有何怨蕪風掃雨積陰散嶺上千松護御魂谷村映雪

寄 淵

夕くれや鳥こはる、象頭山

藻 水

折もよしころも更して象頭山

古 帳 庭

夕の霧は山麓をこめて弦月はのしろく峯の松にか、れるときは即詩人の吟情を制する能はざる時なるへし。

しらへすむ琴平山の山松にか、るもたかし夕月のかけ

子爵福羽美辭

澄江如練散餘霞水木湛然清且華自古謝家傳絕唱象頭山上月磨牙

森 春濤

進香人影散仙籠畫鼓逢々隔夕嵐眉様何如牙様好象頭山上月初三

神波即山

三日月や牙とぎ出だす象頭山

與謝蕪村

秋霜一たひ結へは山腹到るところ松聲を産す香味殊に佳なり。

小林に生立笠は秋の雨の晴れて後ころとるへかりけれ

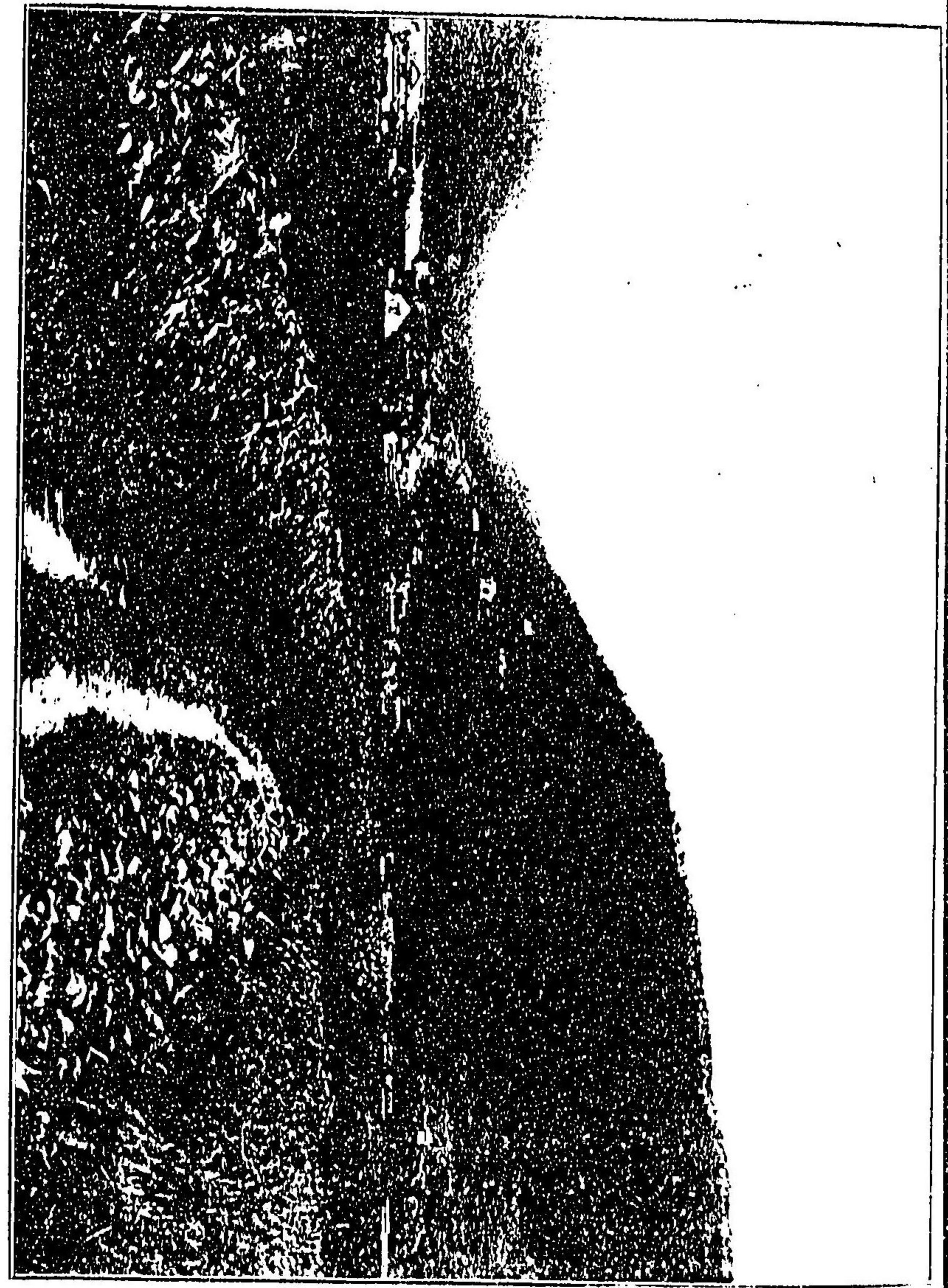
本居豊穎

霜落千林葉漸黃看山閑坐興方長秋畦熟嘗新早更喜雨餘松聲香

金光院宥怡

松色染來羅綺青織々采々小於釘齋郎拾得傘如大歸路未妨逢雨零

森 春濤



琴平山(象頭山)風景

望類詳載陳氏牒松茸爲王他臣妾赤松陰處秋正深以北以西雨澤決慣行樵豎不易尋初
生歷歷戴落葉其貴蓋珠迴讓之素潔芳香韻味協象山奇勝冠四州後林產茸茸相接大者
尺許小三寸柄如鼓槌堪俯拾纔經數日傘便開或欲或直層又疊賽神人作采茸人林蹊高
下忙移屣我題此圖歎吾衰海山千里難跋涉只期秋窓夢一場凝望松林色浮頰 題後
林採茸圖 大沼枕山

當山は總反別百九十一町六反二十六歩にして其内當宮境内は百一町二反一畝七歩ま
た當宮所有山林は八十二町二反十五歩なり殘餘の八町一反九畝七歩は琴平公園とす
さて旅客の爲に參拜の順路を逐ひて境内を説明せむに琴平町の内町を西に登る事數
町にして人家盡くるところ正面二層の樓門巍々たるを望むへしこれより當宮境内に
入るものとす此樓門は所謂

○大門 にして慶安二年當國高松城主松平讀岐守頼重の再建寄附にかゝる二重入
母屋造瓦葺建坪二十五坪餘樓上に掲揚せる琴平山三字の額は有栖川宮熾仁親王の御
筆なり門に向ひて左方なる樓を

○鼓樓 とす二重入母屋造瓦葺建坪六坪餘樓上時鼓を備へ晝夜時を報す。

まつ風もこゑうちろへて神山の高き鼓の音ろきこゆる 文學博士小中村清矩

老松森蔽空屹爾譙樓立方知報午時嵐翠鼓聲濕

從四位巖谷 修

鼓樓の東方に塚あり之を

○清塚 とす清塚は即清少納言塚の略稱にして傳云寶永七庚寅の年五月鼓樓建築にあたり工夫とも過ちて塚石を壊しけるに其夜附近に住める大野孝信といふ人の夢に宮女來りて、うつ、なき跡のしるしを誰にかは問はれしなれと有てしもかな、といへる一首の和歌を詠すと見て覺めぬこれ清女の靈來り訴るなりとて時の別當職に申しければやかて懇に塚を修めぬ云々いま黒柵を圍らせるもの即これなり。

まさあけし小唄のみゆきに古塚のふりかはりぬる秋のむらさめ 佐陀 幾興

天保十五年傍に碑を建つ其文に曰はく

一條帝皇能太后上東門院丹奉仕例理之少納言廼君者清原元輔之女奈理邪利故宮中仁爲天清少納言等序言鶴流此君伊吳竹之世乃人人廼八重雲隱利鳴神之音母動響爾聞知留事之如久村肝心風雅仁正久直久清久賢久副爲五歌讀事波其世仁類布人希丹雪波唐土之母皇國之母落隈無久洩隈無久白銅鏡眞清久見爲明米天其道乎職止爲成男子山理毛異仁物識理之手弱女仁古曾於是玉藻吉吾讚國成象頭山止云山仁千引岩鎮理座大御神乎拜祭金光院等云寺之時守之鼓打鳴樓之側仁此君廼與禰處也鶴理止

石上古代欲利樛木廼言次來而在塚有禰理此峨名乎清少納言塚止奈母言奈流御代之號乎寶永等言鶴間此高支家乎將作登爲氣流仁立民等我心母無久此塚能聲留岩乎蹴波夫羅志志乎其夜常利近久家居邪類人乃夢丹佳人來天津郡奈幾阿登廼志瑠肆袁多例仁駕波斗波禮自那連杼安理天之母我難等云歌乎言互其塚乎然爲鶴事之憤寸慨寸情矣告止見津止序此人之裔孫今波他處爾開花能移比去天住例杼其人家袁猶告茶屋止波言邪利綾異寸鴨綾奇寸鴨故如此異寸奇寸事波更仁母不言右毛在左毛在上於所謂空敷不凡在君之與禰處止之泉郎之菊藻廼假丹毛言婆阿夫佐夫可也母不治在可也母止此寺篋主僧宥默大僧都此度燒太刀能利心梓之弓腹振起互此塚之由緣矣本末淺茅原委曲仁書誌互如此碑乎立鶴丹奈母 天保十年餘五年三月高松藩士友安三冬撰 標塚松原義質謹書 碑文庄野信近謹書

此清塚及鼓樓に對して

○金刀比羅宮崇敬講社本部 あり講社に加入せむとする人は此所又は講社定宿に申出つれば講社係員まは定宿に於て其手續等懇切に説明すへしと雖要するに講則によりて講社加入の初穂金等を納入するときは本宮拜殿の殿上に於て親しく參拜するを得なは講社御守は素より相當の物品を授與せらるべし當本部の建物は明治十年

の建築にして總建坪百八十七坪なりさて大門を入るときは道の左右に飴店あり古來五人の百姓と稱へ當宮に縁故ある家柄なるを以て門内に開店することを特許せられたるものにして參拜者の土産として之を購ふもの少からず更に進めは石の注連柱ありこれより西一町半の間を

○櫻の馬場 といふ中央の通路は石にて疊み左右玉垣の内には數十株の櫻樹を植ゑ其間に無数の石燈籠を羅列す日影長閑けき春のあしたなど爛漫たる花は左より右より枝を交ひ濃き淡き花のいろく妍を争ひ美を競ふ花より出で、花に入るとはこれといふか。

下風に匂ふうま場のさくら花なかり春日をしめてさくらし 永代寺周澄

花を世にもてはやさる、象山の春の盛に逢にける哉 御歌所長男傳高崎正風

地靈春物絶塵氛夾路山櫻開十分一段風光轉迷望左邊如雪右邊雲 前南禪寺東笠

升山歩々高夾路櫻花陣豔甲霞間明香威風裏振 皆川 淇園

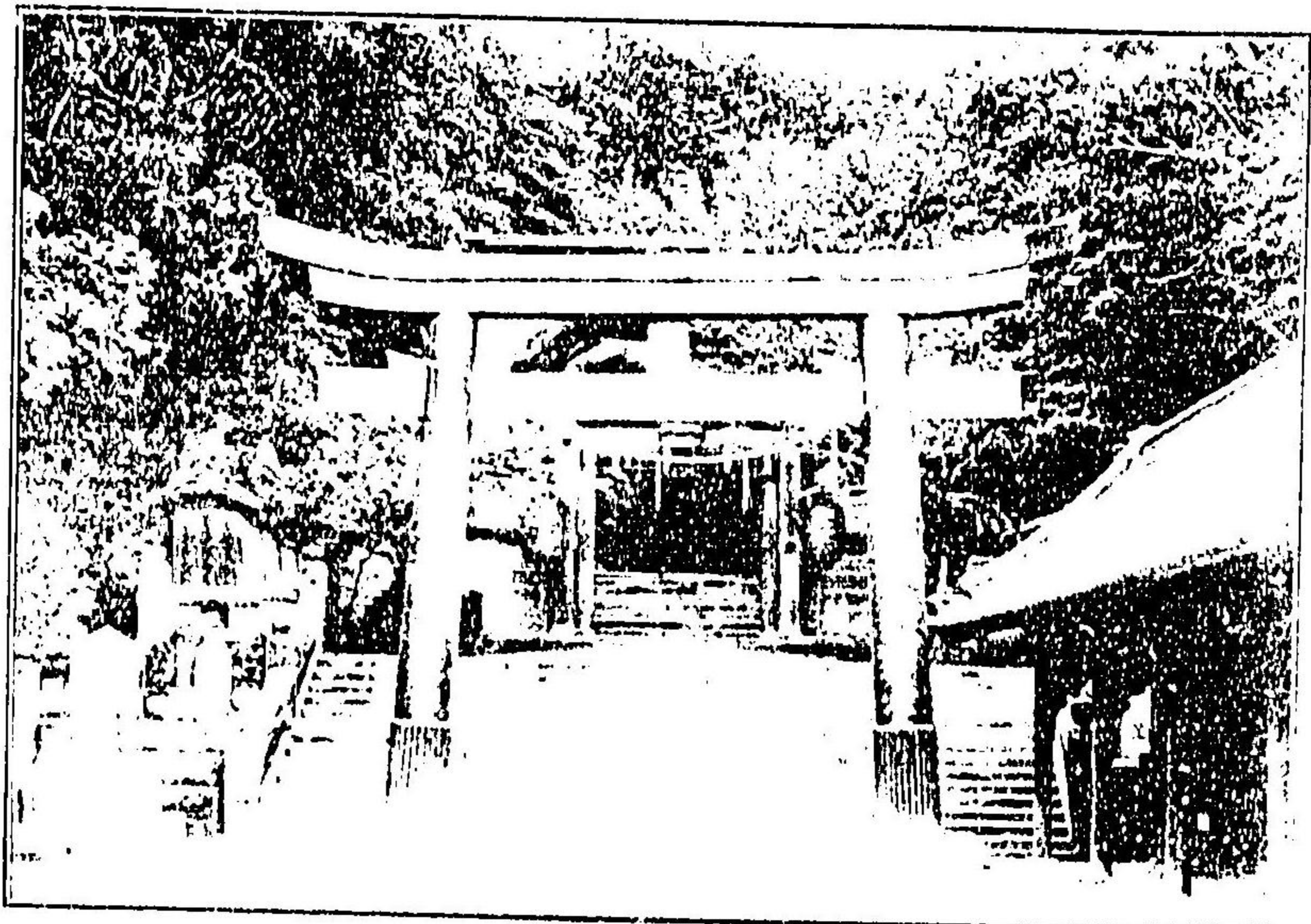
祠事豔稱三月盛國家長禱泰山安春風滿殿花吹雪人袂如雲上石壇 森 春濤

谷口春酣紅映霞祠前祠後匝櫻花香風拂地人如玉一隊女兒停寶車 矢土 錦山

花くもり人にくもるや象頭山 木 長



金刀比羅宮櫻馬場



同 宮 賢木門

櫻馬場を進みて右手に一段高き岡ありこれを

○青葉岡　と稱し當宮神苑の一部にして各種の樹木數百種を植ゑ四阿あり噴水あり牀あり參拜者遠來の勞を慰すると共に知らずく植物上の智識を得べき設備なり此岡に

○寶物館　あり石造二階建の堅牢優美なる建物にして館内には數百の寶物類を收藏し相當拜觀料を徴して拜觀せしむ本館并に青葉岡に就ては第四章に詳なるを以て茲に之を略すさて櫻馬場を西に向ひ石の鳥居をく、り石階十數級を上れば左正面に○御廐　あり入母屋造瓦葺建坪十一坪にして神馬三頭を飼養すれより更に西すれば右手に社務所あれと此説明は歸路に譲り道は其門前より左に折れ正面に

○茶堂　あり寛政九年大坂戎橋大和屋彌三郎外講中の寄附にして入母屋造瓦屋根建坪十坪餘なり參拜者はこの處にて隨意に休憩して茶を喫することを得茶堂の東に○木馬舎　あり入母家造瓦屋根建坪十八坪餘慶安三年當國高松城主松平讃岐守頼重の寄附にして内に木馬三頭を納む最大なる一頭は京師大佛師田中環中齋弘教宗圓の作なりさて舍前の石階を上れば右に黒門ありこれを社務所の正門とす更に西すれば地開けて二棟の社殿あり東なるは末社

○祓戸社 にして、瀬織津姫神、速秋津姫神、氣吹戸主神、速佐須良姫神を祀る
 參拜者は此社前に於て身心の祓除を禱るへし本殿流造檜皮葺、拜殿入母家造檜皮葺
 拜庭なり其東に漱水場あり

これに近き燈籠二基の表に常夜燈の三字あり大窪詩佛の筆にして裏面に其署名ある
 を以て名ありまた飼馬一頭明治四十四年廣嶋市島津久吉の献納にかゝるさて祓戸社
 の東に隣りて

○旌烈碑 あり明治十年西南戦役に關する忠烈表彰の碑にして題額は陸軍少將高
 島勲之助（後中將に任し子爵に列せらる）撰文は陸軍大佐黒木爲楨（今陸軍大將伯
 爵）筆者は岡田東州なり文に曰はく

維明治十年第二月西郷隆盛等反而舉兵圍熊本城、朝廷下征討之命以二品熾仁親王
 爲征討總督討之、官軍將士與賊戰於肥後植木山鹿等之處時賊初起勢甚猖獗、王師
 屢苦戰外援斷絕熊本城爲孤立少將谷干城君抗睢陽之節備禦甚力因得不陷焉於是
 延議更編別働旅團以援之譜之圓龜營所屯步兵第十二聯隊先是以 天使護衛在薩
 地至是爲之先鋒赴援取道於日奈久迂廻而進以衝賊之背後轉戰于各處而所向多克捷
 終至城山之役克收戡定之績其功最居多然而中隊長石川敬儀以下墜命於鋒鏑之際者

百九十八名矣嗚呼西郷隆盛也者備強善戰加以狡詐如或遲緩則雖積歲月未易蕩平然
 而半載之間漸滅無遺類雖賴

聖天子之威靈諸將帥之籌策亦因此輩之敢勇奮闘者也夫人之稟斯生也欲將立忠孝之
 大節爲國家有所毗補耳聖學極致止於成仁取義也其方在此世也雖遲數異無同不有一
 死縱等至期願徒能飽食煖衣與艸木同朽與禽獸同斃而無寸功之可稱則此天地間之大
 靈矣何榮之有此輩能捐性命致報效於國家人臣之常分丈夫之至榮也豈可不稱贊哉按
 祭法以死勤之以勞定國能禦大畜能捍大患此皆在當祀之列且屈子所謂首雖離兮心不
 懲誠既勇兮又以武魂魄毅兮爲鬼雄者英爽不昧而必不朽矣然而其名湮沒不傳則良爲
 可惜矣余也以不肖辱十二聯隊長坂井少佐以第一大隊長同行俱與其攻戰目擊熟知因
 相與謀與有志輩協議戮力建碑於琴平山少將高島勲之助君題曰旌烈碑一以慰其英靈
 一以爲將來之勸云

銘曰嗟茲多士敢闘殞身義堅金石命輒埃塵克盡臣節以叙彝倫英靈不滅令名長新

明治十二年第一月一日 陸軍大佐正六位勳四等黒木爲楨撰 熊本縣士族東

州岡田德尙謹書

さて碑の東方に

○火雷神 にして、火産靈神、奥津比古神、奥津比賣神を祀り、八衢比古神、八衢比賣神、來名戸神を合祀す社殿流造檜皮葺なり社前の石階を上れば正面に雄大壯麗なる旭社々殿あり此説明は歸路に譲り右すれば西に面して

○長廊 あり流造瓦葺長十八間幅一間半建坪二十九坪餘嘉永七年の創立にして其後再三の修築を經現今のものは明治三十四年改築せるものなり長廊に對して水屋ありこれを左に見て唐銅の鳥居をく、れは

○賢木門 に到る唐破風と千鳥破風の棟を交錯せる檜皮葺屋根にして建坪約五坪結構敢て壯大ならざるも其様式他に多く類例を見ざるのみならず各部の權衡宜を得優麗温雅以て建築家の參考たるへし賢木門三字の扁額は有栖川宮熾仁親王の御筆なり抑此門の縁由を尋ぬるに天正十二年長曾我部泰元親兵亂を起し諸州を侵略し勢甚旺盛四隣皆威服す此時に常り神社佛閣の兵燹にかゝるもの甚多し元親一日當山の北隣大麻山に於て當山を後にして陣取りたるに其夜元親俄然狂亂して當山の草木悉く敵兵と見ゆ周章狼狽爲すところをしらす老臣等以て靈境附近を冒したる神罰となし恐懼罪を謝せむかためにかに衆を集めて棟門を境内に建築せりかくして元親の狂亂は治まりしかと建築を急さし爲誤て一柱を逆用せり爾來俗に逆木門と稱す。

明治十二年朽敗の故を以て此門を壊ち逆木の柱は記念の爲社務所に收め更に素潔温雅なる今の門を建築したるも猶舊稱逆木の音を假りて賢木さかき門と稱すさて此門を入り右に

○遙拜所 あり、皇廟皇陵を遙拜するところとす神籬殿及拜殿は流造檜皮葺にして共に明治十三年の建築なり拜殿の左右なる石製高麗狗は極めて温雅優麗なる製作にして此種の參考品たるへしさて遙拜所を經て數十歩の間を俗に

○闇峠 といふ樹木鬱鬱畫猶暗きを以てなり此處に來れば心氣自ら澄み幽邃清爽いふへからず

これもまた神のみかけの柳葉のしける宮路はあやにす、しき 黒木 茂矩

千早振神の御代より繁りけむいつのおは樟いつの鉾杉 從七位大木眞備

もしろれ杉の木の間をもれて本宮の古樂朗々たるを聞かは實に羽化登仙の思あらむ

緑樹蔽幽谷満山嵐氣深時聞天樂奏餘韻度雲岑 和紀 醉石

さて京都錦講獻納の石鳥居を過ぎてなほ進まば石橋ありこれを

○連籬橋 といふ玉垣を連ぬるの意なり橋を渡りて正面なるは末社

○眞須賀神社 にして、建速須佐之男尊、奇稻田姫尊を祀る社殿入母家造檜皮葺

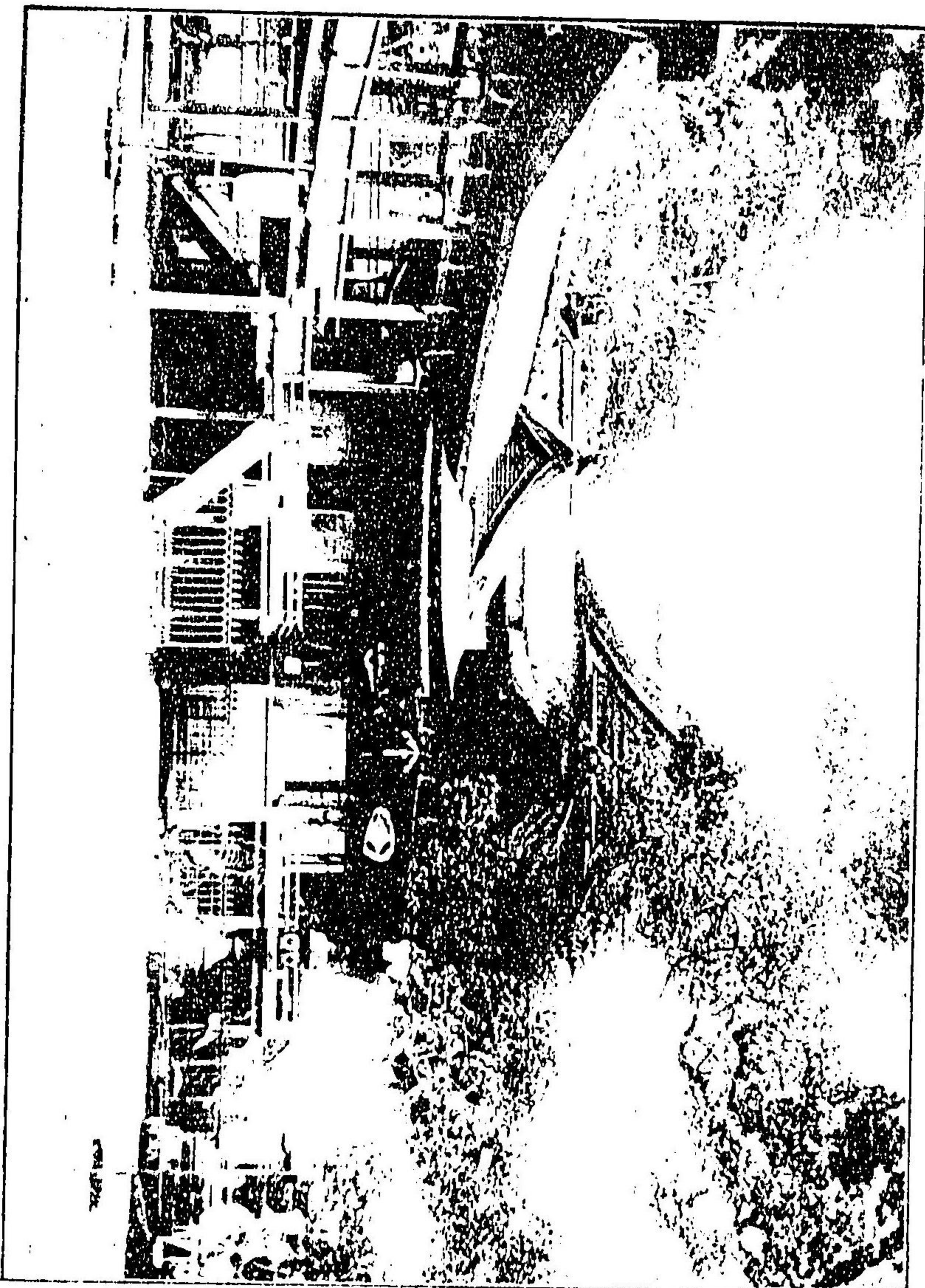
なりこれより西に向へは石階四段に分れ各十數級にして本宮に達す此石階を

○御前四段坂 と稱す、さて坂を登り右に末社

○御年神社 あり、大年神、御年神、若年神を祀る社殿流造檜皮葺とす次に末社

○事知神社 あり、積羽八重事代主神、味鋸高彦根神、加夜鳴海神を祀る此三柱の大神は本宮御祭神の御子神に座す社殿流造檜皮葺なりさて更に石階を上る事十數級本宮拜殿に到る右に水屋あり流造銅葺屋根にして飲料用水道の鐵管によりて絶えず清浄なる手洗水を噴出す。

○本宮 御祭神及祭儀に關しては第一章及第二章に述べたるを以て之を略す抑本宮社殿の創立は上古に屬し典籍の徵すへきなし中古に至りては今を距ること約九百年前長保三年藤原實秋 一條天皇の勅を奉して改築せり其後元龜四年の改築天正年間長曾我部泰元親の再營を経て萬治二年當國高松城主松平讃岐守頼重之を改築したりしも歲月を経るの久しき頽廢に傾きしかは明治十一年に至りて現今の社殿に改築せり本殿大社關棟造檜皮葺建坪九坪餘にして凡て素潔を主とし檜の無節を選び丹青を施さす左右御壁板には櫻樹圖高蒔繪を施し其花には金銀の金貝を用ゐ燦爛人目を奪ふ透屏を隔て、外部より其一般を窺ふ事を得へし中殿檜皮葺建坪九坪餘にして拜



二二二 寺 寺 寺

殿は大社關棟造檜皮葺建坪二十六坪餘なり共に檜の無節材を用ゐ柱一雙千金を値するものありといふ拜殿天井は格天井にして花卉の金蒔繪を施し向拜には金色鮮なる菊花御紋章を附す當社殿の拱料は凡て角材を用ゐ一切弧をなさゝるは他に楨例を見ざるところなり何人と雖拜殿正面の椽上に於て親しく拜するを得へく殿上に昇るは特に昇殿拜を許されたる人及景敬講社條例によりて昇殿し得へき資格を得たる人に限る社前には參拜者常に絶えず殊に春期の如きは肩摩立錐の餘地なきに到る。

おのつからこゝろ清けく成にけり御垣にかよふ松風の聲 正七位平岡好文

來拜象頭山上祠石階高處入雲危寒鴉無數啼神樹似向信人怨昔時 伯爵井上啓

摩天雄嶺拔郊坵古廟樹深燈影清清淑所鍾神所在奉持皇運鎮南溟 三島中洲

金比羅殿鎮金陵士女如雲遠近登畫鼓青鐘新調少玄冠白服古風興曉曉雲霧生衣袖春

日香煙埋石磴赫々千秋神德現天長地久屬年徵 韓國人 黃鐵

玉藻よき狹貫の國に名も高さ象のおやまの峯にます神 太田南畝

中殿入口の左右に備へたる大花瓶一雙は寶玉七寶燒にして神戸の人從六位勳五等川崎正藏の獻するところ也初川崎氏七寶燒花瓶及香爐を製せしめ之を佛國巴里萬國博覽會に出陳し偶來觀の白耳義皇帝陛下之を見給ひて嘆賞あらせられ屢讓與せむ事を

求めらるゝも氏は我 帝室に獻納の意あるを以て應せず歸朝の後之か獻納を了し更に同一物を製して常宮に獻納せるもの即是なり其一雙の爲に費すところ萬金に上ると云(寶物雜品類參照)さて本宮前の急坂に

○竹林 あり枝幹甚壯美にして人の嘆賞するところなり獨本宮前のみならず山麓各處竹林多く古來後前竹園と稱し詩歌に乏しからず。

むら竹の青垣なして神在す山には座をかくへくもなし

犬塚 興恕

前是淇園後渭川千竿園院帶風煙更無向昔令人俗不訝斯中猶七賢 前天龍寺文禮

山上多眞氣後前修竹園時訝儼僊衛青雲擁翠微 皆川 淇園

山後綠千竿山前綠萬竿風塵伎不得鸞鳳托身安 藤澤 南岳

本宮の南に接して

○直所 あり入母家造檜皮葺にして本宮詣員の宿直する所とす神僮を獻せむとする人はこの所に申込むへし。

櫻さく琴ひら山にどのゐして花にこもれる神のみや人

水野 秋彦

直所に對して

○神樂殿 あり入母家造檜皮葺建坪十坪餘なり祭典に際し伶人樂を奏し或は崇敬

者の求に應して巫女及伶人神樂を奏するところとす其南に隣りて神樂受付所及出張神札所おれば神樂奏進を求めまたは守札授與を望む人は此所に申込むへしさて附近の説明は後に譲り再び本宮前に出て北方を

○眺望 するに風光極めて絶佳にして足下は斷崖十數仞躑躅隈なく繁り合ひて地を見るによしなく岸より生ひ出てたる石南には嵐氣深し杉樹亭亭として黒すみわたれる一叢の森を越えて翠滴る松栢の枝を列ね葉を重ねたる青羅の上より近くは村落のかしこに一軒こゝに一株數株の常繁木に圍まれて春は黄なる緑なる圃の間に秋は赭色の水田に點々散在して地上の松島を望むか如く讚岐富士なる飯山は倒扇の姿うるはしく泰かに引きたる裾のあたり炊煙ゆるくな引けるに冬のあしたなと時に峰頭雪をく戴あり。

金刀比羅の神の廣庭さみどりの若葉のひまに讚岐不二見ゆ 子爵前田利定

落木江天雁影横荒涼無復野蟲鳴曉來忽覺新空峭小富山頭薄雪明 岡本 黄石

遠くは備前備中の諸山淡くして夢の如く波靜なる海上に眠り丸龜のあなた霞こめて白帆ノ入見ぬみ見ぬすみするあり眞に是絶好の畫圖か

無數輕帆筆海天春風影映港門烟隨潮歸去隨潮到多是象山香客船 金光院宥怡

賽神人泊短篷中櫺影森々滿港風落後一船來遠浦殘霞燒海暮帆紅 松原竹秋
もしろれ雪降りて滿山銀界となるときは琴平山の山嘴たる祖谷愛宕の諸峰をほしめ
群嶺の青松白絮を戴き六出の華繽紛として寒風に翻る

みぬつ、き秀し松のかげだにも看ぬや雪の曙のろら 犬塚興恕

層出半空千萬峰一朝白盡雪重々此中定有神仙住頃刻花開幾樹松 熊谷立閑

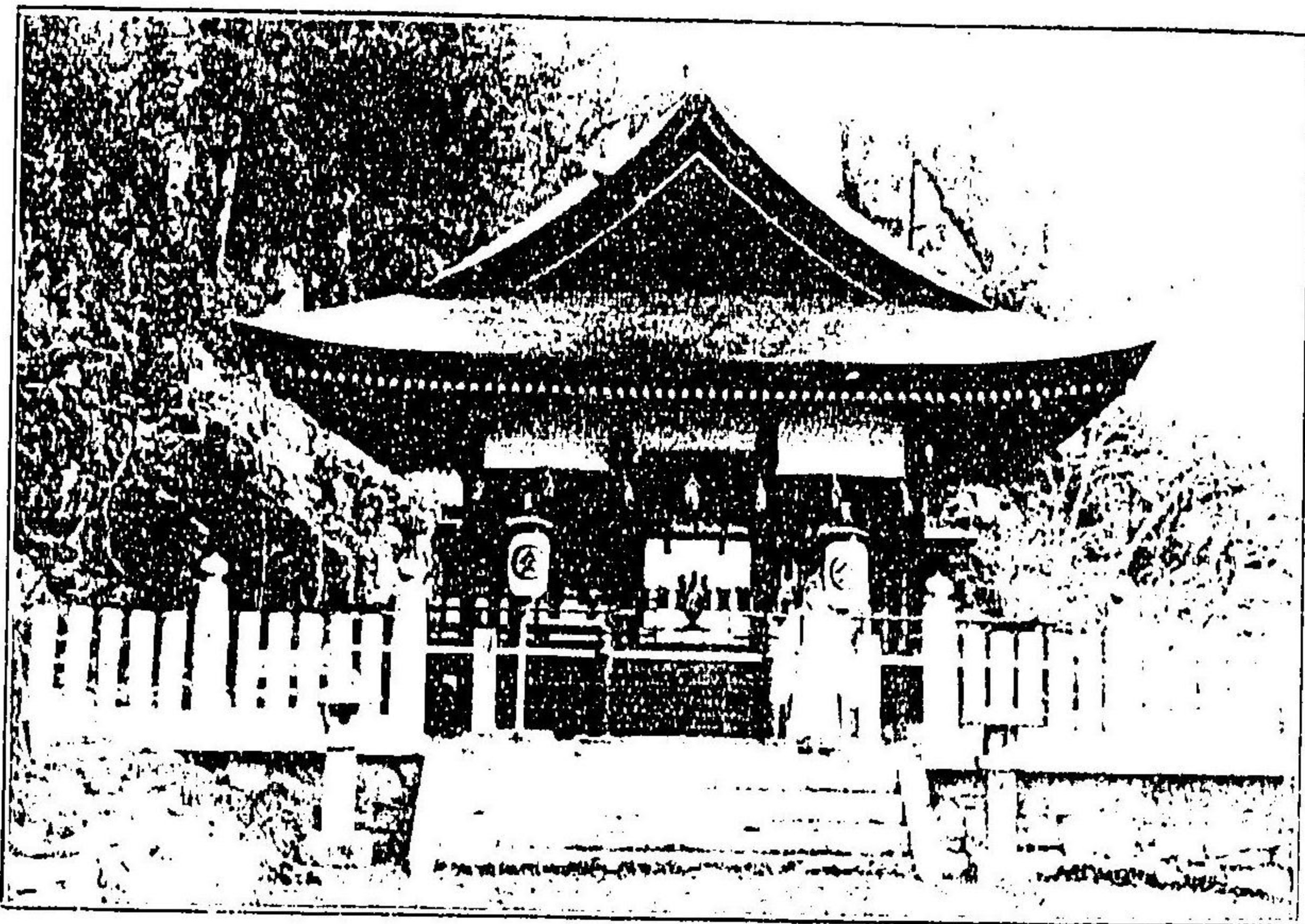
萬嶺千山一帶青貞松圍繞作翰屏有時一變皆成玉鶴唳霜寒野地靈 清國人雲音博

戴雪喬松聳翠間白一堆豫峯還講嶺代送瑞光來 和紀醉石

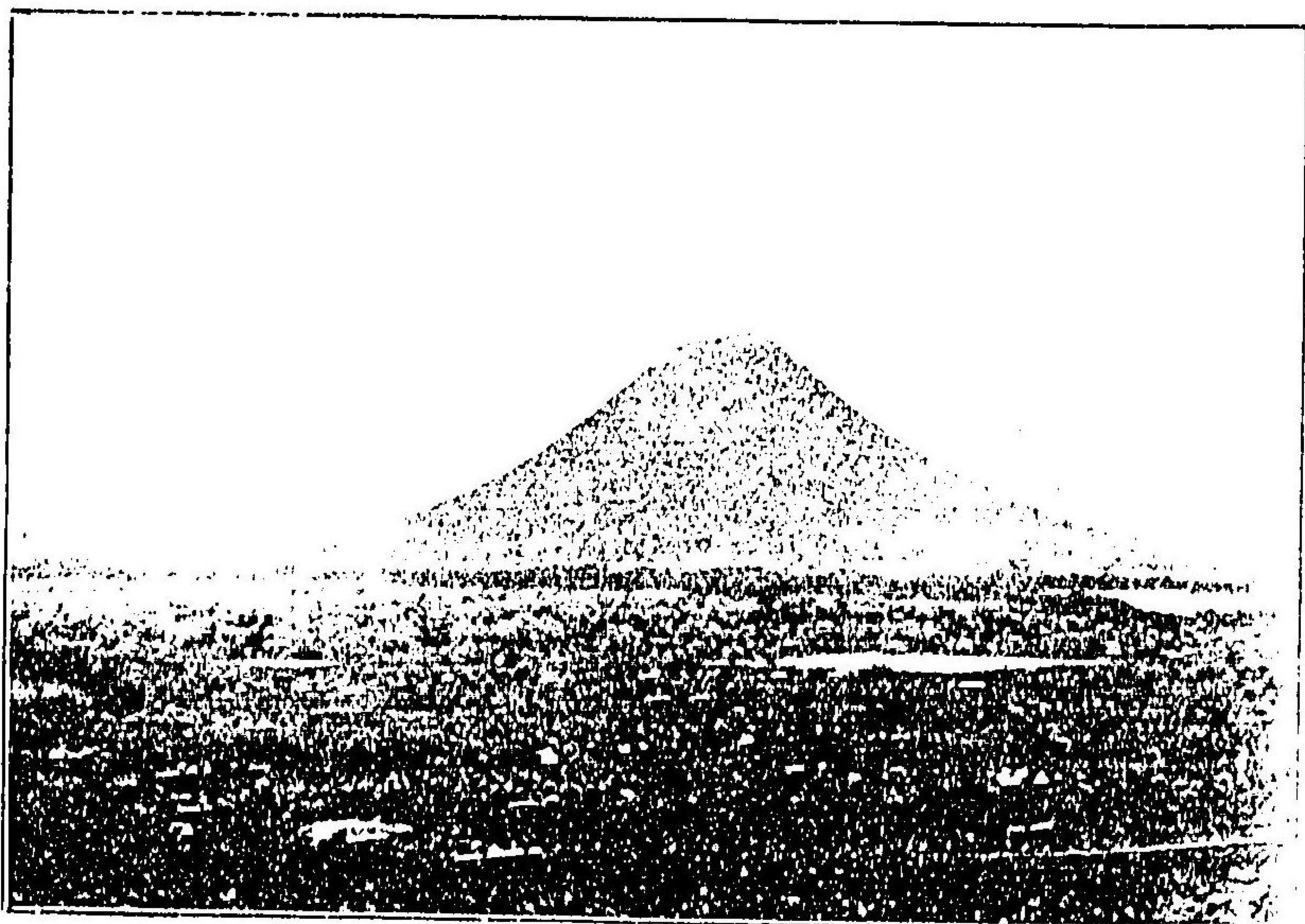
さて此風光に別を告げて西すれば本宮に續きて

○神饌殿 あり此斷崖に臨む朝夕神前に供する御饌を調ふるところなり入母屋造
檜皮葺建坪十坪餘とす神饌殿と拜殿との間に北渡殿あり其下をく、り行けば黒門あ
りこれより世に奥社と稱せらる、末社嚴魂神社に到る參道とすこの參道開けてより
歲月を經る事多からざるを以て未だ玉垣敷石等の設なきも左右の樹木鬱蒼として深
山幽谷に入るの思あり亦一仙境といふへしさて黒門を過ぎて北に行く事二町餘にし
て花崗石の堰堤あり是を

○眞名井貯水池 となす實に當宮防火用水道の水源なり明治三十七年の建築にし



金刀比羅宮末社嚴魂神社(奥社)



金刀比羅宮本宮より東北を望む

て其構造は竈間に花崗石を以て堰堤を築き其内部及内側はセメント、コンクリート、モルタル等を以て搗固め或は塗固めて水の漏洩を防ぎ二十六萬平方尺の流域より注入する水を貯へ有効貯水量八千立方尺に達し溢水路排水管などの設備を具す今當宮水道の組織を概説せむに水道を分ちて飲用水道并防火用水道とす。

○防火用水道　は源を前記眞名井池に發し五吋鐵管によりて本宮に到り二線に分岐し一は南して齋舎前に達し此間三個所の防火栓を設く一は東へ山腹を直下屈折して社務所表書院に達し此間二個所の防火栓を設く是等水管の延長は三百二十五間にして防火栓に於ける水の昇騰力は低きもの八十尺高きもの百四十尺なり齋舎前よりは別に給水管を接続して齋舎の浴場及臺所に導き雑用水を供給す。

○飲用水道　は源を當山北隣の大麻山宇杵子谷に發し一晝夜約五百十八立方尺の水を湧出す乃水源には貯水池を設け(其構造は眞名井貯水池に均し)二吋管を敷設して末社嚴魂神社下より同社參道に到りて手水鉢に給水しこれより道路に沿ひて眞名井に到り一枝線を出し眞名井防火用貯水池に水を補給すさて本線は防火用水管に沿ひて本宮に到り分岐し一線は本宮水舎に給水し一線は東に向ひ山腹を直下して社務所に到りて更に分岐し其一は祓戸社手水鉢に其二は神札所前手水鉢に其三は社務所

臺所に各給水す線路の各處には給水栓制水瓣排氣瓣量水器等の設備ありさて記事前に戻り眞名井貯水池を左に見ゆきノノて坦道盡くる處眼界急に開け東北の山野を望むへし此附近沙疏多しよりにて卯の花谷といふ休憩所ありこれより坂路稍急にして朱の鳥居をすぎ上る事約二町末社

○嚴魂神社　に遠す祭るところ嚴魂彦命なり命は今を距る事約三百年の昔當宮別當職たりし贈大僧正金剛坊岩盛大人にして兵亂四方に起り一日の苟安を得ず天下麻の如く亂れたる時に當り一身を神明に捧けて神威隆昌と國家安寧を祈り他の神社佛閣の多く兵燹に罹り或は人馬の汚辱に犯さるゝに際し神明の威稜により毅然として當宮の整備と改善に努め死して猶當山の守護たらん事を誓ひ風聲凄く陰雨暗き夕終に行くところを知らず本宮今日の隆昌を來したるもの素より　大神の威稜によると雖大人の功勞亦與りて力ありといふへし茲に於て歿後威德殿と稱して其靈を祀る爾來年を経る事二百餘年安政四年其功績　天聽に達し勅して大僧正を贈らしめ給ふ御維新後威德殿の稱を改め嚴魂神社となし境内繪馬舎附近に鎮座ありしか其地甚狹隘社殿亦甚小にして遺徳を彰するに足らざるを以て明治三十年地を大人の舊跡なる此境に卜し假殿を設け參道を開き爾來遍く江湖の協賛を得全三十八年十二月に到り

本殿拜殿唐門及透扉の建築落成し同月十二日假殿より遷宮あり、其社殿の南に向へるは常宮の守護たらむとする大人の遺志に基けるものなり本殿流造檜皮葺建坪七坪向唐門朱塗檜皮葺透扉朱塗檜皮葺拜殿人母家造檜皮葺朱塗四方高欄建坪二十坪餘にして目覺むるはかりの朱の色は常磐木の翠色と反映し甚艶美然も色彩の調和を失はず構造も亦他の社殿とは全く其趣を異にす當社の大祭は一月六日にして月次祭は例月六日なり。

近藤　傳

うつし世の庭にけかれぬ内瀧の朱の宮居る尊かりける
内瀧之靈地鎮嚴魂彦尊山深曆難定樹密畫猶昔疊石雲濤路噴泉水繞垣春花與秋葉交
互節神園　和田 菊處

○威德嚴　當社の西側にあり十數切削れるか如き斷崖にして巖頭には松栢鬱蒼として繁り苔滑にむしたるあり崖下は方石累々疊めるか如く人をして驚異措く能はさらしむ三百年の昔嚴魂彦命參籠ありし舊跡なり、さて當社の參拜を終へ再び本宮に歸らむ、本宮直所より南に續きて

○渡殿　あり延長二十二間餘之を横きりて石階を上れば右に末社

○睦魂神社　あり、大國魂神、大國主神、小彦名神を祀る社殿王子造銅葺正保二

年の改築なりこの左に

○神庫及神輿庫 あり神輿神寶祭器を納む神輿は全國中最壯麗なりと稱せらる、ものにして後章寶物目錄雜部に詳なり、さて渡殿の南端に

○南神饌殿 あり入母屋造檜皮葺とす其南に接して末社

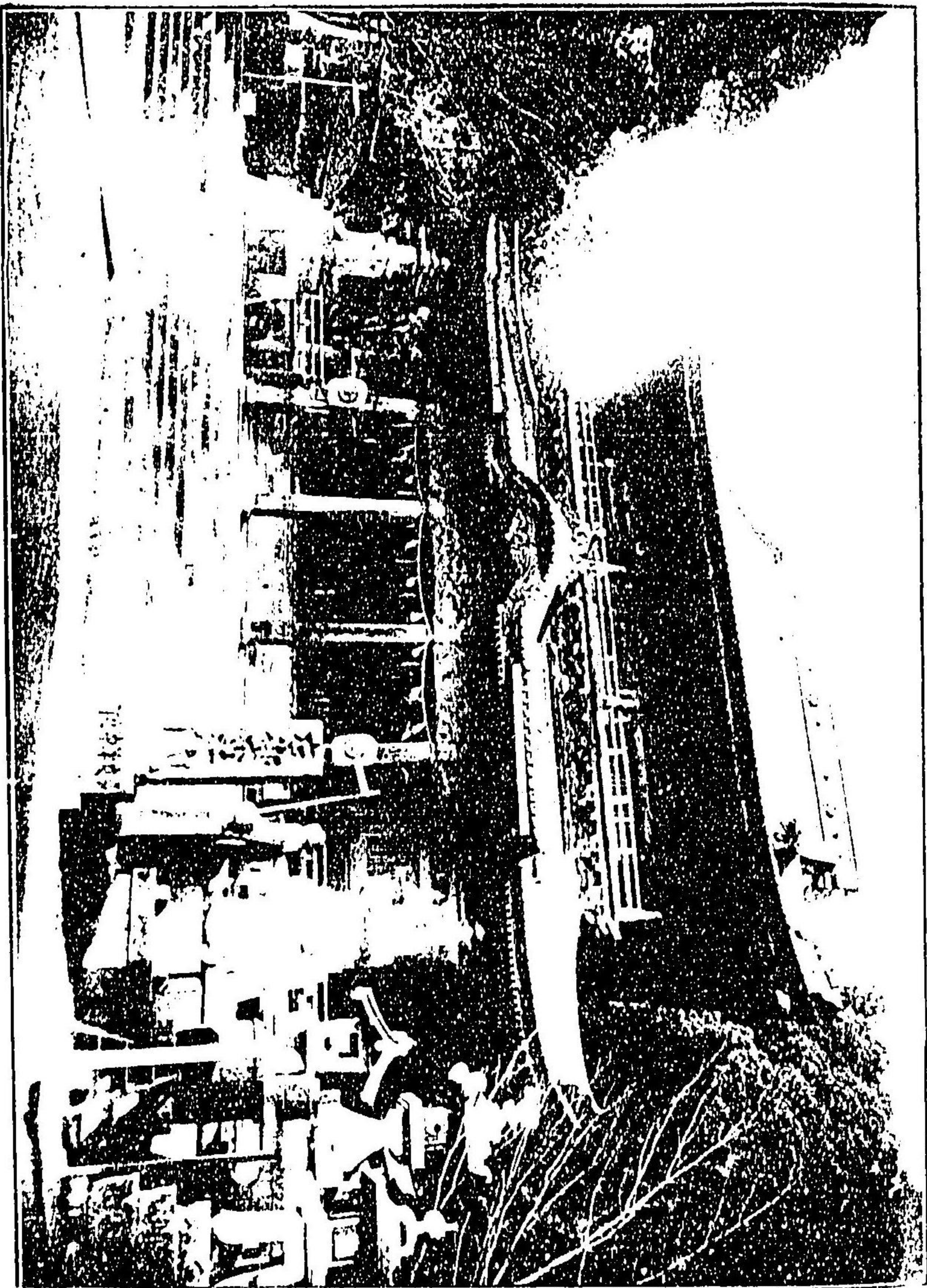
○三穗津姫社 あり御別宮と稱す祀るところ 三穗津姫神にして即本宮の御祭神たる 大物主大神の後の神に當らせ給ふ祭日は例月一日とす本殿王子造檜皮葺三坪餘中殿檜皮葺四坪拜殿大社關棟造檜皮葺十一坪餘にして共に明治九年の建築に係る結構本宮に亞て優麗なり、當社殿内に攝社

○白峰神社 あり、崇徳天皇を奉祀し其御相殿に 大山祇神、待賢門院の二柱の神を祀る元當國阿野郡松山に鎮座ありしか明治三十年當境内に御遷座あり社殿建築に至る迄假に三穗津姫社殿内に鎮め奉る祭日は例月二十六日とす、さて其南に

○南直所 あり三穗津姫社請員の宿直するところとす、其西に。

○祓除殿 あり昇殿の人々祓除を修するところなり其南に南北二棟の

○繪馬舎 あり北のものは入母屋造瓦葺石疊床にして建坪三十四坪天明九年の改築なり南のものは入母家造瓦葺土間床建坪三十一坪餘なり諸方より祈願報賽の爲獻



三穗津姫宮末社地蔵

納したる無数の給馬を掲げさすかに廣き舍内も猶狹隘を告ぐ就中珍しきは軍艦よりの流し初穂と稱ふるものにして明治二十七八年役また近くは三十七八年役或は平時と雖軍艦の讃岐沖を進航するに當り艦内の乗組員初穂を献せむか爲醴金して之を水の透入せざる厚き布に納め各員の姓名を記したる板に繋ぎ海中に投するときは讃岐沿岸に漂着し村役場等の手を経て當宮に納入せらる其板札は舍内に陳列しあれば就て見るへし、北繪馬舍の西側には大日本帝國水難救濟會救難具の陳列あり、さて其南に接して

○齋舍　あり神職の齋戒沐浴するところにして建坪二十八坪なり、また南繪馬舍の西に末社二棟あり一は

○常磐神社　にして、武甕尊、譽多和氣尊を祀る、一は

○菅原神社　にして、菅原道真命を祀る、さて北繪馬舍の東北に銅馬あり製作優麗よく其體を得たり、その北に接して末社

○嚴島神社　あり、伊都岐島姫尊を祀る此社もと境外にありしか明治三十一年迎へ奉る社殿入母家造檜皮葺とす、次に三穂津姫社前より下向道に向はむに左側に

○御炊舍　あり神饌を調理するところなり流造瓦葺十坪餘敢て華麗ならざるも結

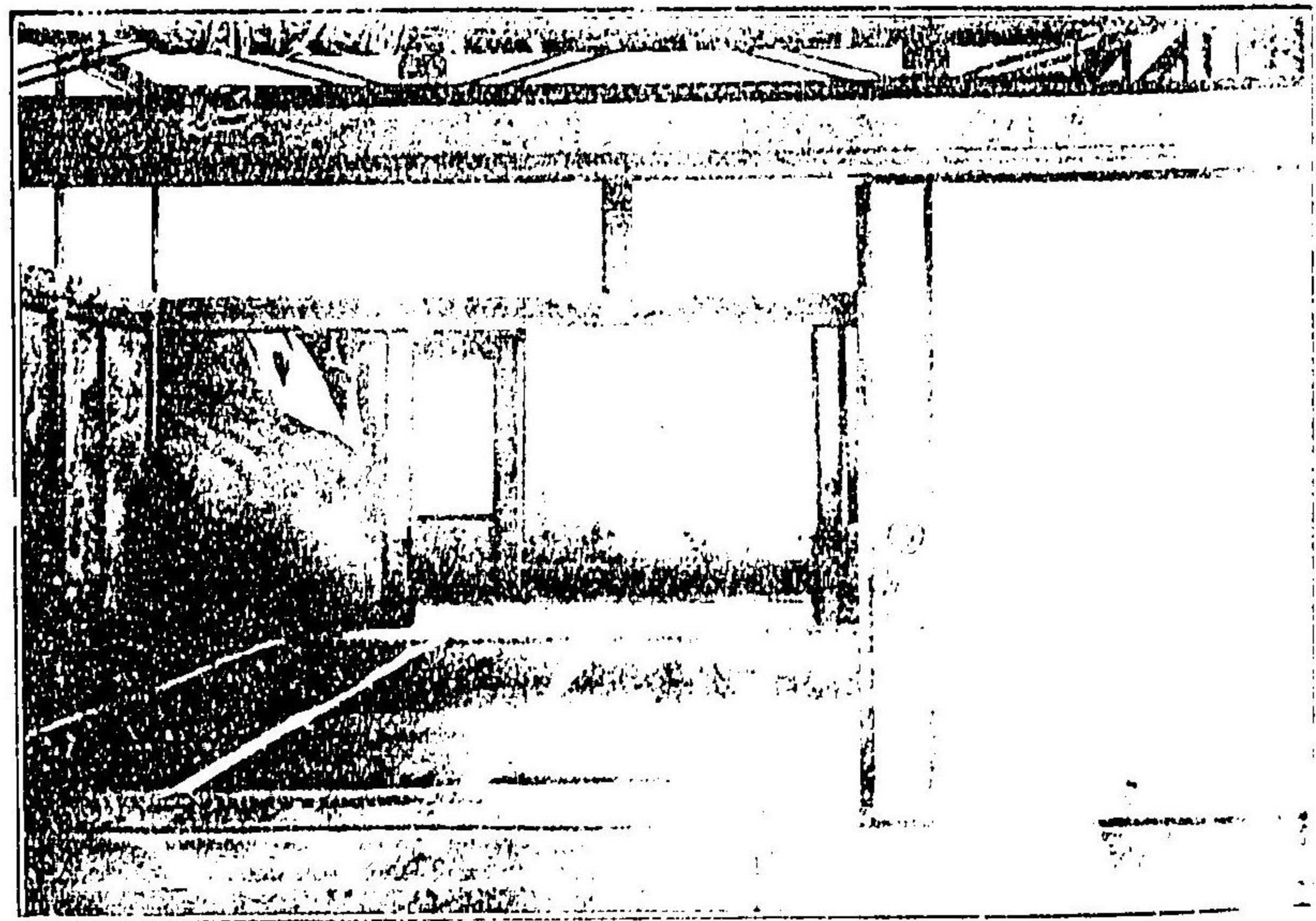
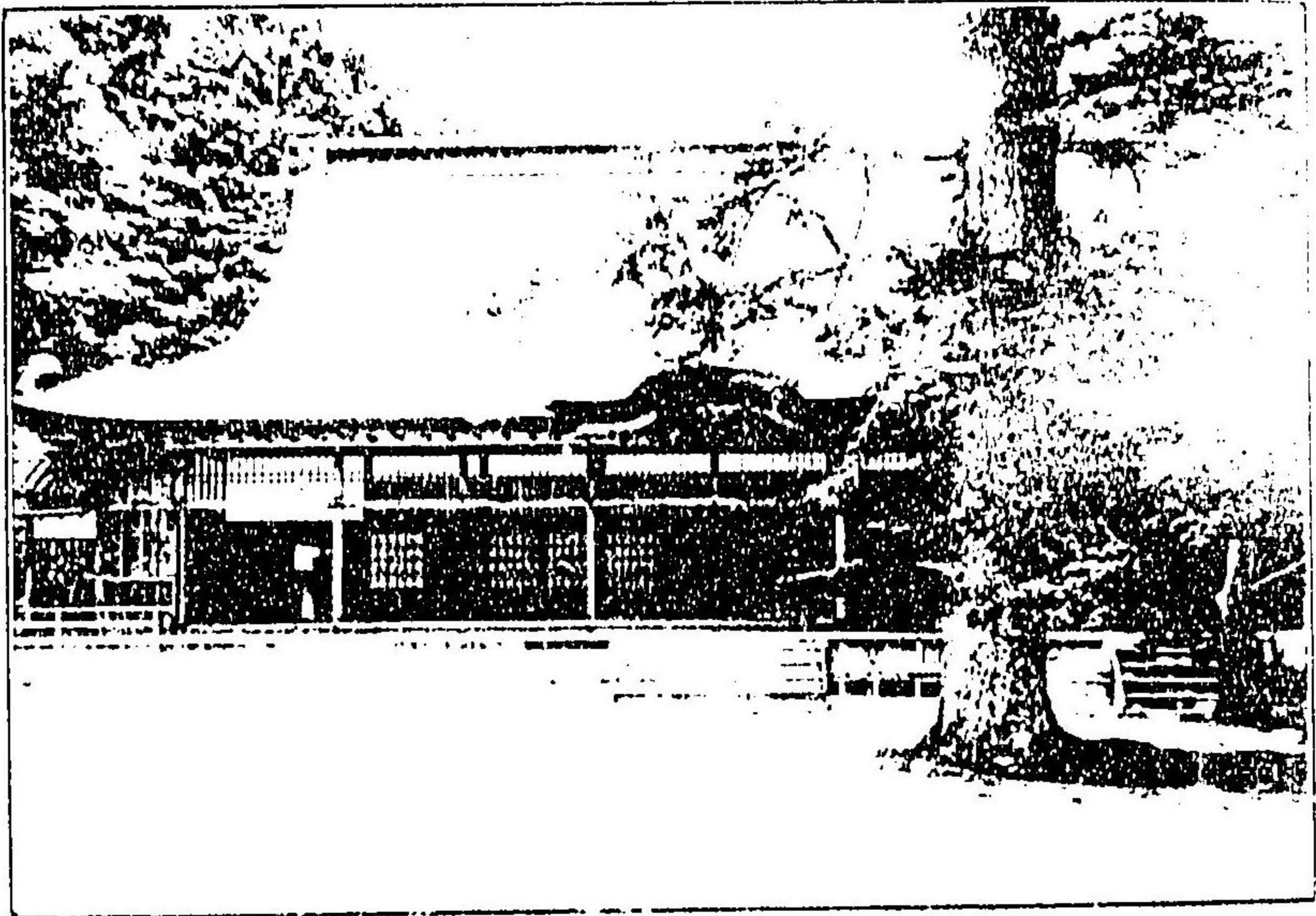
構温雅なりさて下向道を下れば中段に末社

○大山祇神社 あり、大山祇神を祀る流造檜皮葺とす、次に下ること數十階豪壯華麗なる大社ありこれを末社

○旭社 とす、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、伊邪那岐神、伊邪那美神、天照大御神、天津神國津神、八百萬神を祀る祭日は例月一日とす社殿二重入母家造銅瓦葺高六丈一尺桁行梁行各六丈餘總坪數百一坪全部檜材を用ゐ上層屋根裏には總て卷雲を彫み柱間扉等には諸種の人物鳥獸花卉を彫刻し其華麗なる宇内稀に見るところにして實に當代に於ける藝術の精華を蒐めたるものといふへし創立は天保八年なり旭社二字の扁額は正二位綾小路有長筆にして樓上に掲揚せる降神觀三字の額は清國翰林院侍讀探花及第三王文治筆同國人劉雲臺の寄附なり、さて始の參拜路を戻りて社務所に到らむか銅葺の宏壯なる門をく、り正面に

○玄關 あり檜皮葺千鳥破風出は唐破風にして床張付は金地に扁柏鷲圖墨畫なり森寛齋の筆とす、玄關の東に接して

○神札所 あり神札の授與は此所にて請ふへしこ、に掲揚せる扁額は南谷の筆跡なり、神札所の東に



金刀比羅宮社務所表書院

同 内 景

○保存會事務所　あり保存會は當宮の社殿をはしめ諸種の建築物及境内風致を永遠に保存すると共に益壯麗ならしめむか爲往年創立せられたるものにして諸國の崇敬者大に此舉を賞し續々金員を寄附す此事長くも　天皇陛下の勅問に達し特に御思召を以て金參百圓を賜ふまた内務省よりも金五百圓を下賜せらる凡て崇敬者にして當宮に金員を寄附したるものにはその金額に應し金銀木盃等の外諸種の品物を贈られまた寄附者の氏名と其金額は或は石に或は木に彫刻或は記入して表彰せらる、例なり詳細の手續に就ては其事務所又は神札所に於て聞くへし、さて社務所内を説明せむに玄關を入りて程なく

○表書院　に達す書院は入母家造檜皮葺建坪百十二坪萬治二年の建築なり、其東端なる一室を

○鶴之間　と稱す襖及床張付には墨書鶴圖を畫く圓山應學の筆にして床張付眠鶴圖殊に名あり甲種四等國寶なり、次に

○虎之間　に到る襖に墨書遊虎圖を畫く就中溪水を呑むものは古來水呑の虎と稱して喧傳せらる前項と同じく應學の筆にして國寶なり、次に

○七賢之間　に到る襖に竹林七賢を畫くこれまた應學の筆にして國寶なり、次に

○二之間 に到る襖及長押下張付に墨畫山水樓閣圖を畫く應學の筆にして甲種三等國寶なり、次に

○表上段 に到る上段床張付は墨畫瀑布の圖にして丹波保津川上流の景なるか如し一條の瀑布高く懸り落ちて深淵となり流れ出るところ激流奔騰岩を嚼み岸上僅に根を定めたる双松は永久の水煙に浴する狀眞に水聲松籟あるか如しこれまた應學の筆にして恐らくは其最優秀なるものならん甲種三等國寶なり、按ふに應學の筆世に少からず然とも斯くの如き大作にして優秀なるもの果して何の處にかある天下無比といふもの豈徒らに誇大ならむや。さて虎之間鶴之間の北隣に

○富士之間 あり一之間二之間の二室とす一之間床張付には墨畫を以て雲煙漂渺たる間に富嶽の雪を戴けるを畫き襖には其裾野を畫く、二之間襖には濃彩を用ゐて建久四年源頼朝富士野に狩するの狀を畫く風俗調度よく律に適ひ數百年の往時を追想するに足る一之間と共に村田丹陵の筆にして其無價揮毫するところなり、さて表書院の西に

○林泉 あり幽邃閑雅にして小雨ろは降る朝鯉魚の時に潑刺たるか如き詩情掬すへきあり。

沈々碧水印情虛理許時々羅錦魚爲隊爲群遊日月不知腹内可養書 清國人雷音博

同隊泳其樂自無香餌投繞巖縱所往活潑罔洋攸

弘文院學士林春齋

鑿沼在清幽濼梁自知樂更多芳餌投於物幾鱗躍

皆川 淇園

清池開一鑑影倒弄波人拍檻投芳餌喁々出錦鱗

伊藤 東涯

仁積是爲靈靈沼今在此已無網罟思只飽芳餌美

藤澤 南岳

さて此池を左に見て長廊三四折すれば

○奥書院 に達す書院入母家造瓦葺建坪五十二坪餘萬治二年の建築なり、南端の室を

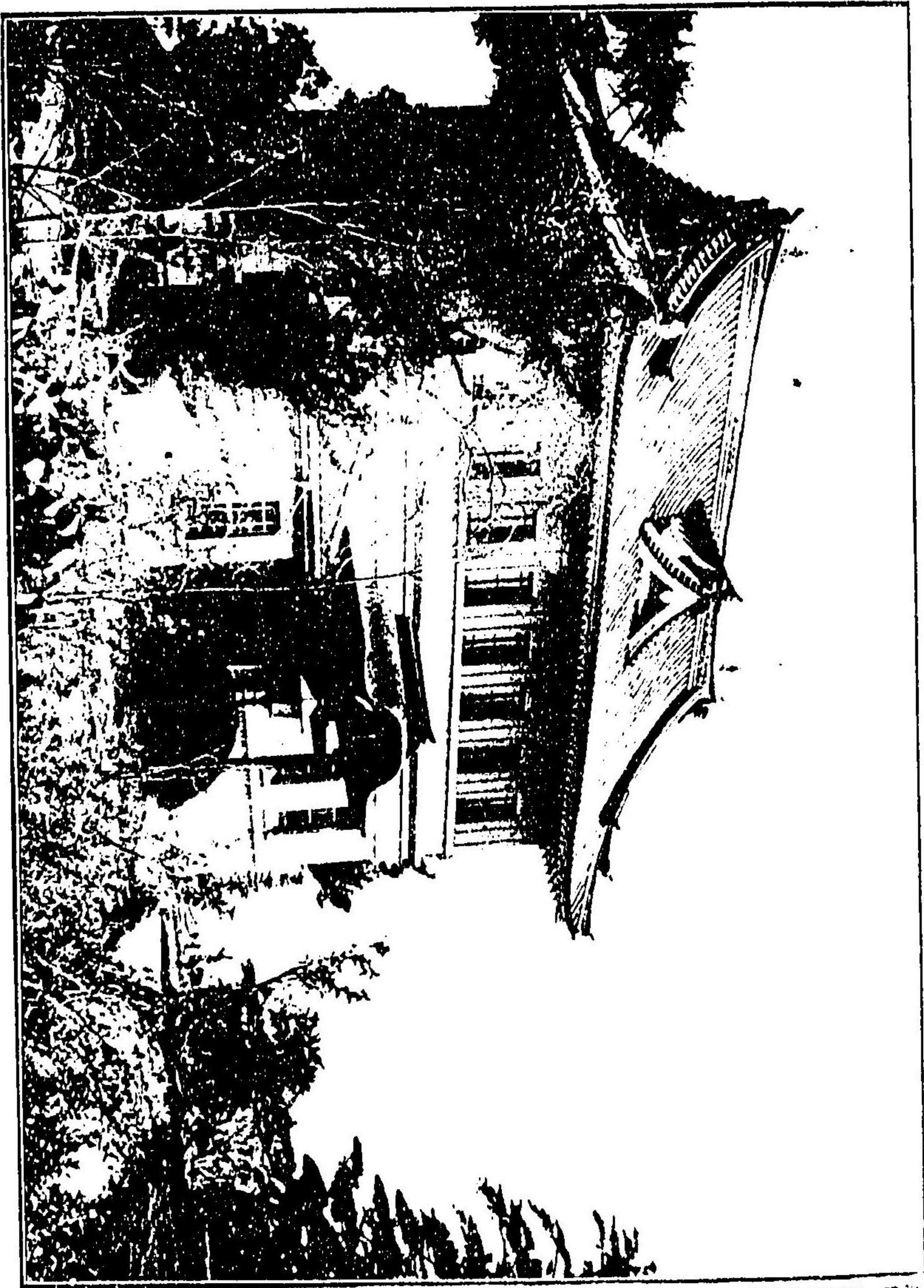
○柳之間 と稱す襖及長押上下に金地濃彩柳鶯之圖を畫く岸俗の筆なり、次に

○菖蒲之間 に到る襖及長押上共に金地濃彩にして襖には菖蒲水禽之圖を畫き長押上には群蝶之圖を畫く共に岸俗の筆なり群蝶は數十種の蝶類を懇切に寫生せるものなれば帝に美術上よりのみならず動物學上よりもまた好參考品たらん、次に

○春之間 に到る一に二之間と稱すこれまた金地濃彩春の山野を畫く岸俗の筆なり以上柳菖蒲及春野圖は岸俗畢世の大作にして色彩優麗なるも婉柔に失せず構圖豪宕なるも細心の蹟あり岸俗を評するものは先此圖を見ざる可らず臨時全國寶物取調

局より美術上の参考品として鑑査状を交付せられたるは誠に故ありといふへし、
春之間と菖蒲之間との境なる長押上の欄間は扇を組合せたる圖の木地透彫にして布
置構圖まさに圖按家の範たらんか、春之間の次に

○奥上段　あり一に花之間と稱す床張付及襖は凡て各種各様の花卉を畫き構圖敢
て奇ならざるも艶麗愛すべく圖樣卑俗なるへくして卑俗ならざるところ即巨匠の手
腕を見るへし花鳥畫の大家として名高き伊藤若冲の筆なり此室は皇族御參拜の節常
に其御座所にあてられたるところなり、さて奥書院よりの眺望甚絶佳にして本宮よ
り見るものとまた別種の趣あり、此附近には白書院寶庫をほしめ十数棟の建物あ
るも省略に附し章を改めて神苑及寶物館を説かむとす。



白書院寶庫



第四章 神苑及寶物館

神苑及寶物館は第三章境内の部に記載すべき筈なるも、神苑は境内中別に一區域をなせると、兩者共に創立日猶淺く爲に實議を試むる人少からさるとにより、便宜一章を設くる事とせり

神苑は櫻の馬場北方一帶の阜陵より起り溪谷を越えて彼方の岡に到る間の廣濶なる區域を占め、面積二萬六千餘坪、寶物館あり、四阿あり、噴水あり、花園あり、幽邃に、閑雅に、快潤に、華麗に、諸種の體相を具備し如何なる方面に興味を有する人

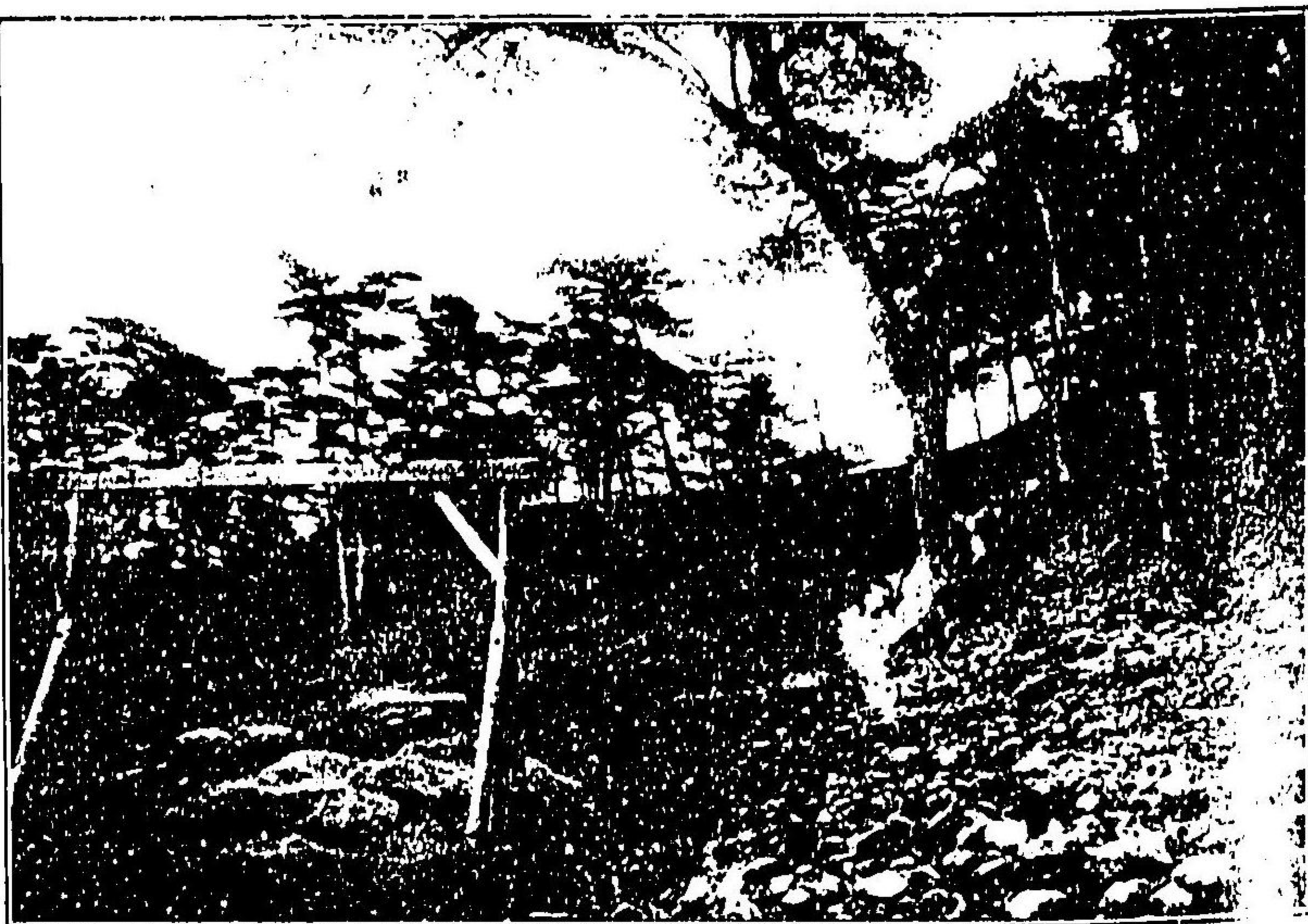
にも適する部分ありとす。神苑中青葉岡は初寶物館庭園として明治四十年開園せるものにして、他は境内修飾の爲、賓客の旅情を慰せむか爲、併せて自然林を公開して以て山林愛護の念を啓發せむが爲に、明治四十二年起工、三個年を経て、明治四十四年竣工せるものなり

神苑は左の十一區より成る

- 一、青葉岡 明治四十年の造庭にして寶物館は此岡にあり
- 一、常磐森 明治四十四年開園
- 一、待霄山 同上
- 一、時雨岡 同上
- 一、不老山 同上
- 一、涼杜 同上
- 一、千種臺 同上
- 一、藤溪 同上
- 一、袖岡 同上
- 一、小杉森 同上



金刀比羅宮神苑青葉岡



同時雨岡

一、朝日岡 同上

以下節を分ちて順次詳説せむとす

第一節 青葉岡

本宮參拜を終へて順路櫻の馬場に出れば、玉垣の彼方に噴水を望むへし、これより神苑に入るものとす。此附近一帯の高地を青葉岡と云ふ明治四十年の開園にして四時佳ならざるにあらざるも子規の初音待たる、首夏の頃若葉青葉の薄く濃く緑をさうへる眺殊にゆかしきを以て此名あり

初夏の雲おたやかに舞ひ浮ぶ青葉若葉の神森の上に

子爵前田利定

見なれてもめつらしき哉ろに鳥の青葉か岡の花の明暮

山下盛磐

月雪の眺のみかは岡の名の青葉も花もめてたかりけり

黒木勝一

さて櫻馬場より神苑に入れば正面に

○噴水 あり、徑六間華岡石造水盤二層重瓣梅花に擬す、噴水臺も亦二層にして菊花の意匠より成り、大躰に於て寶物館の構造に適應せり。噴水の西に

○大捷紀念碑 あり、碑文に云

大捷紀念碑

聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎君題額

明治三十七年露國渝盟竊輸兵于滿韓以欲侵我邊境於此 天皇赫怒二月下 詔六師遠討陸海將士感激振武首沈敵鑑於仁川天兵所嚮無不風靡大山元帥統陸戰隊圍旅順東郷大將督聯合艦隊鎖其港口策應相制奇正攻襲明年一月敵將以兵三萬降而北方之戰亦每制勝曰九連曰鳳凰曰蓋平曰摩天曰熊岳曰大連曰牛莊曰遼陽沙河曰奉天長春相尋潰敗而我艦隊殄滅敵艦于對馬海峽陸軍支隊亦上薩哈噠進沿海州南自鴨綠北扼黑龍將擊哈爾濱烏港以斷其兩臂也十月米國大統領居間彼我講和大凡戰捷或論割地賠金我則意在膺懲以故萬國益屬望于我邦我萬世無窮之鴻基益鞏矣是固

皇威赫々之所致爾亦將士忠勇國民義氣以資

大猷也今也平和克復諸軍凱旋論功行賞恩徧于幽明天下皆仰其盛德也我香川縣高松市及香川郡從陸海以凱旋者相議樹碑于金刀比羅國幣社傍勒功以傳不朽囑余序其事

余竊有紀捷詩側聞辱乙夜 竊覽乃今勅以代銘曰
摧破堅城埋豎壕我軍攻擊最雄豪頻聞連勝國民喜堪想遠征兵士勞
雷霖遶山懸朗月風吹玄海壓狂濤知他英米驚威烈仰贊聖明 皇德高

明治三十九年一月

高松 默堂中川雋德卿謹撰
東京 日下部東作書

紀念碑に對して廣き一區を圍める鐵網の中に

○丹頂 の優遊せるを見む丸龜の人勳六等中村石松の獻納せるところなり。次に

○八珊七重野砲 一門の据付けられたるは明治三十七八年戦役に際し旅順白銀山北砲臺に於て戦利せられたるものにて第十一師團司令部の獻納に係る。此野砲の西小高き處に

○聽泉亭 といへる清楚なる四阿あり、此附近牡丹園玉蟬花淺菴燕子花等の植込ありて花時妍を競ふ。亭より東に折れて進まは大小各種の戦利砲彈等あり、その東端なるは

○十五珊加農砲身 にして明治三十七八年の役遼東半島南山砲臺に於て獲得せられたるもの他の戦利品數點と共に陸軍大臣の獻納するところなり。之に面して

○崖 一頭の飼養せらる、あり露領勘察加の産にして軍艦比叡艦長の獻納なり。崖檻の後方小高き岡の上に

○八珊七青銅砲 の据付けらる、ありこれまた明治三十七八年役の戦利品にして

海軍大臣の獻する所なり。さて青葉岡の中央に巍然として聳ゆる建物は

○寶物館 にして本縣青木産花崗石二層建此坪數階上階下各五十坪、屋根は入母屋瓦葺棟上には避雷針の設備あり玄關は唐破風造銅葺とす、文部技師久留正道本縣技手石原錠太郎の設計にして明治三十六年起工同三十八年七月竣工す、初め設計に當り神社境内たるの故を以て務めて古式に據らむとせしも防濕防火等寶物格護上の必要に迫まられ遂に和洋折衷の式を採るの止を得ざるに至れり、然れども折衷式の陥り易き各部の不調和を巧に避け得たるのみならず神社境内として他の建物に對し著しき破調を免れしめたるは設計者苦心の存するところなり、館内には諸種の寶物を陳列すと雖館内比較的狹隘にして到底全部を陳列し難きを以て時々陳列替あるべき豫定なり、寶物品名の如きは第七章寶物目錄に詳記せるを以て茲に贅せず

神寶藏めまつれるほくらにも高きみいつの仰かる、哉

大口 鯛二

おのつから神のみいつの尊さは御寶庫に見ゆる哉

近藤 傳

さて寶物館を出て館前より南方を望むは琴平山の山嘴たる祖谷愛宕の諸峰蜿蜒たるを見るへく、共に常宮の神林にして尾上の松の蕭洒なる谷間の杉の豪宕なる眞に一幅の土佐畫を展へたるか如し、愛宕山の夕陽は殊に人口に喰炙せり

おすも亦ひより成らし愛宕山高ねさやかに夕日さす也

子爵黒田清綱

樹陰石壇雲逸廊一溪暝色欲昏貴賽福人去歸鴉亂嶺上老櫺空夕陽 日下部鳴鶴

さて寶物館を東すれば元帥伊東海軍大將手植の松あり、其東に

○閑院宮御手植松 あり、明治四十四年四月十日閑院宮載仁親王殿下御參拜の御手植遊さる、ところなり。又其東に接して

○東宮行啓記念松 あり、明治三十六年十月十三日 東宮殿下御參拜のとき社務

所奥書院に於て常山の松望を稚松と共に盆栽とし之を台覽に供へたるに御興感斜ならずやかて御思召によりて記念の爲其稚松を植ゑたるもの即これなり。さて其東に一基の

○記念碑 あり、本縣木田郡庵治村産の華麗なる花崗石を以て之を造る、碑文に云

琴平山金刀比羅宮廟貌儼然規制宏壯海内所崇敬多藏希世重寶焉香川縣知事小野田元熙始至與宮司琴陵光熙議欲勸館以護重寶於無窮招文部省技師久留正道諮之卜地於青葉岡使縣技師赤堀德治郎督工凡二十三閱月明治三十八年七月告成名曰寶物館其位面陽高三十六尺東西六十尺南北稱之館爲兩層皆用花崗石梁柱廳壁折衷古今悉其精巧遠望之白壁瑩瑩聳立於雲樹蔚葱之表又修治眞名井池以備不虞之災而不足供

日用飲料因埋鐵筒引廟北小杓子谷泉清冽甘美混混不舍其剩流惠澤暨山下衆庶云先是本宮山林多沒於官宮司謀之知事知事苦請官得允寶物館成之年十一月得七十餘町明年十一月得八十餘町於是本宮山林一復其舊頃者宮司建碑館傍記其梗概以諭後人其與事致力者勳在碑背

明治四十三年紀元節

讚岐 植田倬拜撰
高松 山田得多謹書

さて此碑の附近に枝幹盤蛇せる老松あり蒼翠掬すべく、枝條風に靡く垂櫻あり濃艶愛すへし。垂櫻の下より遠く眼を放ては水田廣く闊けて無數の人家其間に點在し讚岐不二の容姿穩かに連岡を隔て、白帆來往する瀬戸内海の彼方備前の諸峰起伏するを望むへし、近く眼を移せば琴平山の翠色滴るかごとく神苑内袖か岡千種の臺を俯瞰すへし、若ろれ春の朝秋の夕錦を此處に曳かは羽化登仙の思ありといふもの敢て過賞にあらざるへし。さて寶物館の西に小高き阜陵あり千年の老樟枝幹を延へたるはとり傘亭を設く之を

○曉雲亭 といふ、眺望絶佳にして曉色殊に可なり、東の山の端少しく明るくなりて茜に匂ふ横雲の二條三條薄く棚引けるに鴉の三羽二羽飛ひ進ひたる、山麓の市

街は未だ夜を籠めて電燈の光獨まばゆきなど得もいへぬ眺なり

第二節 常磐森

青葉岡曉雲亭直下の北を西に向ひて襖先下りに降る道あり、これより常磐森に入る、明治四十四年の開園にして以下他の區域も亦同時の開園なり。さて道を進めは左右は蒼古なる潤葉常緑樹林にして數百年を経たる老樹鬱鬱として繁茂し紫藤の絲を懸けたるかごとく之に纏へるなど自然林の林相賞すべきものあり、猶進めは小流ありて素樸なる橋梁を架す、橋を渡れば道は東に折れ行き行けば三叉路に出つ。のこ常磐の森の一區は主として自然林の林相を示すにあれば敢て修飾を加へず、秋の梢の凋の聲、冬の樹間の幽禽の叫など最愛すへし

松風にしらへあはせて琴平のあきをしらする鯛の聲 從六位池邊義象

第三節 待香山

常磐森の東端三叉路を北折せば待香山の地區にして竹垣に沿ひて猶も進めは廣場に出つ、直幹四本の松と蟠龍の如き一本の松との對照甚佳なり

○五鹿松 とも名つく。松下燈籠あり、また古碑一基存す

○古帳庵句碑 とも云ふ、もと祓戸社附近にありしを移轉せしものなり、句に云ふ

天の川くるりくと流れけり
頭からかふる利益や寒の水

江戸古帳女
同

さて南には數十株の雌松の赤き肌蒼き梢を隔て、青葉岡を望み、東は矮小なる赤松を隔て、連山の巔を望むへし、牀に倚りて月出を待つを趣ありとなす依りて岡の名とす、雨後の霧亦大に愛すへし

第四節 時雨岡

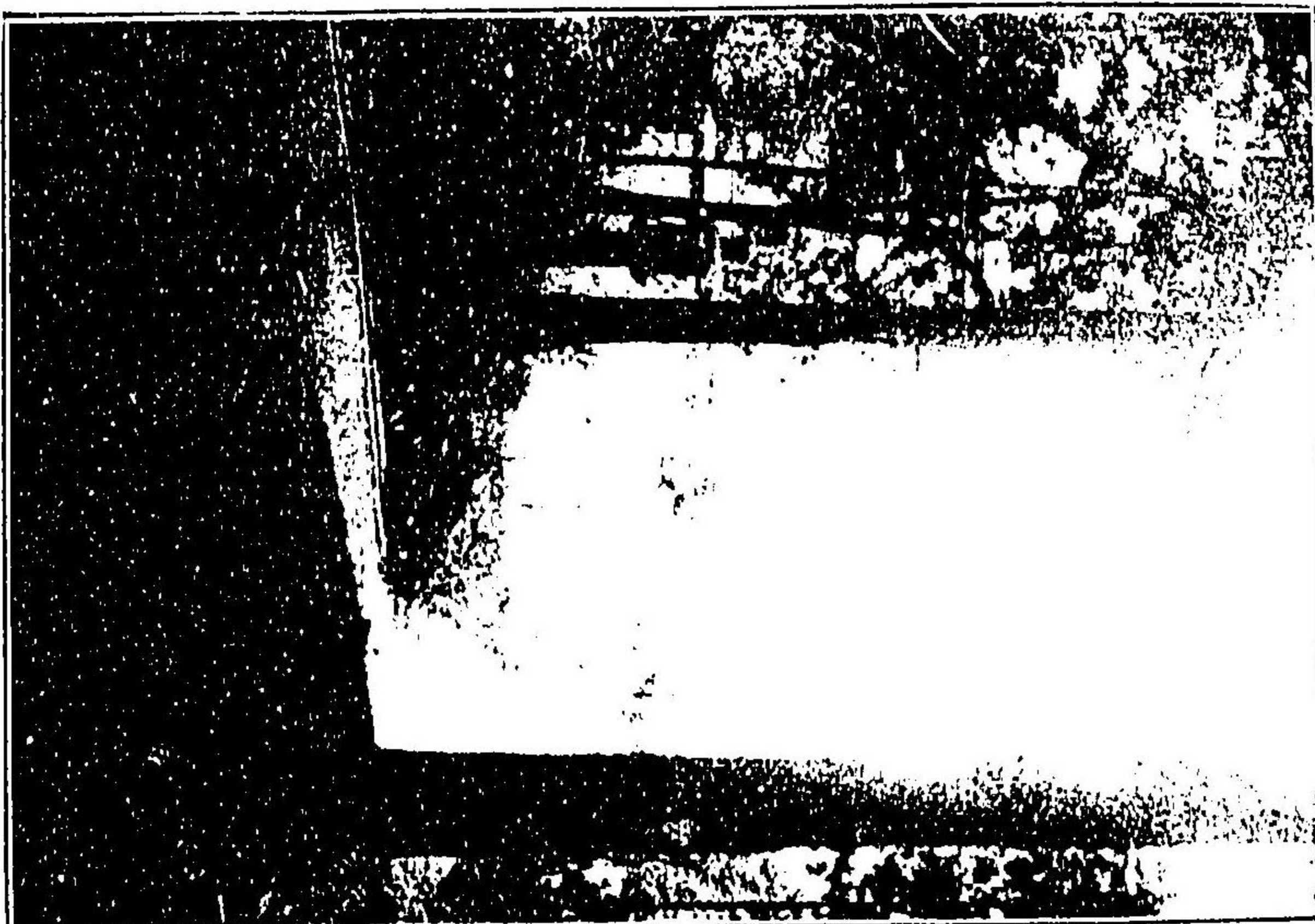
待雲山の北端竹垣に沿ひて北西に進めば道の西手に約千坪の芝生あり區域廣く斜面緩なるを以て各種の運動機を備付け少年の運動場たらしめんと今猶工事中に属す
岡の名の時雨もよしやかさ松の蔭にしはしの雨宿りせん 琴陵瑞枝

第五節 不老山

時雨岡の南にある阜陵を不老山と稱す、人界を離たる一區にして時雨岡を俯瞰すへく豪宕なる老松あり區域狹隘なるもまた愛すへき小丘たるを失はず

第六節 涼杜

時雨岡の東に沿へる道路は北端に於て東に向ひて降る、此區域は殆扁柏杉の純林なるのみならず介在せる松樹も亦直幹にして聳々たる幹は高く天に伸し蒼翠愛すへく



三 涼 杜



三 待雲山 古帳女

雄偉喜ふへし溪水は涼々として聲あり、人は評して木曾森林の面影ありといふ
名も知らぬ小鳥は啼きてみあかしの影はのくらしき谷添の道 琴陵文字

第七節 千種 臺

涼杜の東端より道は南に向ひ森林を出て次第に降れば快濶なる臺地に出つ之を千種臺といふ。臺は東部最低く西に到るに従ひて高く四段より成る。涼杜に連接せる道路は第三段噴水地にあり、此東に接せる第四段に

○五彩園 あり、噴水地の土坡左右には石柵を連ね中央に蕭洒なる鐵扉あり石階によりて五彩園に通ず、園は十一間に十四間、周圍は青き芝生にて蹴躑を列植しセメント道路之に沿ふ、その内側に古代唐草に擬したる文様栽植の芝生ありて花壇点々介在しセラニユームを植ゑたる花鉢四隅にあり、中部は細砂白きところ長方形の芝生に高さ八尺餘の大花鉢中央に据ゑらる此庭園は海外に行はる、ものを和風に咀嚼したるものにて本邦には未だ多く類例を見さるところなり、一部分は今猶工事中に属す。さて第三段は

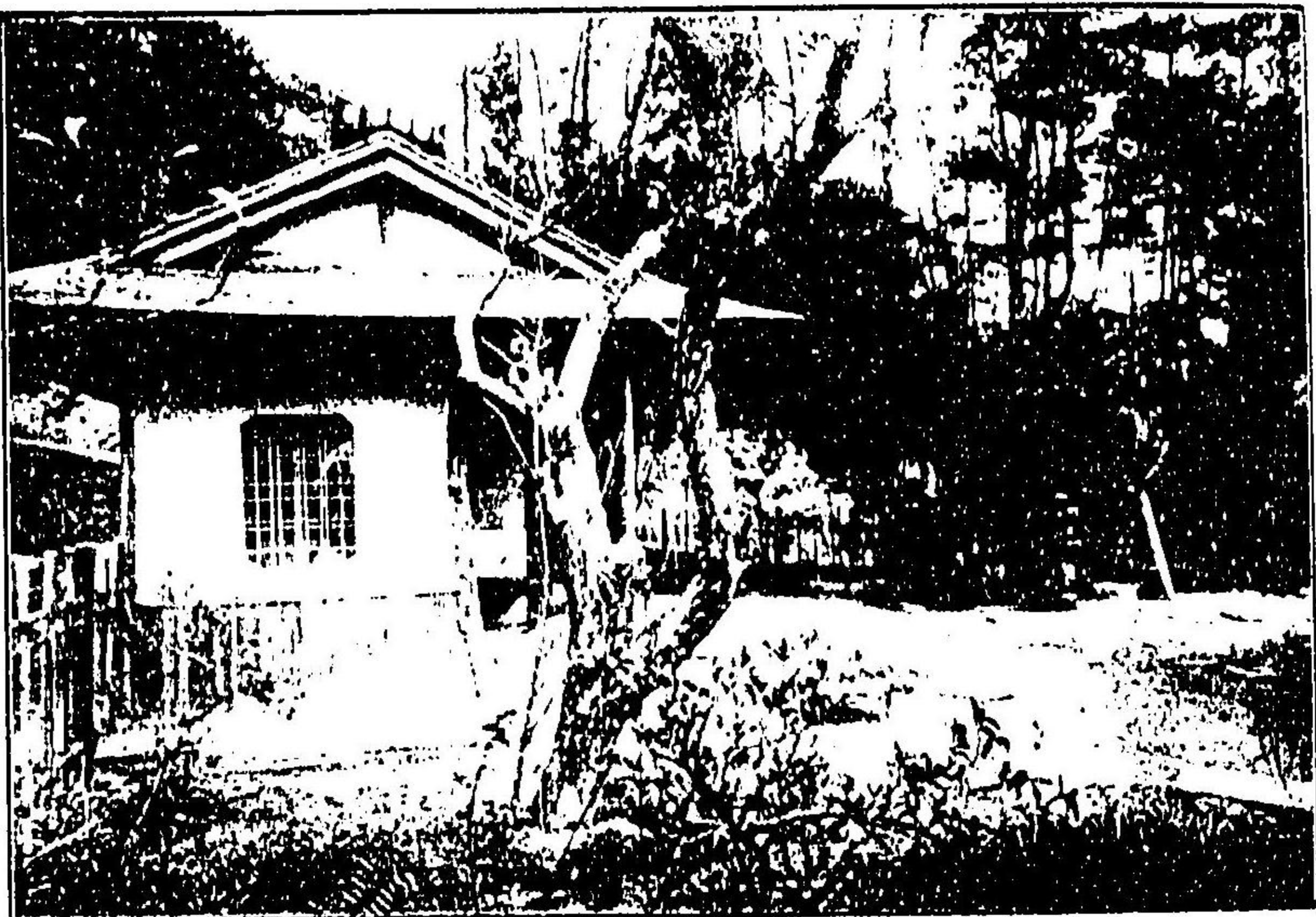
○噴水地 にして、中央の池は正圓直徑八間別に噴水臺を設けずして單に岩組のみ施し青葉岡に於けるものとは其趣を異にせり、池を廻れる道路を隔て、常緑の

植込之を圍む。平坦なる道路青き芝生清涼なる噴水等一般人士の散策に適す。次に西方中央に石階あり之を陞れば第二段の
○薔薇園 には達す、こゝには五十餘種の薔薇を栽植し小徑十字に通しろの交叉点に

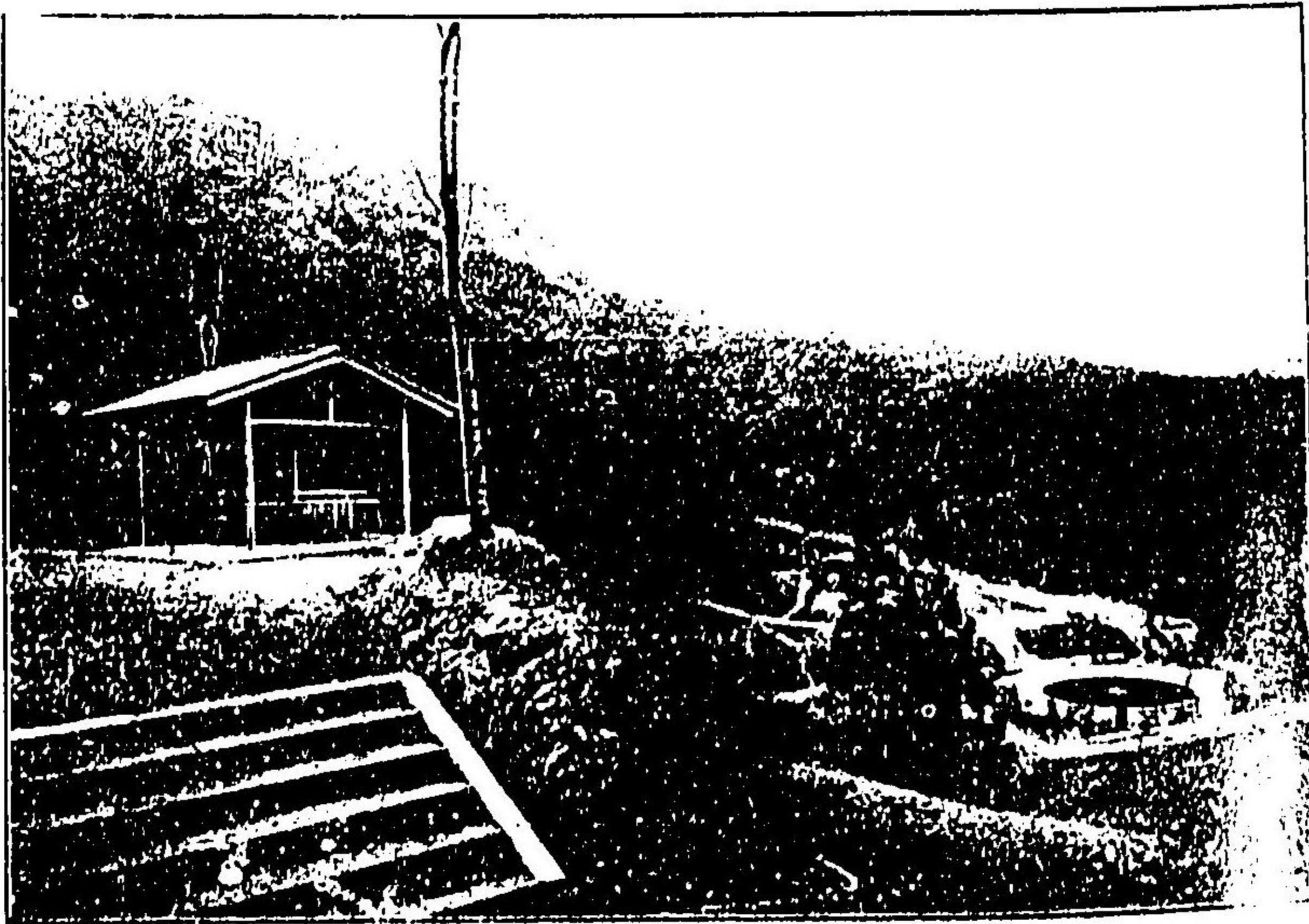
○日晷 を設け、豊満なる花崗石の圓柱、小徑に適應せる礎石等見るべきものあり。東縁に列植せる多行松の間に方圓二種の礎石の介在せるを見む、これ即ち

○逆木門礎石 にして今の賢木門の位置に存せしものなり、傳云昔天正年間長曾我部元親四國を攻略し餘威を振ひて當宮の神域を犯さむとするや忽ち神怒に觸れ恐懼措く能はず急遽罪を謝せむか爲棟門を建築せしに匆卒の際誤ちて一柱を逆用せり、故に世之を逆木門と稱す、明治十二年に至り之を改築せしが逆木の柱は存して寶庫に藏す、その礎石は茲に据付けたるもの即是なり。さてこの臺地の西方に小高き丘あり、これ即第一段をなすものにして、飛石を傳ひて之に通す、此一區は

○茶庭 にして、霞こぼれより脱化したる石選、飛石、四目垣、萩の観籬、木戸、燈籠、等あり、一株の老松亭々として聳け翠蓋空を掩ふ彼方蕭洒なる休息所あり
○掬翠亭 と稱す。さて此丘を降れば四十餘間の直道東西に通す、平坦なる芝生



金刀比羅宮神苑千種茶園亭



同朝日園

を隔て、紅葉の植込を見るへし、直道西に盡きて藤溪に出つ

第八節 藤 溪

千種の臺を西に進めは直路盡きて再び緩和なる曲線道路となりて藤溪に入る、右に老杉と春日燈籠あり、更に進めは數百年を経たる紫藤あり枝幹蜿蜒として蜘蛛手の如く八方に擴かり樹下薄暗さに屈折せる和かさ光線は直上より洩れ宛然燈盡を見るかごとし。西端の小流に橋あり

○縁之橋 と云ふ、その欄干は一種特異の構造なり。道は更に東に折れ袖か岡に出つ

第九節 袖 岡

袖か岡に往復二道あり、往路の左右は残らず槭樹を栽植し秋期の紅葉最佳なり、復路の左右は櫻の純林にして春季妍を爭ふ

琴陵 瑞枝

旅人の袖をや止めむ袖か岡大木の櫻杉の村立

さて往路を東すれば小杉の森に入る事數回再び袖か岡の一部老櫻の下に出つ

○曙櫻 といふ、神苑内數百の櫻樹中優美なる樹姿と閑雅なる花影は之に如くものなし

行く春や樹蔭に憩ふ老人の袖に亂る、山櫻花

琴陵文子

櫻樹の下に

○蕉芭句碑 あり、句に云ふ

花の陰硯にかはる丸かはら

芭 蕉

さてこれより東に小逕ありて散策に便するも今は初の路に戻り再び小杉の森に入らむ

第十節 小杉森

小杉の森は名の如く道の左右残らす杉の純林にして、濃緑の葉、褐色の幹を隔て、小逕の隠見するは亦捨難き風情なりとす。さて更に東すれば朝日の岡に出つ

第十一節 朝日岡

朝日の岡は櫻の純林にして道は次第に上り坂となり頂上に設けたる四阿に出つ、之を

○青嵐亭 と云ふ、眺望頗佳、本宮、社務所若くは青葉岡より見たるものと別種の趣あり。欄に倚りて之を望めば、西には琴平山の青巒軒を壓し、近く巍然たる寶物館は垂櫻の彼方に聳々、小杉の森を隔て、藤溪の翠松斜に溪谷に臨むあり。北に

は琴平山寛に楹を引きて嵐氣人に迫り、千種の臺の庭園は其全幅を展開せるあり。東北には田園遠く開けて叢岐不二は倒扇の姿穩かなるに、遙かに瀬戸内海の水光をも望むへし。この岡は眼界最廣くして、春の櫻、夏の新緑、秋の紅葉、冬の雪皆佳ならずるなし、雨後の白雲、朝暮の霧亦頗る愛すへし。さて亭を出て、西すれば袖か岡の復路を経て、寶物館の東方を過り神苑茲に盡きて櫻の馬場の東部に出つ、此間左右は凡て櫻樹にして春光秋色共に愛すへし

第五章 雜記



○職制 當宮職員は宮司禰宜各一人主典三人其他の社員は百數十人にして事務を宮司室第一課第二課第三課の一室三課に分ちさらに之を祭務神殿神樂神札庶務寶物山林水道出納用度營繕の十一係に分ち各擔當の事務に執筆す附屬崇敬講社本部はこれまた庶務會計の二係に分る。

○境外末社 他府縣にある當宮境外末社左の如し。
東京市深川區古石場町鎮座 金刀比羅神社

大坂市南區難波河原町鎮座 金刀比羅神社
 神戸市福原町鎮座 金刀比羅神社
 尾張國丹羽郡瀬部村鎮座 金刀比羅神社
 出雲國直江鎮座 金刀比羅神社

○貴紳の參拜 賽客數百萬貴紳少からざるを以て一々列記するを得ずといへども
 皇族の親しく御參拜おらせられしは左の如し。

皇太子殿下 明治三十六年十月十三日
 山階宮晃親王殿下 明治二十二年六月三日
 有栖川宮熾仁親王殿下 明治二十年十二月八日
 有栖川宮威仁親王殿下 明治十七年七月六日
 小松宮彰仁親王殿下 明治三十八年十一月二十二日
 伏見宮貞愛親王殿下 明治三十三年六月二十二日
 伏見宮文秀女王殿下 明治二十三年一月三十一日
 伏見宮文秀女王殿下 明治三十四年四月二十九日
 關流宮載仁親王殿下 明治四十四年四月十日

同 延喜惠子殿下 同日
 華頂宮愛賢王殿下 明治三十年七月二十八日
 梨本宮守正王殿下 明治二十三年五月二十五日
 同 宮 明治二十九年十月十八日
 北白川宮輝久王殿下 明治四十一年
 壇地利ハンリー親王殿下 明治二十二年八月二日

○建物統計 境内建物類別統計左の如し(坪數は建坪を示す)

社殿	二十四棟	二百二十七坪餘
神饌殿	三棟	二十坪餘
神樂殿	一棟	十坪餘
御炊舍	一棟	十坪餘
直所	三棟	九坪餘
齋舍	一棟	二十九坪餘
忌籠舍	一棟	十二坪餘
繪馬舍	二棟	六十五坪餘

回廊	四棟	五十九坪餘
手水舎	三棟	七坪餘
寶物館	一棟	五十坪餘
巡查派出所及休息所	二棟	十五坪餘
鼓樓	一棟	六坪餘
書院及事務室等	十七棟	八百四十坪餘
休息所	七棟	二十三坪餘
木馬舎	一棟	十八坪餘
御廩	一棟	十四坪餘
番舎	五棟	二十六坪餘
土藏物置	十二棟	二百三十坪餘
棟門	九棟	六十四坪餘
計	九十七棟	千七百九十八坪餘

○水道統計 當宮所有水道鐵管の統計左の如し。
 飲用水道 本支線計延長 八百四十間

防火水道 本支線計延長 三百二十五間
 計 千六百六十五間

○鳥居統計 境内及接續地に於ける鳥居統計左の如し。

石製鳥居	十基
鐵製鳥居	一基
唐銅製鳥居	一基
計	十二基

○石階敷石玉垣統計 境内に於ける石階敷石及石玉垣の統計左の如し。

石階階敷	六百二十八段
石玉垣延長	六百四十九間四尺餘
敷石延長	四百六十三間四尺餘

○立燈籠統計 境内に於ける立燈籠統計左の如し。

銅製燈籠	四十八基
陶製燈籠	五基
石造燈籠	三百八十七基

計

四百四十基

○高麗狗統計

境内及接續地に於ける高麗狗統計左の如し。

銅製高麗狗

二對

陶製高麗狗

一對

石造高麗狗

四對

計

七對

○水槽石碑統計

境内及接續地に於ける置据水槽及石碑の統計左の如し。

銅製水槽

四個

鐵製水槽

十二個

計

十六個

石碑

十二基

○社設電話統計

當宮所有電話に關る統計左の如し。

本宮、社務所間

線路百五十六間三尺

電線延長三百十三間

電柱八本

社務所、崇敬講社本部間

線路八十間

電線延長六百六十二間

電柱五本

社務所、宮司宅間

線路四百五十四間四尺 電線延長九百〇九間二尺 電柱十九本

合計 線路六百九十一間一尺 電線延長千三百八十二間二尺

電柱三十二本

○神苑面積 (風致保護區共)

神苑

貳萬六千二百八坪

南神苑 (御神事場)

二千九十一坪

北神苑 (高燈籠庭園)

八百九十八坪

計

二萬九千九百九十七坪

○琴平山面積及其區分

全面積百九十一町六反二十六步 内譯左の如し

當宮境内

百〇一町二反一畝七步

當宮所有林

八十二町二反十五步

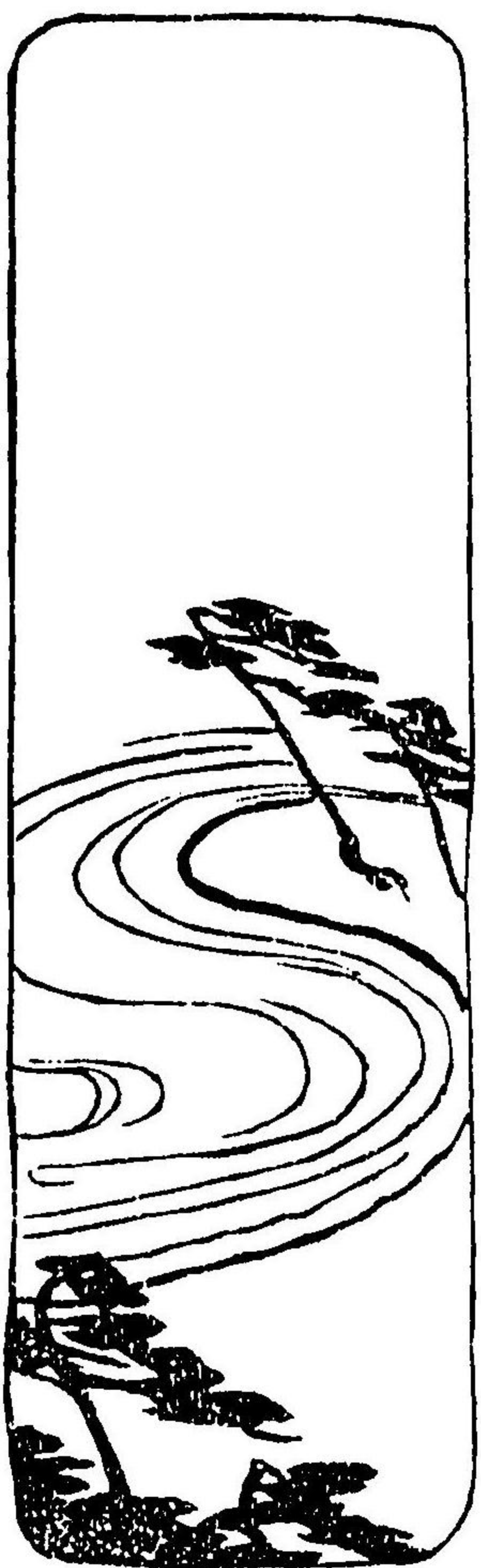
琴平公園

八町一反九畝七步

第六章 境 外

○琴平町 琴平町は當山東麓の市街にして即香川縣仲多度郡にあり明治四十四年六月に於て戸數千三百十戸人口六千八百十人（男三千二百九十八、女三千五百二十人）とす湖川は市街の中部を南北に貫流し一之橋、鞘橋、榮橋、小松橋等之に架す北端に官線鐵道琴平驛あり善通寺多度津丸龜坂出等を経て高松に通し一日十數回發車するを以て交通至便なり。

汽車神速若奔流來往憐々鐵路頭響似迅雷煙似墨象山香客見多稠 臼杵陶庵



市街頗般盛にして旅客の來往織るか如く諸種の商賈軒を並へ日常の事概便せざるな
し夜は電燈の光燦として猶一層の光景を添ふ市の西部は琴平山の山麓より順次山腹
に上りて金刀比羅宮の大門に達す、往昔人家今日の如く多からざる時に當りても五
百長市と稱し詩に歌に其般賑を唱せらる。

半千長市塵高下巧成隣無意弄烟景沾諸待價人

林 春常

昔閩號五百今市已盈千比屋塵縁阪填街人塵肩

皆川 淇園

半千閩且千櫛比奢華競神恩日々崇市肆年々盛

藤澤 南岳

夏の夕涼風徐に水面を涉り行人の衣袂翻るときは盛夏猶冷を覺ゆるものあり。

前市の夜のす、みの床しめて夏をも秋にかへてける哉 文學博士黒川眞頼

水精燈映繡樓臺衣上汗沾街上埃人客各揮金字扇買西瓜去買氷來 森 春濤

燈火樓臺瀧有波黄昏種動酒邊調涼生白紵清於雪滿地月明人影多 永坂 石燧

○官衙公署 市内及隣接地に於ける官衙公署の重なるは町役場、警察分署、尋常

高等小學校、郵便電信局、丸龜區裁判所琴平出張所等なり。

○琴平公園 公園は市街の南端丘陵上にあり琴平山字金山寺山の一區を劃す老松

參差たるあたり櫻桃枝を交ひ四阿其間に點在し仰きては琴平山の青巒を望み俯して

は潮川の清流を瞰ふへし風光四時佳ならざるなしと雖春秋殊に宜し廣袤八町一反九
畝七歩なりとす。

松青炭紫路螺旋踰滿山布錦氈文墨客來多諷詠百禽相和語春烟 田岡 梅里

○金刀比羅宮神事場 一に御旅所或は南神苑と稱す市街の南端にありて潮川の清

流に臨む砂白くして世塵を止めず幾百年を経たる老松枝を垂れて潺々たる碧流に影

を宿し松籟颯々として不斷の樂を奏す月明に星稀なる夕は言はずもかな雪の曙雨の

朝轉詩情を動すに足る四月十五日田植神事、六月三十日大祓神事、九月八日潮川神

事并に十月十日十一日大祭は此齋庭に於て行はる、古來楓時修禊と稱して古人の詩

歌に乏しからず。

明妙照妙なせる紅葉よみろさの幣と散らすもあらなむ 鈴木 重嶺

琴祠秋隱翠微中下有清流上有楓靈鼓坎坎醉人散神鴉啼送夕陽紅 森 槐南

萬野曲流清見底石潭秋水淨無蕪林間温酒燒紅葉到處相逢袂領人 森 春濤

潮川の齋庭に沿へるあたりを石淵と稱す石淵新浴と題する古人の詩歌亦多し。

神代より例をひきて潮ならぬ川上遠くみろさしつらん 犬塚 興恕

いつよりかみろさるめけむ末遠く名になかれたる潮川の水 黒木 茂矩

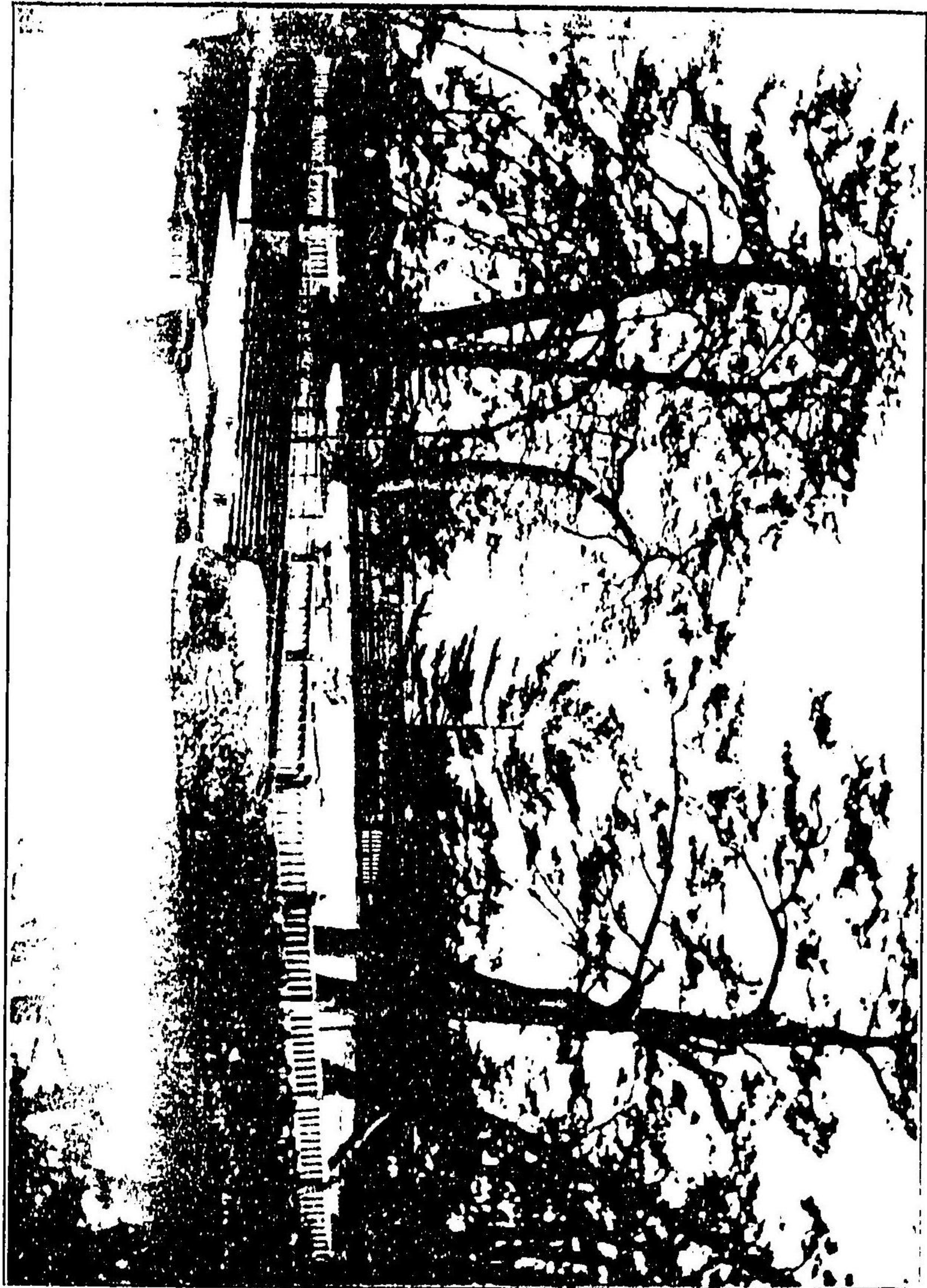
石淵風浴新知有詠歸人能便箇心潔臨流欲賽神

林 春常
皆川 淇園

淵秋修禊浴趣同浴水春何須蘭芷澤自有引湖新
齋庭外梅林あり、花蕾綻はひときは春風爲に芳し此處も亦一樂園たるを失はず、園
の一隅に潮川神事場碑あり牧野古愚の撰文にして市河米庵の書なり。

潮川神事場碑高松儒員牧野古愚謹撰 加藩市河三亥書并題額

象頭山東南之麓臨萬農之水水自東奔注觸崖石而北流旁廣中深名曰石淵其側喬松蒼鬱陰地呼爲潮川神事場神戶行祓禊離垢之儀于此是爲 金毘羅大權現大祭之首務
謹按年例以十月十日舉大祭自上古既然至 後嵯峨帝寬元元年 特勅脩其儀 詔
書今尙存焉神戶上下二偶預卜小松莊良家童男女以任之俗謂之頭人新造盧舍以奉之
選順良翁媪爲之傳保至祭之日具儀衛以登山其盛如王者凡百費用皆國守給之頭人以
下例齋戒三旬故以九月八日浴水致潔金光院主洩而禊之其儀甚嚴所謂神事是也相傳
初行之多度津之海江正平年間國內兵爭道路多梗乃權遣人取海潮雜之淵水以存典刑
後習爲常以至于今是其所以有潮川之稱也但場舊無墻垣之制牛馬牧焉兒童嬉焉終歲
蕪穢臨時一掃除之耳向者鄉之吏下川豐矩竊歎之欲常淨潔之未得其方而卒同僚川崎
重岡能繼其志以今年春與一二父老謀乃爲修治水竇之計遂募國中之善信一言幾唱千



乃比羅宮神事場

金忽聚於是大興工役壘石濼瀾正其區域數旬而竣功景像一新使八肅然起敬無敢言罪
者嗚呼此舉雖因 神德之感召而人力亦不細矣宜勒之石以示久遠而以予之生員其
鄉來徵拙文義不可辭因併記神事之源委使後世有所考若其募緣幹事人名則列之于碑
陰云 弘化三年歲次丙午六月中浣建

大神のみゆきむかへて照妙のぬさともにはふ山の紅葉

片岡 悟範

○金刀比羅宮鞘橋 鞘橋は一に浮橋といふ神事場の北端潮川に架せる奇橋にして
銅葺唐破風の屋根ありて瀟洒なる彫刻を施せりこれ鞘橋の名ある所以にしてまた橋
下柱を用ゐず兩岸より組出の構造なるを以て一に浮橋の名あり長十三間幅二間半創
立年代詳ならずと雖元祿丁丑既に熊谷立閑の詩あるを見る其後寛永天明年度の改造
を經現今のものは明治二年の改築にして阿波國鞘橋講中の寄附せるものなり、元市
街内町新町間即一之橋の位置にありしか去る三十八年今の位置に轉架し并せて修繕
を加へたり毎年大祭に當り神輿此橋上を渡御あり。

これやこの天の浮橋うへしころ我大神の渡りましぬれ

久米 幹文

長虹彎挂風雲際人水相分兩道行象外咸觀舊日月臨流洗耳有誰賡

清國人雷音博

人攀西嶽去水向北溟流風力推無運始知不是舟

林 春常

橋上安廊屋設廂且兩根在中何所似舟居非水人

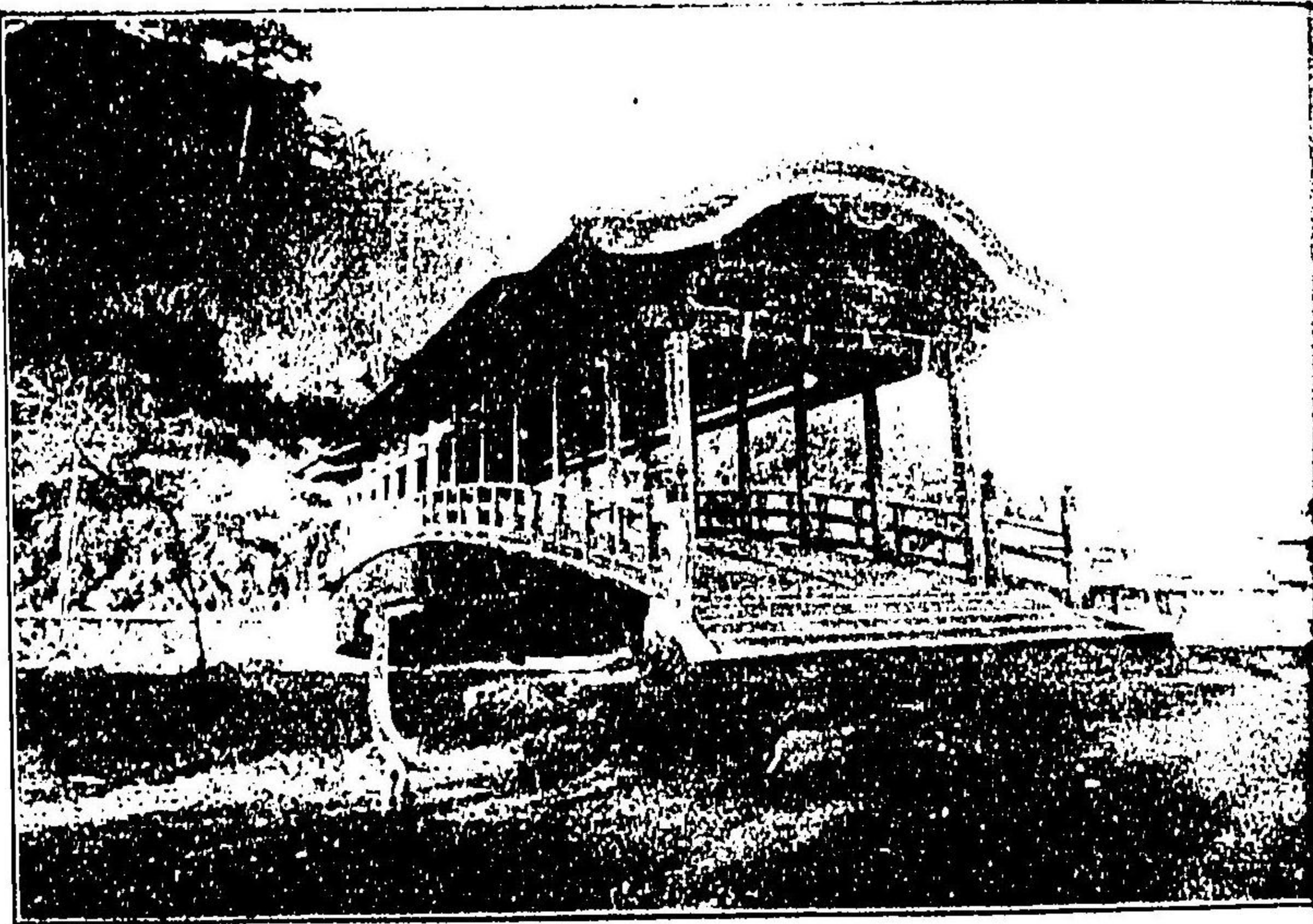
皆川 淇園

複道長三丈穹條架溪岸遠人可慰勞勿佐秦宮看

藤澤 岳岳

○金刀比羅宮高燈籠 市街の東部富士見町を北すれば左右に石造の獻燈數十基羅列し其間數十の櫻樹を植栽せるを見る、さて更に進めは路の東側に靈驗碑あり朝川鼎の撰文にして江戸増上寺僧顯察の書なり、さて此碑を見て行く事數十歩魏然として聳ゆる高閣あり形式優秀結構温雅以て斯道の參考に資すへし、これ即毎夜當宮に獻燈する所謂高燈籠にして慶應元年當國寒川郡萬歲講の寄附に係る高十五間一尺敷坪七坪餘なり、閣の周圍には老松參差枝を垂れ南方には各種の樹木を植栽して散策に便す北神苑の稱あり、もしろれ杜鵑一聲殘燈影白き時に會せば優に俗塵を離脱するものあらむ。

森々老樹白雲齊夜閣高懸新月低裂帛有聲人縮首燈光青處一鵑啼 巖谷 一六
百尺神標聳道傍賽人歸去夜蒼茫一聲橫掠杜鵑影燈暈耿於殘月光 森 春濤



金刀比羅宮稍橋(浮橋)



金刀比羅宮高燈籠

寶物目錄

寶物目録

凡例

- 一、當宮寶物類を寶物、貴重品、什物、崇敬講社本部特別備品の四部に分別すと雖是整理上の便宜より出たる區分にして孰れも畢竟寶物類に外ならされは寶物目録なる題名の下に集録せり
- 一、國寶に指定せられたるものは前項四部の外特に一部として別記し祭器類は整理上の都合により前項の區分に拘らず
- 一、本目録は各其品種に従ひ類別したるも 皇室及皇族に係るものは品種に拘らず之を別丁に載す
- 一、一品にして二類以上に跨るものは其主なる品質の屬する區分に従ふ例令は皇族御筆蹟にして其御寄附に係るものは御筆蹟類に編入し又戦利の刀劍は刀劍類に屬せしめずして戦利品に編入したるか如し
- 一、本目録編纂中新に編入せられたるものありては他日再刊を待て訂正せむとす
- 一、本目録を以て寶物館陳列品と對照せむとせば列品の題箋に記入せる略號を以て

本目錄の索引に照合すへし假令は題箋の略號貴文一とあらは索引に於て略號貴文とあるものと照合し其下に記入せる頁數によりて求むるところを知り得へし

一、寶物類數百點の多きを算し到底一時に寶物館内に陳列すへからざるを以て時々陳列替あるへき豫定也故に本目錄に記載の物品にして館内列品中に發見せざるものあるへし

一、宸翰御筆及作者の索引は之を卷尾に附して檢索に便す

寶物目錄索引

第一種	宸翰類	八一頁
第二種	寶物之部	
	綸旨勅納品御料品類	八三頁
	國寶之部	八三頁
	寶物之部	八三頁
	貴重品之部	八六頁
第三種	皇族御筆蹟類	八七頁
	寶物之部	八七頁
	貴重品之部	八七頁
	崇敬講本部特別備品之部	八九頁
第四種	皇族御寄附品類	九〇頁
	寶物之部	九〇頁
第五種	祭器類 (祭器)	九一頁

第六種 文書類

寶物之部 (寶文)
貴重品之部 (貴文)

九三頁
九八頁

第七種 書畫類

國寶之部 (寶書)
寶物之部 (寶畫)
貴重品之部 (貴書)
什物之部 (什畫)
崇敬講社本部特別備品之部 (講書)

一〇一頁
一〇五頁
一一一頁
一二五頁
一二八頁

第八種 扁額屏風類

寶物之部 (寶扁)
貴重品之部 (貴扁)
什物之部 (什扁)
崇敬講社本部特別備品之部 (講扁)

一三〇頁
一三四頁
一三七頁
一四一頁

第九種 棟札類

寶物之部 (寶棟)
貴重品之部 (貴棟)

一四三頁
一四三頁

第十種 刀劍類

國寶之部 (寶刀)
寶物之部 (寶劍)
貴重品之部 (貴刀)
什物之部 (什刀)

一四五頁
一四五頁
一五〇頁
一五六頁

第十一種 甲冑弓矢類

寶物之部 (寶甲)
貴重品之部 (貴甲)
什物之部 (什甲)

一五九頁
一六一頁
一六三頁

第十二種 戰利品戰時獲得品類

寶物之部 (寶戰)
貴重品之部 (貴戰)
什物之部 (什戰)

一六五頁
一六八頁
一六九頁

第十三種 金 錢 類

寶物之部 (寶金)

一七六頁

貴重品之部 (貴金)

一七八頁

第十四種 樂 器 類

寶物之部 (寶樂)

一八四頁

貴重品之部 (貴樂)

一八六頁

什物之部 (什樂)

一八六頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講樂)

一八七頁

第十五種 彫 塑 像 佛 具 類

寶物之部 (寶彫)

一八八頁

第十六種 雜 品 類

寶物之部 (寶雜)

一九〇頁

貴重品之部 (貴雜)

一九六頁

什物之部 (什雜)

一九九頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講雜)

二〇三頁

寶物類統計表

整理上ノ區分ニヨル統計

品種ニヨル統計

二〇五頁

二〇五頁

宸翰索引

二二一頁

御筆索引

二二一頁

作者索引

二二二頁

繪畫之部

二二二頁

彫刻之部

二二五頁

墨蹟之部

二二五頁

刀劍之部

二二九頁

諸工藝之部

二二二頁

第一種 宸翰類

寶物之部

- (寶書一) 崇徳天皇宸翰 一聲に云々 紺紙金泥 一 幅
- (寶書五九) 崇徳天皇宸翰 般若心經 紙本墨書 一 卷
- (寶書六〇) 後伏見天皇宸翰 御詠草 紙本墨書 一 卷
- (寶書六一) 後醍醐天皇宸翰 吉野御懷紙 紙本墨書 足引の云々 一 幅
- (寶書三) 後圓融天皇宸翰 御色紙 水の面に云々 一 幅
- (寶書四) 後花園天皇宸翰 御小色紙 うちほへて云々 一 幅
- (寶書五) 後奈良天皇宸翰 御懷紙 雲はれて云々 一 幅
- (寶書六) 後奈良天皇宸翰 御懷紙 うれしさを云々 一 幅
- (寶書七) 正親町天皇宸翰 御色紙 秋はて、云々 一 幅
- (寶書八) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 作日かも云々 一 幅
- (寶書九) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 思はずや云々 一 幅
- (寶書一〇) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 枕をろはたて云々 一 幅

(寶書二)	後水尾天皇宸翰	御色紙	今よりの云々
(寶書三)	後水尾天皇宸翰	御色紙	先たちて云々
(寶書三)	後水尾天皇宸翰	御小色紙	色かはる云々

一 幅
一 幅
一 幅



國寶 奈興竹物語繪卷の一部

第二種 繪旨勅納品御料品類

國寶之部

(寶書七〇)

奈與竹物語 紙本著色

一卷

社傳大納言爲家書藤原隆能畫

臨時全國寶物取調局鑑査曰世尊寺家經畫高階隆兼畫

一卷ノ寸尺 縱一尺〇四分 横四丈六尺〇九分

奈與竹物語一云鳴門中將物語或云吳竹物語

元准勅封御品

明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシテ美

術上ノ模範トナルヘキモノト認定セラレ

明治三十四年三月二十七日内務省告示第二十號ヲ以テ國寶中種三等

ニ定メラル (挿圖參照)

寶物之部

(寶文二) 桃園天皇繪旨 淡墨紙本墨書 一通 寶曆十年五月廿日

繪旨云

金毘羅大權現者讚岐國所在之一社不在于他彌依

御崇信宜爲

勅願所奉祈天下安全寶祚延長者依

天氣執達如件

寶曆十年五月廿日

右中將 花押

金光院權僧正御房

(寶文二) 孝明天皇繪旨 淡墨紙本墨書 一通 文久三年三月四日

(寶文三) 今上天皇御宣命 黃紙墨書 一通 慶應四年八月十八日

(寶文六) 今上天皇御祭文 白紙墨書 一通 明治十八年六月十四日

(寶文四) 今上天皇御祭文 白紙墨書 一通

(寶文五) 今上天皇御祭文 白紙墨書 一通 明治三十七年二月二十三日

(寶文六) 今上天皇御祭文 白紙墨書 一通 明治三十八年十二月五日

(寶金二) 後水尾天皇勅納大佛大判金 量目四十四匁 一枚

(寶刀四) 今上天皇勅納御短刀 筑前住國弘作 長九寸一分 中心二寸八分五厘

燒刃亂 目釘穴二 釧金著一枚 鞘白木 替鞘白木 袋赤地大和錦

明治十六年四月十四日勅納 一口 (插圖參照)

(寶雜一) 青瓷御華瓶 一對

浮牡丹手

口亘七寸九分 高二尺九分

元准勅封御品

崇德天皇御料御鏝 一者金桐御紋形 一者銀菊御紋形 二個

元准勅封御品

(寶雜八) 崇德天皇御料十二連御鏡 所傳 一面 讚岐鶴足郡宇多津村畑泰親獻納

(寶雜三) 崇德天皇御料御笏 所傳 一握 讚岐鶴足郡宇多津村畑泰親獻納

(寶雜二) 光格天皇御料御祝箱(插圖參照) 一個 藤中納言局獻納

紫檀地牡丹獅子圖金高蒔繪 金具銀

但將軍德川家齊ヨリ宮中へ獻シタルモノ

(寶雜五) 光格天皇御料御襪 一重 梅小路正三位參議定肖獻納

表白地綾菊花菊葉繡 緣赤地大和錦 下敷青地緞子松竹梅文様
(寶雜四) 仁孝天皇御料御褥 形式右ニ同シ 一重 梅小路正三位參議定有獻納

貴重品之部

(貴樂七)

英照皇太后御料御泊扇

所傳

表松竹梅裏蝶鳥文様

一握

(貴樂八)

英照皇太后御料御泊扇

所傳

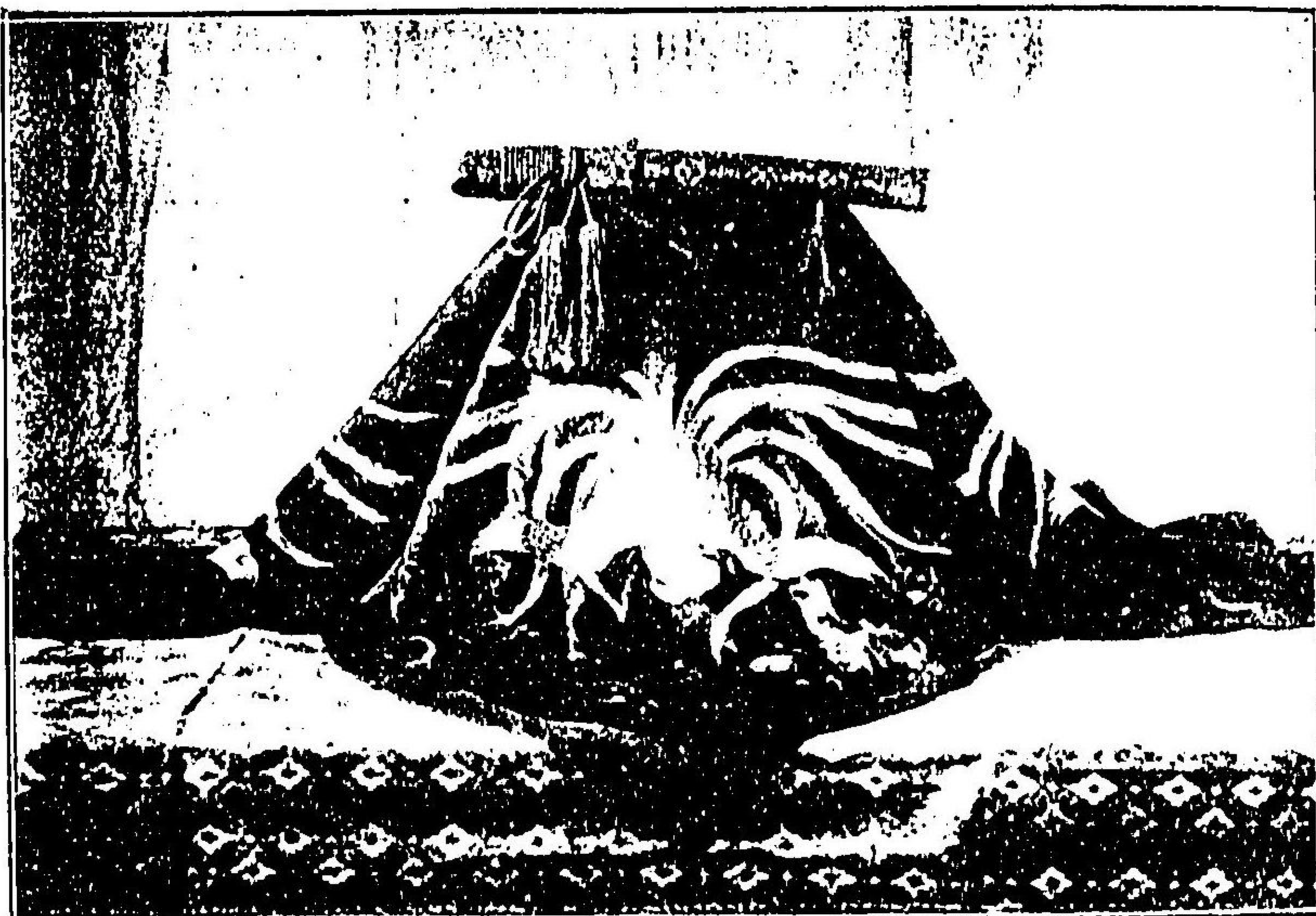
表松裏蝶鳥文様

一握

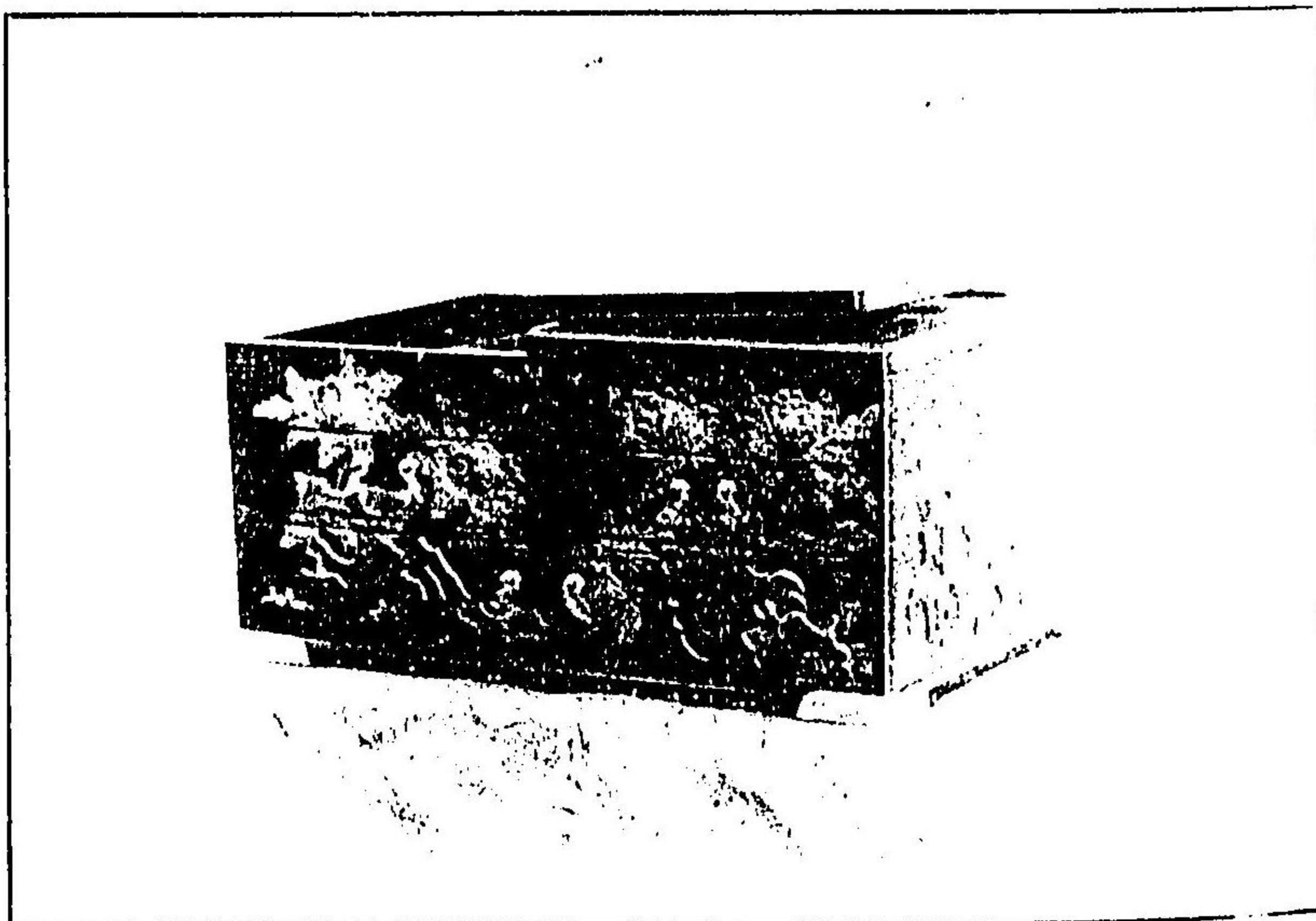
(貴雜三)

桃園天皇御料御褥

一重



今上天皇勅納御短刀



光格天皇御料硯箱

第二種 皇族御筆蹟類

寶物之部

- (寶書四) 伏見宮邦永親王御筆 懷紙 一幅
- (寶書五) 高松宮好仁親王御筆 懷紙 一幅
- (寶書六) 道晃親王御筆 額字 語云金毘羅太權現 一幅
- (寶書一) 尊圓親王御筆 消息卷 一卷
- (寶書二) 良純親王御筆 和歌卷 一卷
- (寶扁一) 道晃親王御筆 額 語云金毘羅大權現 一面

貴重品之部

- (貴書二) 竹内宮良尚親王御筆 一幅 高松城主松平讃岐守頼重獻納
- (貴書三) 竹内宮良尚親王御筆 語云象頭山 一幅 同人獻納
- (貴書四) 山階宮晃親王御筆 懷紙 一幅 山階官御寄附

明治二十二年六月讃岐の國金刀比羅神社にまうてける時

大勳位晃親王

このかみのおほみひかりのかしこさはとつくにまてもあふくどろさく

(貴書 丑) 有栖川宮熾仁親王御筆 賢所尊號 一幅 有栖川宮 御寄附

(貴書 三) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云事比羅宮 二枚 同 宮 御寄附

(貴書 四) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云賢木門 二枚 同 宮 御寄附

(貴書 五) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云琴平山 二枚 同 宮 御寄附

(貴書 六) 小松宮彰仁親王御筆 額字 語云壽且昌 一枚 小松宮 御寄附

(貴書 七) 伏見宮貞愛親王御筆 短冊 一枚 伏見宮 御寄附

琴平の社にまうて、 貞愛

(貴扁 六) 寶鏡寺宮御筆 額 語云金毘羅大權現 紫地金書 一面 諏方加兵衛獻納

(貴扁 三) 小松宮彰仁親王御筆 額 語云瑞色鮮 絹本 隸書 一面 小松宮 御寄附

(貴書 六) 伏見宮文秀女王御筆 懷紙 一枚 同 宮 御寄附

社頭祈世

文秀女王

大君のみよを八千代と瑞かきにいのるまことは神もうくらむ

崇敬講社本部特別備品之部

(講扁 一) 有栖川宮熾仁親王御筆 額 語云敬神尊王 絹本墨書 一面

第四種 皇族御寄附品類

寶物之部

(寶刀五)

有栖川宮熾仁親王御寄附 太刀 肥前國忠吉作 一振

有栖川宮御附從六位藤井希璞添翰添

(寶雜六)

有栖川宮熾仁親王御寄附 銅鏡桐竹菊花鳳凰模樣 一面

有栖川宮御附從六位藤井希璞添翰添

第五種 祭器類 (祭器)

(祭器)

御弓 黑漆 赤地大和錦袋添 二張

(祭器)

御矢 白羽 黑漆篋 尖簇 百二十八枝

(祭器)

御楯 黑漆金泥御紋章 二面

(祭器)

御弓 朱漆 赤地大和錦袋添 二張

(祭器)

御矢 山鳥羽 尖簇 八十枝

(祭器)

御楯 櫻木地御紋章櫻花金蒔繪 二面

(祭器)

御巴 黑漆鞘繪金泥繪 赤地大和錦袋添 二個

(祭器)

御鉾 鉾鐵 柄黑漆 曲玉一連附屬 二本

(祭器)

御鉾 鉾鐵 柄黑漆 鐮柔形日蔭曼毛彫 吹散青地大和錦 二本

(祭器)

御旗 鉾黃銅 柄黑漆 鐮圓形魚子地日蔭曼浮彫 旗兩面蜀江錦御紋章

金絲織出長一丈二尺五寸幅二尺三寸 房水色蛇腹華鬘結 化粧絹紅白

綾御紋章日蔭曼文樣四條 二本

(祭器)

御旗 同上但化粧絹文樣菊水青海波松竹梅 二本

- (祭器) 御錦蓋 帳金絲織梅花文様 水引緋緞子御紋章金絲織出 一指
- (祭器) 御絹傘 柄螺鈿御紋章散 一本
- (祭器) 御翳 二本
- (祭器) 御几帳 白地綾雲立涌文様 一垂
- (祭器) 御几帳 白綾固織日蔭曼立涌地紋菊花御紋章丸金御紋章散 一垂
- (祭器) 神主舞裝束 一具
- (祭器) 諸司舞裝束 一具
- (祭器) 葱花盤 一基

第六種 文書類

寶物之部 (寶文)

- (四) 攝政執達狀 白紙墨書 一通

日本一社金毘羅大權現今度

勅願所被 仰出問 寶祚長久之御祈禱彌無怠慢可被修行之旨攝政殿御

命之所候仍執啓如件

寶曆三年十二月廿二日

難波讚岐守 花押

保田内匠頭 花押

讚岐國金光院

法印權大僧都殿

- (五) 平保盛寄進狀 康安二年四月十五日 一通
- (六) 僧頼景寄進狀 貞治元年三月十八日 一通
- (七) 僧頼景寄進狀 應安四年十一月十八日 一通
- (八) 僧頼景寄進狀 康曆元年九月十七日 一通

- (九) 平景次寄進狀 永徳二年三月廿六日 一通
- (一〇) 當宮神事記 觀應元年十月 宥範僧正筆 一册
- (一一) 奉物日記 慶長廿年十月十一日 一册
- (一二) 仙洞御所日記 一軸
- (一三) 仙石權兵衛秀久制札案 天正十三年八月十日 一通
- (一四) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十三年十月十九日 一通
- (一五) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十四年二月十三日 一通
- (一六) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十四年八月廿四日 一通
- (一七) 生駒讚岐守一正寄進狀 天正十六年七月十八日 一通
- (一八) 生駒讚岐守一正寄進狀 天正十七年二月廿一日 一通
- (一九) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長五年十二月十三日 一通
- (二〇) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長六年三月二十八日 一通
- (二一) 生駒讚岐守一正書翰 慶長六年三月五日 一通
- (二二) 生駒讚岐守一正書翰 正月二十九日 一通
- (二三) 生駒讚岐守一正書翰 正月六日 一通

- (二四) 生駒讚岐守一正書翰 十月六日 一通
- (二五) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長十二年卯月二日 一通
- (二六) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長十二年十月二十日淺井周防署名 一通
- (二七) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十四年九月六日 一通
- (二八) 生駒讚岐守一正寄進狀 正月十九日 一通
- (二九) 生駒讚岐守一正寄進狀 卯月二日淺井周防署名 一通
- (三〇) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十五年八月七日淺田右京署名 一通
- (三一) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十八年正月十四日 一通
- (三二) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十八年正月十六日尾池玄蕃伊曾權右門入谷外 一通
- (三三) 記署名
- (三四) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十八年正月十六日尾池玄蕃伊曾權右門入谷外 一通
- (三五) 生駒讚岐守一正免許狀 元和四年三月十日 一通
- (三六) 生駒讚岐守一正免許狀 九月五日淺田右京署名 一通
- (三七) 生駒讚岐守一正免許狀 九月廿一日淺井喜八郎署名 一通

- (三七) 生駒讚岐守正俊 書翰 元和六年十月六日 一通
- (三六) 生駒讚岐守正俊 書翰 二月廿日 一通
- (三五) 生駒讚岐守正俊 書翰 五月九日 一通
- (三四) 生駒讚岐守正俊 書翰 六月三日 一通
- (四一) 生駒讚岐守正俊 書翰 八月廿一日 一通
- (四二) 生駒讚岐守正俊 書翰 十月二十八日 一通
- (四三) 生駒讚岐守正俊 寄進狀 十一月九日 一通
- (四四) 生駒小法師高俊 寄進狀 元和七年十一月廿八日 一通
- (四五) 生駒小法師高俊 免許狀 元和七年十一月廿八日 一通
- (四六) 常山緣起 讚岐高松城主松平右京大夫源賴重撰并書 絹本墨書 一軸
- (四七) 常山緣起 添書 承應四年前南禪見僧錄最嶽叟元良撰并書 一軸
- (四八) 松平讚岐守賴重願文 寬文五乙巳九月廿八日 一通
- (四九) 松平讚岐守賴重願文 寬文十一年八月廿一日 一通
- (五〇) 松平讚岐守賴重弓外七點寄進目錄 四月廿六日 一通

- (五一) 高松隱士書翰 三月廿七日 一通
- (五二) 高松隱士書翰 添書 三月廿八日雜賀平左衛門署名 一通
- (五三) 高松隱士書翰 添書 四月五日横倉久右衛門竹井金左衛門署名 一通
- (五四) 神祇官符 明治元年七月宮號勅定 一通
- (五五) 神祇官符 明治元年七月宮號勅定官符添書 一通
- (五六) 太政官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定 一通
- (五七) 神祇官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定官符添書 一通
- (五八) 神祇官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定 二付キ管轄替達書 一通
- (五九) 神祇官符 明治四年辛未十月十五日大嘗祭班幣目錄 一通
- (六〇) 神祇官符 明治四年十一月四日達書 一通
- (六一) 宮内省符 明治十六年四月十四日付 一通

事比羅宮宮司

今般

思食ヲ以白鞘御短刀筑前國住左國弘作一口御寄附被遊候旨被仰出候事

明治十六年四月十四日

宮内省

(查)

宮内省符 明治二十一年四月十七日保存金御下賜達書

一通

事比羅宮宮司

今般其神社保存會設立之趣被

開食金三百圓下賜候事

明治廿一年四月十七日

宮内省

貴重品之部 (貴文)

- (一) 將軍德川家光朱印狀贍本 慶安元年二月廿四日 一通
- (二) 將軍德川家綱朱印狀贍本 寬文五年七月十一日 一通
- (三) 將軍德川綱吉朱印狀模本 貞享二年六月十一日 一通
- (四) 將軍德川綱吉朱印狀贍本 貞享二年六月十一日 一通
- (五) 將軍德川吉宗朱印狀贍本 享保三年七月十一日 一通

- (六) 將軍德川家重朱印狀贍本 延享四年八月十一日 一通
- (七) 將軍德川家治朱印狀贍本 寶曆十二年八月十一日 一通
- (八) 將軍德川家齊朱印狀贍本 天明八年九月十一日 一通
- (九) 將軍德川家慶朱印狀贍本 天保十年九月十一日 一通
- (一〇) 將軍德川家定朱印狀贍本 安政二年九月十一日 一通
- (一一) 將軍德川家茂朱印狀贍本 萬延元年九月十一日 一通
- (一二) 六角越前守藤原廣治願文 元祿八年八月十五日 一通
- (一三) 松平越中守定永寄進狀 天保三年四月朔日 一通
- (一四) 太政官牒模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (一五) 民部省符模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (一六) 弘福寺土地券牒模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (一七) 弘福寺土地券牒模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (一八) 土地券文模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (一九) 東大寺牒狀模本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (二〇) 慈圓法師願文模本 元冷泉爲恭藏品 一軸

- (三) 正稅帳磨本 元冷泉爲恭藏品 三軸
- (三) 聖田古書磨本 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (三) 奉行院司雅俊朝臣記 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (四) 沙門空海入唐請來目錄 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (五) 橋氏處分狀 元冷泉爲恭藏品 一軸
- (六) 仁和寺宮灰筋塀御寄進狀 大高檀紙 一通

灰筋塀 百間

右依有御願之子細被寄附于其社頭處也者依

總法務宮令命執達如件

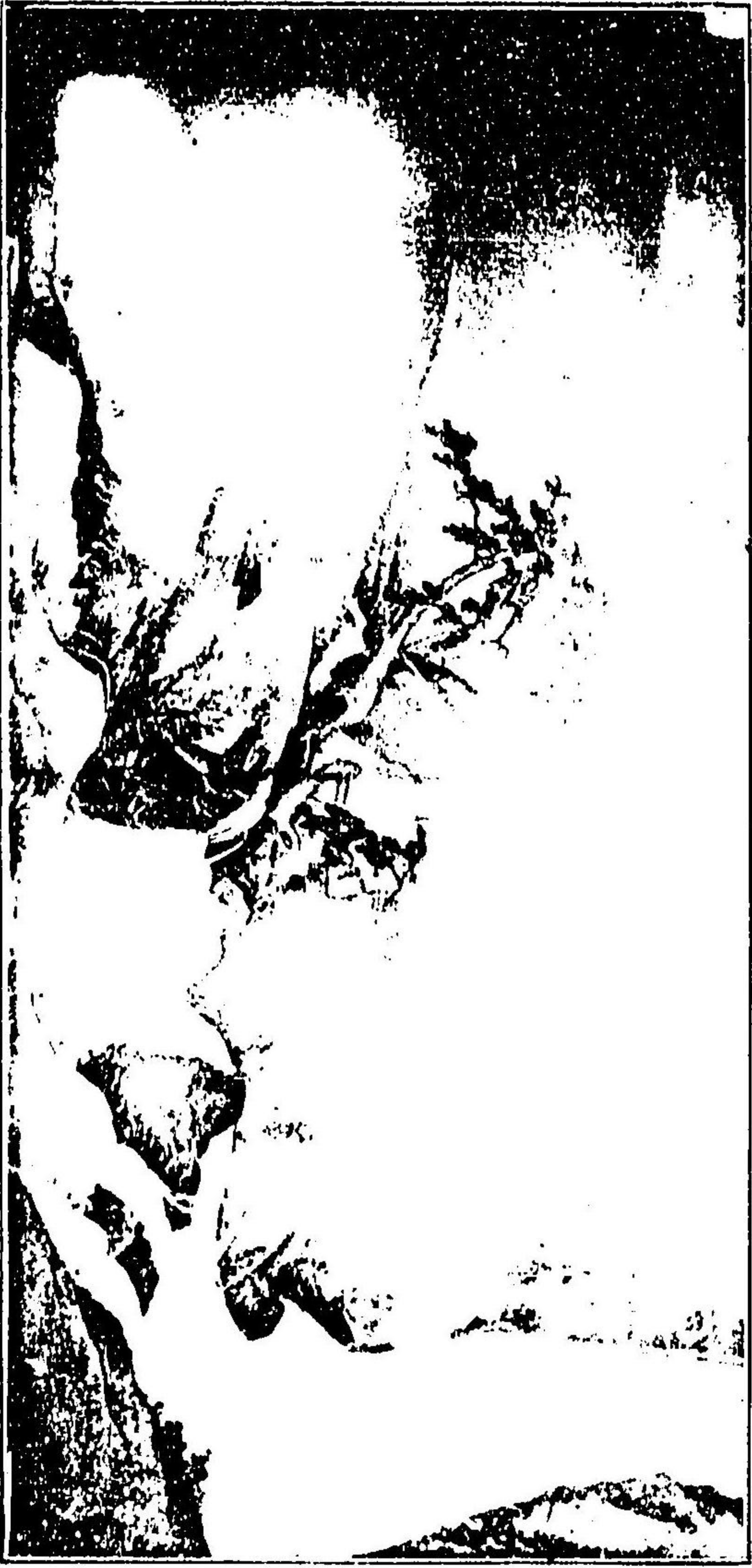
文政十三年三月廿五日

久富遠江守 華押
 芝築地總在廳 華押
 橋本民部卿 華押

象頭山金光院宥天芳納



國寶 繪才天十五童子像 傳云巨勢金岡筆



國寶 社務所表書院上段床幾附 聖山懸梁柱

第七種 書畫類

國寶之部 (寶書)

(三) 辯才天十五童子像 傳云巨勢金剛筆 絹本着色 無款 一幅 (挿圖參照)

縱四尺二寸五分 横一尺七寸四分

明治三十四年三月二十七日內務省告示第二十號ヲ以テ甲種四等國寶

ニ定メラル

(六) 社務所表書院張附并襖繪畫 圓山應舉筆 紙本金砂子地墨畫

上段

床張附正面左右共

瀑布古松圖 三枚 (挿圖參照)

張 臺 襖

山水樓閣圖 四枚

附書院明障子腰張

野山稚松圖 四枚

- 架燈口兩脇張附 二枚
- 野山稚松圖 一枚
- 架燈口左側張附 一枚
- 野山稚松圖 一枚
- 架燈口右側張附 一枚
- 無地 一枚
- 違棚下袋戸張附 二枚
- 野山稚松圖 二枚
- 違棚橫脇張附 一枚
- 野山圖 一枚
- 左右違棚下及框張附 五枚
- 無地 五枚
- 二ノ間 四枚
- 襖 四枚
- 春景山水圖 四枚

長押下張附
 春景山水圖 二枚
 明障子腰張
 右 河邊新竹圖 二枚
 左 野山稚松圖 二枚
 欸云寛政甲寅初冬寫平安源應舉
 以上 明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ
 テ美術上ノ模範トシテ要用ナルヘキモノト認定セラル
 以上 明治三十四年三月二十七日内務省告示第二十號ヲ以テ甲種
 三等國寶ニ定メラル

- 七賢ノ間 八枚
- 襖 八枚
- 竹林七賢人圖 八枚
- 明障子腰張 八枚
- 岩竹圖 八枚

虎ノ間
襖

遊虎圖

十六枚

明障子腰張

岩松圖

八枚

款云天明七丁未夏月寫平安源應舉

鶴ノ間

床張附正面左右共

稚松雙鶴圖

三枚

襖

稚松丹頂圖

四枚

明障子腰張

稚松圖

二枚

襖

萱丹頂圖

四枚

明障子腰張

蘆圖

四枚

以上 明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ
テ美術上ノ模範トシテ要用ナルヘキモノト認定セラル
以上 明治三十四年三月二十七日内務省告示第二十號ヲ以テ甲種
四等國寶ニ定メラル

寶物之部 (寶書)

- (一七) 牡丹花畫贊 絹本著色 贊和歌一首 一幅
書良應親王御筆 畫式部丞丹波賴庸筆
- (一八) 小色紙 攝政藤原良經筆 紙本和歌 一幅
- (一九) 大色紙 中納言藤原定家筆 紙本和歌 一幅 讃岐高松 牧野猶右衛門獻納
- (二〇) 豐臣秀次朝鮮征討下知狀 在秀次印章 一幅
- (二一) 扇面謠曲 傳云德川家光筆 金地墨書 一幅
- (二二) 扇面謠曲 傳云德川家綱筆 紙本墨畫 一幅
- (二三) 竹雀圖 傳云德川家綱筆 紙本墨畫 一幅

- (二四) 尾張大納言徳川義直書翰 紙本墨書 一幅
- (二五) 尾張中納言徳川吉通書翰 紙本墨書 一幅
- (二六) 白鷹圖 宋徽宗皇帝筆 絹本著色 一幅
- (二七) 般若心經 僧空海(弘法大師)筆 紙本墨書 世稱鼠跡心經 一幅
款云沙門空海 經卷ノ裏面ニ書ス
- (二八) 阿彌陀名號 傳云僧空海(弘法大師)筆 紙本墨書 一幅
世稱字々名號 細字名號ヲ書連テテ大字名號トナセルモノ
- (二九) 大黒天 像 傳云僧空海(弘法大師)筆 紙本著色 一幅
世稱千體大黒 一幅中ニ大黒天像實數ノ千軀アリ
- (三〇) 阿彌陀名號 傳云僧空海(弘法大師)筆 紙本墨書 一幅
世稱十界名號 文字中ニ十界ノ圖アリ
- (三一) 大威徳明王像 傳云僧空海(弘法大師)筆 絹本著色 一幅
- (三二) 不動明王像 傳云僧圓珍(智證大師)筆 絹本著色 一幅
像稱血不動 傳云圓珍人唐ノ時祈願ノ爲當宮へ獻納スト
明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ美術

上ノ參攷トナルヘキモノト認定セラレ

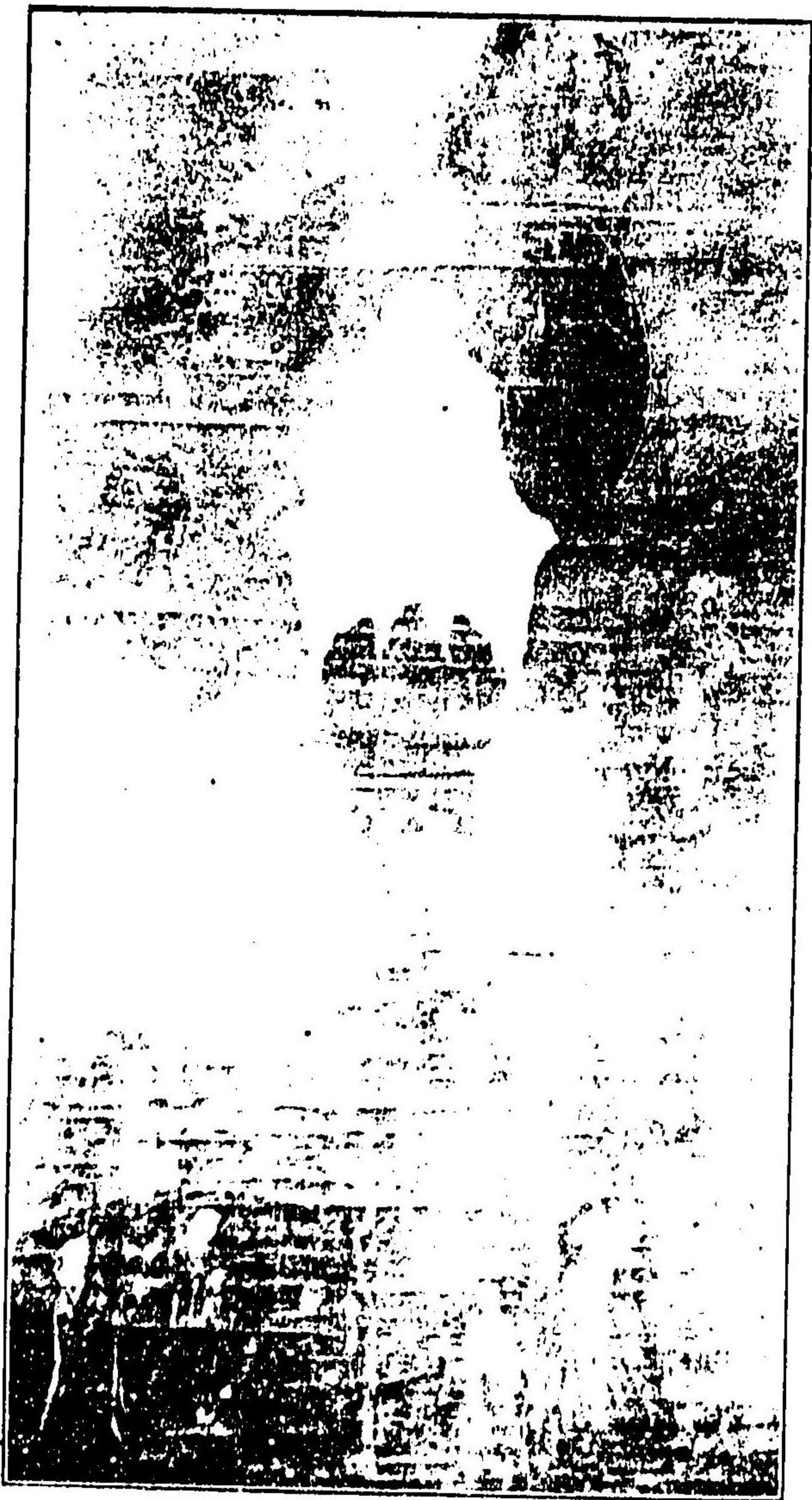
- (三三) 三尊阿彌陀佛像 傳云比丘尼法如(中將姫)筆 絹本金泥畫 一幅
世稱植髮阿彌陀 像ノ頭髮ニハ人髮ヲ植ウ
- (三四) 阿彌陀名號 傳云僧高辨(明惠上人)筆 紺紙金泥 一幅
世稱蓮華形名號 蓮ノ花瓣ヲ畫キテ字畫トナス
- (三五) 不動種子 傳云僧覺鑿(興教大師)筆 絹本著色 一幅
中央ニ金泥ヲ以テ種子(梵字)ヲ書シ左右ニ俱利迦羅龍及制駄迦童子ヲ畫ク
- (三六) 不動明王及二童子像 傳云巨勢金岡筆 絹本著色 一幅
迦羅羅炎異様ナルヲ以テ稱セラル
- (三七) 釋迦三尊十六羅漢像 傳云僧明兆筆 絹本著色 三幅
- (三八) 楊柳觀音像 傳云僧明兆筆 絹本著色 一幅
明治二十四年七月十四日臨時全國寶物取調局ニ於テ全國寶物參攷簿ニ登錄セラル
- (三九) 白衣觀音像 僧雪舟筆 紙本墨畫 一幅 柳下平十郎獻納

世稱圓觀音(國中ニ像アリ依リテ稱ス)
 (四一) 童形文殊菩薩像 土佐光益筆 紙本著色 一幅
 (四二) 釋迦三尊二天四天王十羅刹像 筆者不詳 絹本著色 一幅 (挿圖参照)
 明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ美術

上ノ參収トナルヘキモノト認定セラル

- (四三) 歌切 僧寂蓮筆 紙本墨書 一幅
- (四四) 歌切 僧圓位(西行法師)筆 紙本墨書 一幅
- (四五) 野牛圖 狩野元信筆 紙本墨畫 一幅
- (四六) 知章醉騎圖 傳云狩野元信筆 紙本墨書 一幅
- (四七) 童形文殊菩薩騎獅像并牡丹圖 狩野探幽齋守信筆 三幅
 絹本著色 讃岐高松城主平松讚岐守頼聰獻納
- (四八) 虎圖 狩野探幽守信筆 宋牧溪ノ筆意ニ倣フト云 絹本墨畫 一幅
- (四九) 花下遊馬圖 狩野永真安信筆 絹本著色 一幅
- (五〇) 熊背圖 僧雪村筆 紙本墨畫 一幅
- (五一) 鯉魚圖 長澤良雪筆 紙本墨畫 一幅

釋迦三尊二天四天王十羅刹像 筆者不詳



- (四) 瓜洲子圖 宋牧溪所筆 紙本墨畫 一幅
- (五) 雲龍圖 宋陳翁所筆 絹本墨畫 一幅 板倉佐渡守獻納
- (六) 雲龍圖 宋陳翁筆 絹本墨畫 一幅 伊豫和氣郡堀江村西山徵獻納
- (七) 蘇武別李陵圖 傳云趙仲穆筆 墨畫 一幅
- (八) 牡丹孔雀圖 明周之冕筆 絹本著色 一幅
- (九) 尊勝陀羅尼經 傳云僧空海(弘法大師)筆 絹本墨書 一軸
- (十) 般若心經 權大納言公全筆 紺紙金泥 一軸
- (十一) 法華經 筆者不詳 紺紙金泥 八軸 高松城主松平設岐守賴重獻納
- (十二) 金剛不空三摩耶經 筆者不詳 紺紙金泥 二軸 薩摩國 島津義私獻納
- (十三) 金光明最勝王經 筆者不詳 紺紙金泥 十軸 長修理獻納
- (十四) 金剛頂瑜伽經 前山寺量界房筆 一軸
- (十五) 觀佛三昧海經 筆者不詳 一軸
- (十六) 崇德院御影堂法樂和歌 一軸
- (十七) 百韻和歌 奧書云慶安五年壬辰三月中旬宗好 一軸
- (十八) 連歌百韻 奧書云寬永十有一陽春日岩手治右衛門尉英方 一軸

(十四) 御即位調度圖 紙本著色 筆者不詳 七軸 御厨子所預從四位下若

讚岐國栗山柴邦彦編輯 日野正二位藤原實枝監

狹守紀宗直監

(十五) 當山十二境詩 伊藤東涯筆 一軸 畫ハ模本ニシテ冷泉爲恭

(十六) 春日權現驗記模本 詞書ハ勝本ニシテ古川躬行筆 畫ハ模本ニシテ冷泉爲恭

筆 書ハ紙本墨書 畫ハ絹本著色 一軸 大和國奈良 富田光美獻納

(十七) 寶永十七年讚岐國繪圖 紙本著色 一帖 讚岐 生駒壹岐守高俊獻納

(十八) 嘉元仙洞百首 吉田兼好筆 二帖 花月乘黃愚獻納

(十九) 保元物語 筆者不詳 三帖 讚岐高松 松崎保獻納

(二十) 平治物語 筆者不詳 三帖 右同人獻納

(二十一) 伊勢物語 山崎宗鑑筆 一帖 右同人獻納

(二十二) 經切歌切手鑑 一帖

(二十三) 短冊帖 一帖

(二十四) 書畫手鑑 毘沙門堂公嚴ヨリ高辻豐永ニ送ル百六紙ヲ貼ス 一帖

(二十五) 一日千首短冊 道珍ヨリ伊藤ニ送レ五十七葉ヲ貼ス 一帖

(二十六) 伊勢物語 牡丹花百柱筆 一帖

(二十七) 金剛般若波羅密經 清人蔣如筆 紺紙金泥 一帖 濱東明佐野屋喜右衛門

多田屋治兵衛吉本屋六兵衛山屋五兵衛鶴田屋庄三郎金尾屋直七郎谷本屋

卯八炭屋理右衛門備前屋幸八岡本屋重吉獻納

(二十八) 源氏細流 筆者不詳 十冊

(二十九) 朗詠集 藤原實隆筆 一冊

(三十) 伊勢物語 吉田兼好筆 一冊

(三十一) 延寶三年當宮社領境目繪圖 紙本著色 一帖

(三十二) 韓退ノ像筆者不詳 印文云明昌御題 絹本墨畫 一幅

讚岐琴平從六位琴綾光熙獻納

貴重品之部 (貴書)

(三十三) 大色紙 從一位近衛忠熙筆 紙本和歌 一幅

(三十四) 大色紙 大納言綾小路有長筆 和歌 一幅

(三十五) 色紙 藤原定家筆 古筆了伴極付 箱黒糝紅葉鹿金蒔繪 一枚

- (九) 古語 松平讚岐守賴墨筆 紙本墨書 一幅 高松城主松平讚岐守賴重獻納
- (一〇) 牽牛花圖 狩野常信筆 紙本墨畫 一幅 石見六日市驛 廣兼繁子獻納
- (一一) 柳鷺圖 狩野探信筆 絹本墨畫 一幅 同 廣兼昌作獻納
- (一二) 出山釋迦梅竹圖 狩野尚信筆 紙本墨畫 三幅 狩野尚信獻納
- (一三) 文殊菩薩普賢菩薩像 狩野宗秀筆 紙本墨畫 二幅
- (一四) 當山十二景圖 狩野時信筆 林氏贊 紙本著色 十二幅 酒井備後守忠朝獻納
- (一五) 古語 僧石天并僧大梁筆 絹本著色 二幅
- (一六) 王昭君圖 僧祐常筆 絹本著色 一幅
- (一七) 蘭亭圖記 池大雅筆 絹本墨畫 一幅 從七位曾根大太郎獻納
- (一八) 落雁圖 宮本二天筆 紙本墨畫 一幅
- (一九) 山水圖 長町竹石筆 絹本墨畫 一幅
- (二〇) 扇面旭日鶴龜圖 司馬江漢筆 絹本著色 一幅
- (二一) 網敷天神像 筆者不詳 紙本著色 一幅 京都人 某獻納
- (二二) 葡萄栗鼠圖 森寬齋筆 絹本重畫 一幅 京都上京區 森寬齋獻納

森寬齋自筆奉納記一葉

關公圖 池大雅筆



- (四) 白鷹圖 宋徽宗皇帝筆 絹本著色 一幅
 - (五) 福祿壽圖 傳云王元章筆 絹本著色 一幅
 - (六) 當山十二境詩 僧祖緣書 一軸
 - (七) 當山十二境詩 熊谷立閑書 一軸
 - (八) 當山十二境詩 皆川愿書 一軸
 - (九) 當山十二境詩 林春齋林吞常書 一軸
 - (一〇) 當山十二境詩 僧宗安書 一軸
 - (一一) 當山十二境詩 清國僧雷音博書 一軸
 - (一二) 當山十二境詩 僧東竺外五山諸僧書 一軸
 - (一三) 當山十二境詩 藤澤南岳書 一軸
 - (一四) 當山十二境詩 僧宗愿僧元晃僧祖璠書 一軸
 - (一五) 當山十二景圖 狩野常真筆 著色 二軸
 - (一六) 摩訶般若心經 德川吉子筆 紺紙金書 一軸
 - (一七) 法華經 筆者不詳 紙本墨書 八軸
 - (一八) 法華經 酒井雅樂頭忠通筆 紺紙金書 一帖
- 德川芳樹院獻納
姬路城主酒井雅樂頭忠通獻納

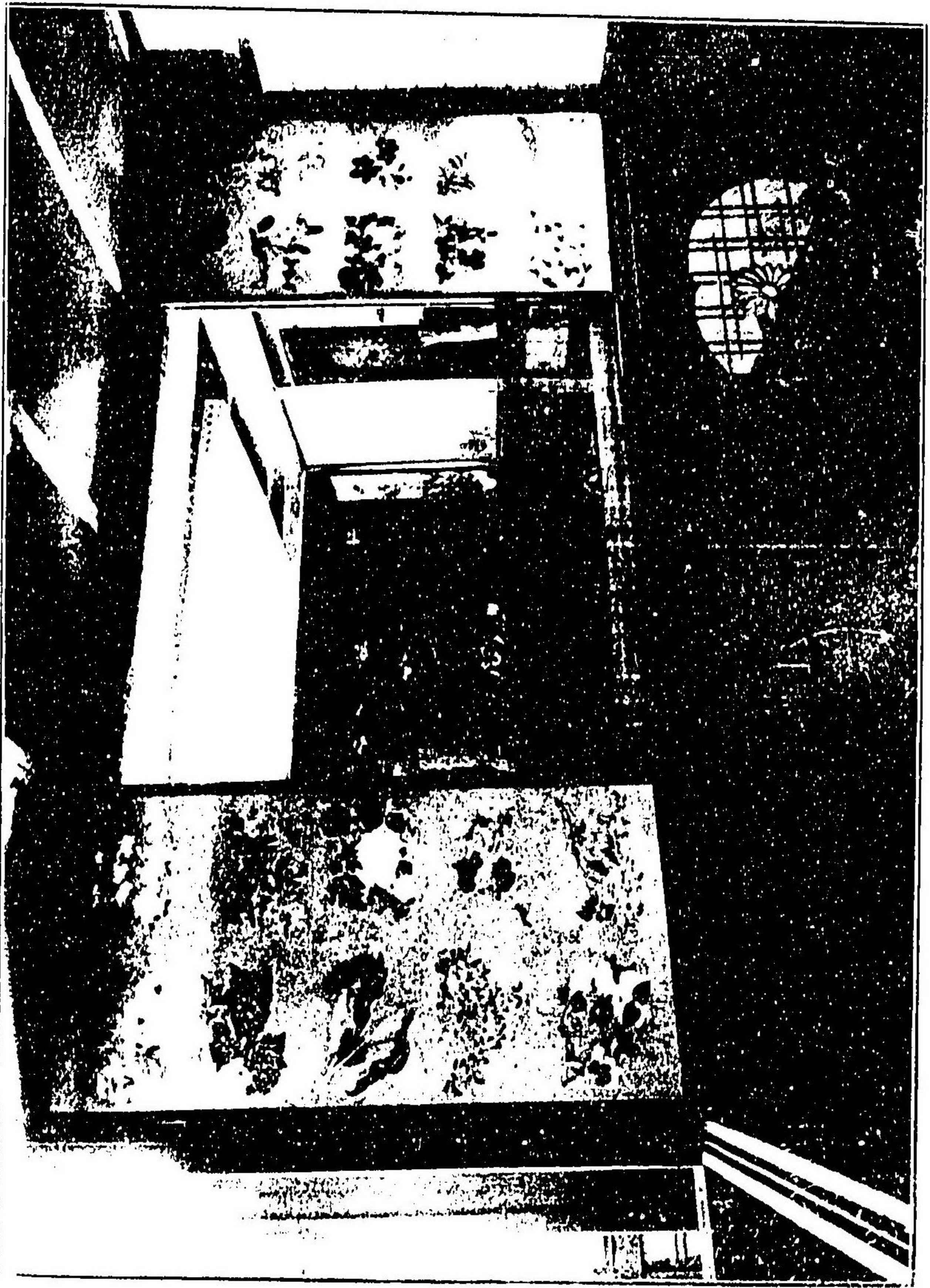
- (三) 飭車圖 冷泉為恭筆 絹本著色 一軸 池村邦則獻納
- (四) 禮儀類典圖會勝本 紙本著色 一軸 京都
- (四) 法樂連歌 宗養筆 永錄五年十一月 一軸
- (四) 法樂連歌 岩手次左衛英方筆 寬永六年 一軸
- (四) 支那地圖 六卷 讚岐國豐田郡觀音寺町北野久平北野增吉獻納
- (四) 御太刀圖 一軸 東京本郷區湯島天神町塚田秀鏡獻納
- (四) 松平右京大夫賴重筆 象頭山緣起模本 一軸 高松城主松平讚岐守賴重獻納
- (四) 謠本江口 宗海筆 一軸 讚岐國琴平 菅善次獻納
- (四) 春日社遷宮調度目錄 但元冷泉為恭藏品 紙本墨書 一軸
- (四) 手向山八幡宮神寶圖 但全 上 紙本著色 一軸
- (四) 正倉院寶物圖 但全 上 紙本著色 二軸
- (五) 法隆寺寶物圖 但全 上 紙本上卷著色下卷墨畫 二軸
- (五) 春日神鹿鞍圖 富田光美筆 紙本著色 一軸
- (五) 奈與竹物語繪卷模本 但元冷泉為恭藏品 紙本墨畫 一軸
- (五) 須家集要抄 但全 上 紙本著色 三軸

- (四) 永安五節圖模本 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (五) 加茂神社御蔭祭圖模本 松林連香模但全上 紙本著色 一軸
- (五) 蒙古襲來繪詞模本 但全 上 紙本著色 二軸
- (五) 平家公達卷模本 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (五) 中殿御會圖模本 冷泉為恭模 但全 上 紙本著色 一軸
- (五) 信貴山緣起飛倉卷模本但全 上 紙本著色 一軸
- (六) 信貴山緣起拔書 源恭義模 但全 上 紙本著色 一軸
- (六) 誓願寺緣起模本 但全 上 紙本著色 二軸
- (六) 清水寺緣起模本 但全 上 紙本著色 一軸
- (六) 唐招提寺緣起模本 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (六) 粉川寺緣起模本 但全 上 紙本著色 一軸
- (六) 年中行事模本拜禮卷 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (六) 同 平野祭卷 但全 上 紙本墨畫 二軸
- (六) 同 朝觀行幸卷 但全 上 紙本著色 一軸
- (六) 同 關白春日詣卷 但全 上 紙本墨畫 一軸

(六)	同 御燈卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	同 大饗卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	同 著跡政卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	同 賀茂臨時祭卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	同 印地祭卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	同 真言院御修法并御齋會卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(六)	同 祭祀卷	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(七)	法然繪傳模本	狩野永納模	冷泉為恭模	但全	上	紙本 二十二軸
(七)	俵藤太雙紙模本	源清三模	但全	上	紙本墨畫 一軸	
(七)	春日權現驗記模本	但全	上	紙本	二十一軸	
(八)	長谷寺緣起模本	冷泉為恭模	但全	上	紙本墨畫 二軸	
(八)	山門僧傳模本	浮田一蕙模	但全	上	紙本著色 一軸	
(八)	承安五節圖模本	但全	上	紙本著色 一軸		
(八)	勝繪模本	冷泉為恭模	但全	上	紙本墨畫 一軸	
(八)	犬退切圖模本	伊勢平藏貞丈模	但全	上	紙本著色 一軸	

(八)	古樂圖模本	源恭儀模	但全	上	紙本墨畫	一軸
(八)	義經軍記繪卷模本	但全	上	紙本著色	三軸	
(八)	六波羅行幸繪詞模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(八)	長谷寺緣起十三重塔供僧繪卷模本	但全	上	紙本著色	一軸	
(八)	尚齒會圖模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(九)	後醍醐天皇宸影及藤原藤房像模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(九)	三十六歌仙像模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(九)	承久三年具注曆模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(九)	執筆法使筆法模本	但全	上	紙本墨畫	一軸	
(九)	十二類合戰繪詞書模本	源行納模	但全	上	紙本	三軸
(九)	佐理卿筆蹟模本	冷泉為恭模	但全	上	紙本墨畫	一軸
(九)	神影及佛像模本	但全	上	紙本墨畫	二軸	
(九)	畫師雙紙模本	但全	上	紙本著色	一軸	
(九)	親鸞上人繪傳模本	但全	上	紙本著色	一軸	
(九)	西園寺車繪圖模本	但全	上	紙本著色	一軸	

(100)	行幸繪卷模本	但全	上	紙本墨畫	一軸
(101)	古瓦楊本	但全	上	紙本	二軸
(102)	水鳥寫生圖	田中訥言筆	但全	紙本著色	一軸
(103)	歌合圖模本	但全	上	紙本著色	一軸
(104)	古筆模本	但全	上	紙本墨書	一軸
(105)	山水屏風繪模本	但全	上	紙本著色	三軸
(106)	佐用姬明神鬼面圖	但全	上	紙本墨畫	一軸
(107)	神寶平胡籬圖	冷泉爲恭寫	但全	紙本墨畫	一軸
(108)	車輿圖 固禪寫	但全	紙本	一軸墨畫	二軸著色
(109)	宸影及肖像模本	但全	上	紙本墨畫	三軸
(110)	相撲舞樂圖	但全	上	紙本墨畫	一軸
(111)	武者繪粉本	但全	紙本	一軸墨畫	一軸著色
(112)	車圖記 石山三位師香畫	但全	高丘三位季起書	但全	紙本
(113)	裝束調度圖	但全	上	紙本	四軸
(114)	絲毛車圖說	冷泉爲恭考證并圖記	但全	紙本墨畫	五枚



社務所東書院及同上段奥床張附

(二五)	粉本	冷泉爲恭筆	但全	上	紙本著色	一軸
(二六)	類聚故實神寶卷		但全	上	紙本著色	一軸
(二七)	同 假字卷	冷泉爲恭撰	但全	上	紙本墨書	二軸
(二八)	同 古記錄卷		但全	上	紙本墨書	一軸
(二九)	同 紋樣卷		但全	上	紙本墨書	一軸
(三〇)	同 文房具卷		但全	上	紙本墨書	一軸
(三一)	同 屏風卷		但全	上	紙本著色	一軸
(三二)	同 古瓦卷		但全	上	紙本墨書	一軸
(三三)	同 木器卷	意染寫	但全	上	紙本墨書	一軸
(三四)	同 類聚雜要鈔異本殘闕卷		但全	上	紙本著色	一軸
(三五)	太刀圖		但全	上	紙本墨書	三軸
(三六)	官服著用圖		但全	上	紙本墨書	一軸
(三七)	菅神像模本	冷泉爲恭模源恭儀模	但全	上	紙本著色	一軸
(三八)	神宮御神寶圖		但全	上	紙本著色	三軸
(三九)	天逆鉾圖		但全	上	紙本墨書	一軸
(四〇)	古畫拔寫		但全	上	紙本墨書	一軸

- (三二) 甲冑圖 但全 上 紙本 一軸墨畫 一軸著色 二軸
- (三三) 正倉院寶物圖 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (三四) 東大寺若宮八幡宮鳳翥花燈圖 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (三五) 今出河家傳領琵琶殿圖 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (三六) 古升圖 冷泉爲恭寫 但全 上 紙本著色 一軸
- (三七) 神代系圖 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (三八) 文集卷第四 但全 上 紙本墨畫 一軸
- (三九) 金剛界瑜伽畧述三十七尊心要 釋覺聖點 但全上 紙本墨畫 一軸
- (四〇) 粉本 浮田一蕙筆 但全 上 紙本著色 一軸
- (四一) 書額字 伊達春山筆 語云大觀 紙本 一枚 從二位伊達宗紀獻納
- (四二) 社務所與書院上段張附繪畫 伊藤若冲筆 紙本金砂子地著色
- (四三) 床張附正面左右共 (插圖參照)
- 草花圖 三枚
- 落掛上張附
- 草花圖 一枚

- 長押上下張附
- 草花圖 五枚
- 脇床張附
- 草花圖 三枚
- 襖
- 草花圖 四枚
- 明障子腰張
- 草花圖 (中川馬鹿筆) 二枚
- (四四) 社務所與書院張附并襖繪畫 岸俗筆 紙本金地著色
- 春ノ間 (稱二之間) (插圖參照)
- 襖
- 春野稚松圖 八枚
- 長押上下張附
- 春野稚松圖 七枚
- 明障子腰張

水邊草花圖

三枚

菖蒲ノ間 (稱三之間) (挿圖參照)

襖

水邊菖蒲水鳥圖

八枚

長押上張附

群蝶圖

四枚

明障子腰張

澤瀉圖

八枚

柳ノ間

床張附正面左右落掛上共金無地

四枚

襖

水邊柳樹白鷺圖

六枚

長押上下張附

水邊柳樹白鷺圖

十四枚

明障子腰張

岩石圖

六枚

款云天保十五年歲次甲辰夏日同功筑前介岸岱寫

明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ

テ美術上ニ要用ナルモノト認定セラル

(一咫)

社務所奥書院上段脇床袋戸山水圖

狩野直信筆 紙本墨畫 四枚

(二咫)

社務所表書院富士之間張附并襖繪畫

村田丹陵筆 紙本 四枚

富士上ノ間

床張附正面左右共

富嶽圖 墨畫

三枚

長押下張附

富嶽圖 墨畫

二枚

襖

富士裾野圖 墨畫

八枚

明障子腰張

富士裾野圖 墨畫

四枚

富士下ノ間

襖

富士牧村圖 著色

十六枚

明障子腰張

陸幕圖 伊藤紅雪筆

八枚

右繪畫ハ明治三十五年八月社費ノ補助ヲ以テ筆者丹陵村田

坊ノ戲納スルトコロナリ

(一五) 社務所表支關床張附檜樹鷺圖

森寬齋筆

紙本金地墨畫 三枚

(一五) 社務所小座敷二階上間小襖琴基書畫圖

冷泉爲恭筆

紙本金地著色 四枚

(一五) 蘭陵王衝立 岸岱筆 紙本金地著色

一基

表蘭陵王圖 裏櫻樹太鼓圖

(一五) 禁中繪圖

一枚

(一五) 金光院繪圖

二枚

(一五) 當宮神事場繪圖

二枚

(一五) 琴平山圖

十二枚

(一五) 當宮舊社殿圖

二枚

(一五) 當宮社殿圖

十六枚

(一五) 田面繪圖

五枚

(一六) 繪圖

一枚

(一六) 讚岐國大繪圖模本

一枚

生駒讚岐守高俊獻納

什物之部 (什書)

(三) 歷代皇陵圖

一幅

(三) 文宣王像

一幅

(四) 詣琴平社詩

伯爵井上馨筆

絹本

一幅

(五) 尙書中之語

重野成齋筆

絹本

一幅

(六) 題錦流亭詩

森春濤筆

紙本

一幅

(七) 和歌

藤波東閣筆

二幅 東京府

(八) 皇朝七福神圖

那須賢直筆

絹本

一幅

子爵藤波言忠獻納

(九) 群蟹圖

眞鍋直平筆

紙本

一幅

- (一〇) 四國新道開鑿起工式圖 合葉快堂筆 一幅
 - (一一) 旌烈碑榻本 紙本 一幅
 - (一二) 靈驗記榻本 紙本 一幅
 - (一三) 書 三島中洲筆 紙本 一幅
 - (一四) 琴平十二勝詩 和紀醉石筆 一卷
 - (一五) 書畫帖 一帖
 - (一六) 當宮繪馬鑑 筆者不詳 紙本著色 八帖
 - (一七) 書 三島中洲筆 紙本 一枚
 - (一八) 書 百外筆 紙本 一枚
 - (一九) 金毘羅大權現靈驗記碑榻本 一枚
 - (二〇) 潮川神事場碑榻本 一枚
 - (二一) 本宮舊圖 十七枚
 - (二二) 本宮壁板蒔繪櫻圖 一枚
 - (二三) 琴平山圖 一枚
- 從五位三島毅獻納

- (二四) 箱根葦湖圖襖繪 岡本常彥筆 紙本墨畫 三十五枚
- (二五) 賀茂競馬圖衝立 森寬齋筆 絹本著色 一基
- (二六) 裏岩石稚松圖 同筆 絹本墨畫
- (二七) 當山十二景書畫帖 書絹本墨書 畫絹本著色 一帖
- (二八) 書筆者 矢土錦山 小中村清矩 黒川真頼 久米幹文 日下部鳴鶴
本居眞頼 森槐南 福羽美都 巖谷一六 伊東聽秋 岡本貴石
松原竹秋
- (二九) 畫筆者 河鍋曉齋 森雄山 河端玉章 平福穂庵 服部波山 福島柳圃
河邊花陵 松本楓湖 柴田是真 菅原白龍 瀧和亭
- (三〇) 當山十二景書帖 絹本墨書 一帖
- (三一) 筆者 森春濤 神波即山 鈴木重嶺 大沼枕山 永坂石環
- (三二) 明治二十七八年戰役寫真帖 三帖
- (三三) 懷紙 御歌所長男爵高崎正風筆 一枚 東京市 男爵高崎正風獻納
- (三四) 詩 隱岐重節書 紙本 一幅 陸軍少將正五位隱岐重節獻納
- (三五) 琴平山圖 河端玉章筆 絹本著色 一枚

- (三) 琴平山櫻露圖 河邊花陵筆 絹本著色 一枚
- (三) 大和舞圖 原在泉筆 絹本著色 一枚
- (三) 八少女舞圖 原在泉筆 絹本著色 一枚
- (三) 砲彈畫贊 元帥海軍大將子爵伊東祐亨筆 絹本墨畫 一幅

崇敬講社本部特別備品之部 (講書)

- (講書) 書 日下部鳴鶴筆 紙本墨書 二幅
- (講書) 書 市河米庵筆 紙本墨書 一幅
- (講書) 爲朝護白河殿圖 高橋廣湖筆 絹本著色 二幅 東京淺草三好高橋熊記獻納
- (講書) 四季草花圖 森寬齋筆 絹本著色 一幅
- (講書) 山水圖 僧雪舟筆 紙本墨畫 一幅
- (講書) 三河八橋圖 住吉慶舟筆 絹本著色 一幅 讃岐國琴平 琴陵光熙獻納
- (講書) 牡丹孔雀圖衝立 松浦春舉筆 紙本著色 一基
- 裏河骨鯉圖 同筆 紙本著色
- (講書) 講社本部小座敷上間床脇袋戸群畫圖 森寬齋筆 紙本著色 四枚

- (講書) 同 上 上間襖繪春景花鳥圖 森寬齋筆 絹本著色 四枚
- (講書) 同 上 次間襖繪秋景群鹿圖 森寬齋筆 絹本著色 八枚
- (講書) 同 本部二階上間床脇袋戸油繪貝圖 高橋山一筆 四枚
- (講書) 同 小座敷三間床脇袋戸油繪墨田川夜景圖 高橋山一筆 二枚

第八種 扁額屏風類

寶物之部 (寶扁)

(三) 六歌仙扁額 浮彫木製著色 六面

有馬左衛門賴利室清涼院獻納

和歌筆者左ノ如シ

後京極攝政 鷹司房輔筆

慈鎮和尚 近衛右大臣基熙筆

俊成 有栖川宮幸仁親王御筆

西行法師 一條內大臣內房筆

權中納言定家 青蓮院宮尊證親王御筆

從二位家隆 梶井宮盛胤親王御筆

(三) 三十六歌仙扁額 金地著色 三十六面

生駒讚岐守正俊獻納

(四) 三十六歌仙扁額 金地著色 三十六面

高松城主松平右京大夫賴重獻納

和歌并ニ畫像筆者左ノ如シ

日光宮尊敬親王御書

狩野探幽齋守信畫

凡河內躬恒 青蓮院宮尊純親王御書

狩野探幽齋守信畫

中納言家持 右御同筆

右同筆

在原業平朝臣 右御同筆

右同筆

素性法師 右御同筆

右同筆

猿丸大夫 妙法院宮堯然親王御書

右同筆

中納言兼輔 圓滿院門跡大僧正常尊書

狩野自適齋尙信畫

中納言敦忠 右同筆

右同筆

源公忠朝臣 竹內宮良尙親王御書

右同筆

齋宮女御 右御同筆

右同筆

藤原敏行朝臣 高倉大納言永慶書

右同筆

源宗于朝臣 右同筆

右同筆

藤原清正 妙法院宮堯然親王御書

右同筆

藤原興風 右御同筆

右同筆

坂上是則 竹屋參議光長書

右同筆

小大君 右同筆

右同筆

大中臣能宣朝臣 滋野井大納言季吉書 右同筆
 平兼盛 右同筆
 紀貫之 青蓮院宮尊純親王御書 狩野探幽齋守信畫
 伊勢 右御同筆 右同筆
 山邊赤人 梶井宮盛胤親王御書 右同筆
 僧正遍昭 滋野井大納言季吉書 右同筆
 紀友則 青蓮院宮尊純親王御書 右同筆
 小野小町 右御同筆 右同筆
 中納言朝忠 高倉大納言永慶書 狩野牧心齋永真安信畫
 藤原高光 右同筆 右同筆
 壬生忠岑 竹內宮良尚親王御書 右同筆
 大中臣賴基朝臣 右御同筆 右同筆
 源重之 圓滿院門跡大僧正常尊書 右同筆
 信明朝臣 右同筆 右同筆
 源順 青蓮院宮尊純親王御書 右同筆

清原元輔 實相院門跡大僧正義尊書 狩野牧心齋永真安信畫
 藤原元真 梶井宮慈胤親王御書 右同筆

平仲文 右御同筆 右同筆
 壬生忠見 小川坊城中納言俊完書 右同筆
 中務 右同筆 右同筆

(五) 扁額 清國翰林院侍讀探花及第王文治書 語云降神觀 木彫著色 一面

(六) 扁額 清國人譚楷書 語云尋聲救苦 木彫著色 一面 清國人 劉雲蟻獻納

(七) 扁額 琉球國人幸周書 語云德並照臨 木彫著色 一面 琉球國人 幸周獻納

(八) 榜聯 清國人徐恭書 語云契寔之妙高矣無頂應物之權廣也巨際 一對 琉球國人 筑登之幸周獻納

(九) 榜聯 清國人程赤城書 語云高開法海慈悲眼普濟人天業果身 一對 清國人 荷舟徐恭獻納

(一〇) 榜聯 琉球國人比嘉仁屋書 語云履險獲安蒙聖庇渡閩返國報神恩 一對 清國人 程赤城獻納

- (二) 當山社頭并大祭行列圖六曲屏風 日本繪師岩佐清信筆 琉球國人比嘉仁屋獻納 紙本著色 一雙
- (三) 夏冬山水圖六曲屏風 狩野探幽齋守信筆 紙本墨畫 一雙
- (三) 源氏物語圖六曲屏風 傳云土佐光元筆 紙本著色 一雙

貴重品之部 (貴扁)

- (一) 扁額 有馬常諦院書 語云神妙 絹本墨書 一面 有馬常諦院獻納
- (二) 二見浦圖油繪扁額 高橋一由筆 一面 東京 高橋由一獻納
- (三) 隅田川圖油繪扁額 高橋一由筆 一面 東京 高橋由一獻納
- (四) 品川沖圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一獻納
- (五) 文庫扁額 僧賢賀書 一面 大阪堂島橋屋新三郎獻納
- (七) 猿圖扁額 森狙仙筆 紙本金砂地著色 一面 江戸住 吉次獻納
- (八) 舞樂羅陵王圖扁額 谷文晁筆 桐金箔地著色 一面 中島定次郎獻納
- (九) 源為朝射強弓圖扁額 菊地容齋筆 桐生地著色 一面 東京松本楓湖獻納
- (一〇) 為朝護白河殿圖扁額 松本楓湖筆 從金箔地著色 一面 東京松本楓湖獻納
- (一一) 六歌仙圖扁額 瀧本坊昭乘筆 紙本著色 元冷泉為恭藏品 一面

(三)

懷紙八曲屏風 懷紙六十四枚貼付

一雙

歌題竹裏聽鶯聲 享保二年正月二十四日一塵懷紙

筆者 二條左大臣綱平 伏見宮中務卿邦永親王 鷹司從一位兼熙 二條內大臣吉忠 久我從一位通誠 廣幡權大納言源豐忠 西園寺權大納言藤原致季 正親町三條權大納言藤原公統 坊城權大納言藤原俊清 久我權大納言源惟通 一條權大納言藤原兼香 鸞尾權大納言藤原隆長 中院正二位源通躬 冷泉權中納言藤原為綱 滋野井權中納言藤原公澄 六條權中納言源有藤 油小路左衛門督藤原隆典 今出川權中納言藤原公詮 冷泉民部卿藤原為經 武者小路從二位藤原實陰 風早參議藤原公長 桑原式部權大輔菅原長義 石野參議藤原基顯 水無瀨刑部卿藤原氏孝 阿野參議左近衛權中將藤原公緒 甘露寺參議左大辨藤原尙長 園參議左近衛權中將藤原基香 藤波從二位大中臣景忠 岡崎正三位藤原國久 石山左兵衛督藤原師香 藤波神祇權大副大中臣德忠 伏原大藏卿清原宣通 愛宕正三位源通晴 藤谷左兵衛督藤原為信 芝山正三位藤原廣豐 西大路從三位藤原隆榮 冷泉從三位藤原為久 中御門從三位藤原宣顯 外山從三位藤原光和 六角從三位藤原

- 益通 竹內從三位源惟永 白川神祇伯雅冬玉 高倉從三位藤原永房 高辻從三位菅原總長 大宮左近衛權中將藤原公央 清水谷左近衛權中將藤原雅季 三條西右近衛權中將藤原公福 山科內藏頭藤原堯言 北小路中務大輔藤原德光 敏左近衛權中將藤原嗣義 千種左近衛權中將源有統 持明院左近衛權中將藤原基雄 植松左近衛權中將源雅康 五條少納言菅原為範 綾小路右近衛權中將源俊宗 武者小路左近衛權中將藤原公野 花園右近衛權中將藤原實仲 風早右近衛權中將藤原實積 日野右兵衛佐藤原資時 五辻彈正少弼源廣仲 堀河中務權大輔藤原康致 今城右近衛權中將藤原定種 梅園左近衛權中將藤原久季 七條左近衛權中將藤原信方
- (四) 西湖八景圖六曲屏風 傳云僧雪舟筆 紙本金砂子地墨畫 一雙
- (五) 富嶽杉樹圖六曲屏風 狩野永德筆 紙本著色 一雙
傳云豐臣秀吉伏見桃山殿元所藏永德百雙屏風ノ一
- (六) 蘆白鷺圖六曲屏風 傳云狩野永德筆 紙本著色 一雙
- (七) 野馬圖六曲屏風 松本山月筆 紙本著色 一雙

什物之部 (什扁)

- (一) 琴平山圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一獻納
- (二) 魚圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一獻納
- (三) 軍艦比叡圖水彩畫扁額 落合某筆 一面
- (四) 花鳥圖白磁扁額 白地著色 一面 伊豫國五本松村向井和平獻納
- (五) 唐錢扁額 白地著色 一面 越中新川滑川吉田佐四郎獻納
- (六) 山水圖染附白磁五山庭屏風 一面 雙
- (七) 前後赤壁賦六曲屏風 清國人王蘭谷及劉雲臺書 一雙
- (八) 童舞還城樂圖扁額 四山應瑞筆 楓金箔地著色 一面 京都二條新町小西伊兵衛獻納
- (九) 古金銀嵌入幣扁額 京都二條新町小西伊兵衛獻納
- (一〇) 鷺圖扁額 森一鳳筆 樅地著色 一面 攝津尼崎 本田甚右衛門獻納
- (一一) 雲龍圖扁額 岸駒筆 紙本墨畫 一面 對馬嚴原城主松平對馬守獻納
- (一二) 白拍子演舞圖扁額 中務權守法眼文周筆 絹本著色 一面 越後嘉茂明田川仁右衛門獻納
- (一三) 濱田彌兵衛圖扁額 佐藤正持畫 大國隆正贊 檜板地著色 一面